
タダシイ冒険の仕方【改訂版】

イグコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダシイ冒険の仕方【改訂版】

【Nコード】

N3901Y

【作者名】

イグコ

【あらすじ】

「プラティニ学園」ローラス共和国最大の冒険者育成機関である。そこへ通う主人公リジアは魔術師を目指すソーサークラスに所属。愉快で気の合う仲間に囲まれながらも、ちょっと困った事態に陥っていた。無事、立派な冒険者に成るために卒業を目指す、若い見習い達のお話し。——剣と魔法の異世界を舞台にしたちょっと懐かしい雰囲気ノライトノベル風ファンタジー。分割していたものを改訂しながら一つに纏めさせてもらいます。

黒の魔女たち

わたしの一日は悪魔の話しで始まる。

「悪魔召喚なんてリスク高すぎるよね。得られるメリットもデメリットに比べて魅力無いし。術式一つ間違えただけで異界に飲み込まれるなんて、試そうって気にもなれないもん」

「命と交換しても世界をぶっ潰したいとか、狂人ならのめり込むのかもな」

目の前のクラスメイト、黒髪の優等生ロレンツはわたしの乙女らしからぬ話題に眉間に皺寄せつつも頷く。わたしは向かう机の傍らに置いてあった魔術書をぼんぼんと叩いた。

「でも魔術書なんて難しいものになればなるほど、未完成な部分が多いじゃない。わたし達が勉強してる魔術書にも間違いや欠落箇所があつたら、って思うと不安になってこない？」

身を乗り出すわたしの真横、廊下に面した窓がゆっくりと開いて気難しい顔が覗く。

「建前だけは一丁前だな、リジア・ファウラー」

こちらを見下ろすのはプラティニ学園ソーサリークラスの教官。

わたしの学年の学年主任を務めるメザリオ教官である。名前を呼ばれたわたしは思わず立ち上がった。

「は、はい！」

広い教室にわたしの声が響き渡る。何かといった様子で振り返るクラスメイトは全員が真っ黒のローブを着こんでいて、目だけが爛々としているように見えた。

メザリオ教官は自慢の口髭を触る癖を見せた後、教室中に聞こえるよう声を張り上げる。

「今日の『古代語魔法』の授業は実習だ！全員、第一演習場までくるように」

それを聞いて一気に気分が落ち込む。皆が立ち上がりがやがやと

騒がしくなる中、わたしは少々わざとらしいまでに大きなため息をついた。

「実習か。今日の被害はどれほどかねえ……」

肩を竦めるロレンツにわたしは魔術書を振り上げる。が、さらりと避けられてしまった。睨むわたしとせせら笑うロレンツ。そこへメザリオ教官が「馬鹿共」と割って入る。

「ロレンツ・ダフィネ、お前は授業前の準備として演習場に結界を張っておいてくれ。あと、手本を見せてもらうからそのつもりで」

教官に言われたロレンツは眼鏡の下顔を露骨に歪めた。

「優等生は大変ねえ。教官から頼りにされちゃって」

去っていくメザリオ教官の緑色のローブを眺めながらわたしが言う、ロレンツは立ち上がり口を開く。

「まったく嫌になるよな。単に優秀なだけで仕事が増えるんだからお前が羨ましいぜ」

ぽんぽんと出る嫌味にかつとして彼の黒いローブに手を伸ばすが、またしても軽く身を引かれ、ロレンツは口笛吹きつつ教室を出て行ってしまった。

教官の前で実際に魔法を披露する実習の授業はわたしが最も嫌いなものの一つだ。それでも授業を抜けるわけにはいかない。肩を落としてながらわたしも教室を出た。

真っ黒のローブが廊下にずらずらと並ぶ様子は見慣れない人から見たら異様な光景に違いない。でもここプラティニ学園魔術師科では当たり前前の光景だ。魔術師を目指すソーサリークラスでは黒のローブを着ることが主流になっているのだ。

「今日も可愛い格好ね、リジア。貴方の金髪によく合ってる色だと思っわ」

そう言ってわたしの腕を取ってきたのはクラスメイトのキーラ。彼女自身の見事な金髪がかき上げられると女のわたしでも見とれるような美人の顔が現れる。どこか大人びた雰囲気彼女はいつも皆を一步引いたところで見ている、そんな人だ。キーラの豊満な胸が

腕に当たり、わたしは赤面する。

「どうして黒のローブが嫌いなの？」

わたしの薄いラベンダー色のローブを触りながらキーラが尋ねてくる。わたしは口を尖らせつつ答えた。

「……可愛くないから」

それに対してキーラは嬉しそうにくすくす笑った。

「まあ別に魔術師が黒いローブを着る、なんて決まり事は無いしね。……ほら、隣のクラスの派手なこと」

ちょうど通り掛かった教室の中をキーラは指差す。『プリーストクラス』、わたしの所属するソーサリークラスの隣りにあるクラスだ。ソーサリークラスが魔術師を目指すクラスならプリーストクラスは神官、巫女といった神職者を目指すクラスになる。同じ魔術師科だがプリーストクラスは華やかだ。それぞれが自分の信仰する神のシンボルカラーに沿ったローブを身に纏っているので白、青、赤といった鮮やかなものが多い。

ローブも華やかなら顔も華やか。清楚で可愛い子が多い、というのも学園での通説になっている。間違っても朝からデーモンの話しをする子はいない。同じ魔法を習う女子多めの構成なのにソーサリークラスとは対極といえる。

そんな華やかな女の園の中、一際目立つ姿が教室の中心に見える。クラスメイトの女の子達に囲まれ笑顔を振り撒く美男子。肩まである綺麗な金髪に青い瞳、そして端正な顔をした彼はヴィクトル・アズナブルという。白地に金の刺繍が入った豪華なローブを着こなす姿は王族のようにも見えた。のだが、

「やだあ！アンタってば大胆なのねえ！」

廊下まで響き渡るオカマボイスに隣りにいるキーラがふふ、と笑う。

「今日も元気ね、『ローザちゃん』」

見た目はイケメン王子様、中身は乙女のオカマちゃんヴィクトル・アズナブル——通称『ローザちゃん』はここプラティニ学園の名

物でもあつた。

「ロレンツ・ダフィネ、前に出なさい」

「はい」

メザリオ教官の指示に立ち上がると、ロレンツは広い演習場内を歩いていく。いやらしく眼鏡を上げながら大きな的の前に立つと、呪文を唱えていった。彼の声に空气中を漂う未知の粒子、マナが応え、震える。

やがてロレンツの胸の前に赤い火の玉が現れる。凝縮したマグマのようなそれは、的を指差すロレンツの動作に合わせて飛んでいく。「ファイアーボール！」

灰色の的に当たった瞬間、轟音が鳴り響く。爆発した火の玉が視界を赤く染めた。思わず目を瞑る生徒もいる。特殊素材で出来た灰色の巨大な的是形こそ保っているが、着弾した箇所が赤黒く染まっていた。

「お見事！」

メザリオ教官の声につられて皆、ロレンツに拍手した。照れくささの裏返しなのかロレンツの気難しい顔が更に仏頂面に変わった。

「さ、次は一人ずつ私の前で披露してもらうぞ。並んで並んで」

教官に言われて率先して前に並ぶ者、わたしと同じように小さくなりながら後ろの方に並ぶ者、その差は自信の有る無しに違いない。出来れば逃げ出したいわたしは最後尾に並び、『永遠に列が途切れなきやいいのに』と思いながら痛くなってきたお腹を摩った。

一人一人順番に『ファイアーボール』を披露していく。ロレンツと同じように綺麗に的へ当てる人もいれば、豪快に天井へと放つてしまう人もいる。かと思えば的まで届かず床に小さな焦げを作るだけの臆病な人もいた。魔法というのは個人の性格が表れやすいのだ。その全てが建物に被害を出していないのは、普段から演習場一帯に教官達が施した結界が何重にも張られているからだ。ロレンツが

先程頼まれたのは「ダメ押し」なのだ。そこまで慎重になる理由には、今日の実習がファイアーボールという比較的攻撃力の高い魔法であることと、もう一つある。

「……最後か。リジア・ファウラー、さ、やってみなさい」

心なしが教官の声が裏返る。周りにいる皆の空気も一変し、ぴんと張り詰めた。ごくり、と喉を鳴らしたのはわたし本人だけじゃなかったはずだ。

わたしはつつかえつつかえしながら呪文を唱えていく。つつかえるのは呪文の詠唱の暗記が覚束ないからではない。不安だからだった。

やがてわたしの胸の前に現れた火の球に演習場がざわつき始める。皆のものより明らかに大きくわたしの背丈の半分は有りそうなファイアーボールの火の玉は、形もいびつに変わりまくり汚い。

「ファイアーボール！」

わたしのヤケクソの発動の言葉の後、演習場には生徒の恐怖の悲鳴が響き渡った。

「いやー！」

「やだ！こつち来ないでよ！」

わたしの放った火の玉は的へ飛ぶどころかゆらゆらと不気味な動きで演習場内を漂い始める。右へいたり左へ行ったり、生きているかのように飛び回った。

「お、落ち着け！落ち着いて外へでなささい！」

自身も全く落ち着いていない声でメザリ才教官が叫んだ。火の玉が動いたたびに絶望したような悲鳴の合唱。わたしはといえばただ啞然と腰を抜かしているだけだった。

「ばか！お前も出るんだよ！」

ロレンツがわたしの腕を引っ張り持ち上げる。我に返ったわたしは入り口へと走った。その瞬間、地面を揺らす爆音が後方から響き渡り、足がふらつく。振り返ると嚴重な結界を施してあるはずの演習場の壁が一部消え去り、表の美しい空を覗かせていた。

一瞬の遅れの後に襲いかかる熱風に息が止まる。「火事よ!」という叫びの通り、演習場に炎が広がり始めている。危険が来襲した際に鳴り響く警報が非日常感を加速させた。

「どうした!？」

「生徒は無事か!？」

駆けつけた他の教官達の無事を確認する声に混じって「またかよ……」という呆れの声もする。

全員の無事を確認した教官達が消火活動を開始する後ろで、わたしはひたすら冷たい視線に晒された。

「はあ……、本当勘弁して欲しいわ」

「自爆するなら勝手だけだね。巻き込まれるのは御免よ……」

クラスメイトのひそひそとする声に小さくなるしかない。普段なら「言いたいことあるなら目の前で言えば」とでも言い放つところだが、今はわたしが百パーセント、十割、全面的に悪いのだ。

演習場前の外廊下に面したグラウンドが騒がしくなる。

「うひゃー! すごいな!」

がやがやと騒がしい声は学園のファイタークラスの生徒達のものだった。戦士としてのノウハウを身につけるクラスにいる彼らはグラウンドでの訓練中だったらしく、抜き身の武器を持つ手を休めてこちらを見ていた。

こちらは冷ややかな視線、というわけではないが男の子達に好奇の視線を浴びて、わたしも含め周りの皆は大人しくなる。

「見世物じゃないわよ。あっち行って」

キーラがしっしっ、と手を振って追い払う集団の中、一人の男の子を見つけたわたしは素早く皆の後ろに隠れる。銀髪が揺れる綺麗な顔の少年はしばらくこちらを眺めた後、クラスの男の子達と一緒に去っていった。

エルフの歌声

ここプラティニ学園はローラス共和国最大の『冒険者育成機関』である。

なんでも故プラティニ氏が50年近く昔に「これからは育成の時代だ！」と数々の戦果をあげてきたモンスターハントをやめて、故郷ローラスの古い町、ウエリスペルトに戻り魔導師協会と冒険者ギルドを総合したようなものを作ったのが始まりらしい。

ローラスも王政から共和制に移り『侵略戦争は悪である』という風潮になってきた現在、人と人との争いは減ったものの、世に蔓延るモンスターは増加の一途を辿っている。ここローラスの一都市、ウエリスペルトでもたびたびモンスターによる被害を受けていた。

人と交われない種族達から人類を守る為に存在するのが剣や魔法に長けた冒険者なのだ。

でもそんな救世主的な目標ではなく、この学園に通う生徒達の間では古代遺跡や未知の土地へ到達するような、旅物語に憧れて冒険家を目指す人の方が多いと思う。わたしもその一人だ。

ファイター（戦士）、シーフ（盗賊）といった冒険者グループには欠かせない職業全ての学び舎としてウエリスペルトに門を構えるここに、わたしはソーサラー（魔術師）の卵として入学した。魔法のまの字も無い両親から生まれたのだが、わたしの才能に気付いた近所に住む占い師に学園に通うことを勧められ、わたしもそれを希望したのだった。

しかし、今現在といえば入学当初の希望や輝いていた日々も消え失せていた。

まただ、またやってしまった。

そんな思いから沈みきった気分でわたしはとぼとぼと歩く。次の

授業は教室でのわたしの一番好きな世界史の時間だ。でもそんなことはどうでも良かった。

グラウンドの脇を歩きながら真っ青な空を眺め、真っ黒いロープが訳もなく憎たらしい気分になっていた。

「リジア！」

校舎の入り口に向かうわたしの足が止まる。見上げれば二階の窓から金髪に青い目の美しい顔が覗いて、わたしに向かって手を振っていた。ヴィクトル・アズナヴール、通称ローザちゃん。そしてわたしの学園内での唯一の親友だったりする。

「ちよつと待ってて」

そう言い終えるとローザは顔を引つ込めた。わたしは学園の時計塔を見上げる。半世紀前の学園創立から時を刻み続けている荘厳な姿が、次の授業まで少し間があることを告げていた。

「まーたやつちやつたの？」

ローザが校舎入り口から現れるなりわたしに聞いてくる。

「またやつちやつたよ……。ファイアーボールの実習だったからシヤレになってなかった」

肩を落とすわたしにローザは「おおふ……」と呻いた。そして、

「ちよつと座んなさいな」

と校舎脇にあるベンチを勧めてくる。

「そう落ち込むこともないわよ。また皆から色々言われたかもしれないけど、あたしの予想だとリジアの事を『羨ましい』って人もいると思うの」

わたしの隣りにぴったりと座り、ローザの言った台詞にわたしは首を傾げる。彼女、いや彼、いややっぱ彼女の綺麗な青い瞳を覗き込んだ。

「ほら、制御出来ないぐらい魔力が大きいつてことは、ゆくゆくは凄い大魔女になれるかもしれないってことよ！魔力が大きい人はそれだけ強い魔法も使えるんだし、どんなに唱えても疲れないってあたしも羨ましいわあ」

「ロレンツはちゃんとコントロールして制御出来てるし、わたしは大きい魔法ほど暴走が酷くなってるよ」

わたしの間を置かない答えにローザは頬を引きつらせる。そして大きく溜息をついた。

「そんなこと言わないで、ちょっと前向きになつてくれなきゃ……」
そこまで言うところローザはわたしの顔を覗き見る。

「何だかいつも以上の落ち込みようね。何かあった？」

「いやあ……騒ぎにファイタークラスの人まで駆けつけちゃったから、恥ずかしくて」

そう答えるとローザは「ふうん？」と曖昧に頷いた。

実は『ファイタークラスの一人に好きな人がいる』というのを、わたしは親友である彼女にも言っていない。そしてこれが今回の酷い落ち込みの理由だった。先程の集団の中にちらりと見えた銀髪の少年は、あの騒ぎにどう思ったのだろう。とつさに隠れてしまったけど、きつと周りから「誰の仕業か」は聞いただろうし。

「ああー！もうやだ！穴に入って一生出たくない気分」

わたしが頭を抱えた時だった。空気がちりちりと震えた気がした。次の瞬間、右手に見えていた隣りの校舎の窓が次々に割れていく。

「ひい！」

ローザの野太い悲鳴が聞こえたのも一瞬のことで、すぐに別の雑音にかき消される。

「な、に、よ、これ……」

きつとわたしのうめき声も聞こえていないだろう。両手で必死に耳を塞ぎ、うずくまる。肌までひりつかせる不快音の波。辺りに響き渡る巨大な音の波は、脳髄までかき乱すような破壊力を持っていた。頭を抱え込んだ体勢のまま地面に這い蹲り、ただただ耐える。

「終わった……？」

ローザが動き出すのを見てわたしも恐る恐る耳から手を外す。何の音もしない学園内に鼓膜がイカレたかと不安になる。が、
「あっちの校舎って『バードクラス』の、よね？」

ローザの声にほっとする。わたしは彼女の指差す先を見て顔を歪めた。

「また『あのエルフ』じゃないわよね」

「他に何かあるのよ」

ローザの呟きに近い返事を聞く。わたし達は顔を見合わせると、隣りの校舎に駆け出した。

植え込みを乗り越え、散乱するガラスの破片を避けながら問題の校舎に近づく。光を遮るものが綺麗さっぱり無くなってしまった窓から中を見ると、見知った姿が現れた。

「なんだ、暇人共」

そう言つて翡翠色の瞳で睨んでくる一人の青年。真っ白の肌に少々目つきは悪いが美しい顔。黒い髪から覗く耳は人のそれより大きく尖っている。そう、彼はエルフ族である。

「なんだ、じゃないわよ、アルフレートおお！」

わたしの怒りの声にアルフレート・ロイエンタールはひよい、と肩を竦めた。エルフには珍しい黒髪が揺れる。真っ黒に見えるが日に透けると深い藍色をしていた。人間とは色素が異なるのかもしれない。

その彼が細身の体の脇に抱える楽器を見て、わたしは身を乗り出した。

「あんた『また』歌つたのね！？なんで余計なことするのよ！」

彼の抱える小さめの銀のハープ。その美しい装飾が哀れに見える程、彼は酷い音痴なのだ。いや音痴、などという言葉に当てはめていいものか。歩く鼓膜破壊機器であるアルフレートはわたしと同じように学園で疎まれて一人である。

「さつき、演習場から派手な爆音がしたなあ。何だったんだ？」

しらじらしい質問と共に目元に手を当て、窓の外へ視線を動かすアルフレートをわたしは押し戻す。

「そんなのはどうでもいいの！何で歌ったのよ！？窓ガラス割るの何回目？」

その質問にアルフレートは校舎の中を指し示す。ローザと一緒に差された先を覗き見ると、アルフレートが立つ後ろに見える教室に一人の教官が倒れていた。

「大変！」

ローザが悲鳴を上げつつ校舎内に侵入する。その後をわたしも追う。

泡を吹いて白目を剥いている哀れな教官にローザが治癒の魔法を唱える。その光景を前に、

「『呪歌』のテストだったんだ」

アルフレートはつまらなそうに言い放った。ならしょうがない……のだろうか。わたしも似たような状況で先程の騒ぎを起こしたのは間違いない。わたしはもう一度アルフレートを見る。

「他の生徒は？」

「テストは一人ずつだったから、隣の教室にいる」

その答えに嫌な予感がしたわたしとローザは顔を見合わせた。

うめき声を上げるまで意識を回復させた若い教官は一先ず置いておいて、隣の教室までやってくる。扉の上部にある小窓までもが綺麗に割れていた。

「……ああ」

ローザが絶望したように膝をつく。開いた扉から見える教室内には、テスト待ちだったのであるうアルフレートのクラスメイト達が、楽器を手に持ったままの姿で倒れていた。全員が引き付けを起こしたように崩れている姿はホラーだ。

「緊急事態よ……。リジア、ブリーストクラスの子達を集めて来て。授業始まる時間になっちゃうけど、この状況じゃ教官も許してくれるでしょう」

ローザの指示にわたしは頷き、その場を駆け出そうとする。
「アンタも行くのよ！」

ローザがアルフレーションのお尻を蹴飛ばした時だった。

「学園の二大破壊王が今日は大活躍だね」

子供のような甲高い声にわたしは窓を見る。窓枠に座り込む可愛らしい姿が四つ。全員がにやにやとこちらを見ていた。就学前の子供ほどの背丈に猫のような耳、尻尾が生えた彼らは『モロ口族』という種族だ。その中の一人、茶色い髪にクリーム色の耳をしたモロ口族が廊下に降り立つ。

「この時期にあんまり悪目立ちしない方がいいんじゃないの？」

「どういう意味よ、フロロ」

わたしはモロ口族のリーダー格である彼の名前を呼ぶ。フロロはその丸い顔ににやーっと笑みを浮かべた。

「五期生に上がったっていうのに暢気なもんだね。今年からいよいよパーティー組み始めるっていうのに」

フロロの言葉に漸くはつとする。そうだ……、今年からわたしは学園の五期生に上がったんだ。そろそろ実際に冒険に赴くパーティーを組まなきゃいけない時期じゃないの。

「果たして『破壊王』と組んでくれる奇特定の人は見つかるのかなー！」

そう叫びながらモロ口族四人は廊下を駆けていく。

「ちょ、待ちなさい！野次馬ばっかしてないで呼びに行くの手伝ってよー！」

わたしは思わず追いかけるが、足の速さなら数いる種族の中でもトップクラスのモロ口族に追いつくことは出来なかった。「うきよきよー！」という腹の立つ笑い声が遠ざかっていく。

仕方が無い、このままの足でプリーストクラスに向かうか、とむかむかした気持ちで校舎の出口を目指す。ごおん、とお腹に響く音で鐘が一度鳴る。まずい、予鈴だ。無責任だけどプリースト達を呼んだら、自分は授業に駆け込まなきゃ。

見えてきた表の明かりに廊下を曲がりかけた時、わたしは慌てて足を止め、身を隠す。校舎の入り口の開け放たれた扉の前にいるの

は、先程のモロ口族に囲まれた銀髪の少年の姿。その長い足にまわりつくモロ口族の一人一人の頭を撫でると微笑む。わたしはその光景にぽーっと見とれてしまっていた。

彼らがいなくなってからふと気がつく。……アルフレートがいない。わたしは再びむかむかとしながら走り出した。

電波女

予想外にぼーっとしていた時間は長かったらしい。魔術師科の校舎に戻った時には授業が既に始まっていた、という失態を犯したわたしは忍び足で再び表に出る。

こうなったらサボりだ。幸い世界史の授業は年度始めなので適当なお話して終わるはずである。そして何故か世界史だけは成績の方も無駄に良かったりするので、色々な意味で余裕があった。

校舎を出るとグラウンドを眺める。再びファイタークラスの威勢の良い声と姿を見つけ、咄嗟に植え込み隠れるものの期待した彼の姿は無かった。

そのままその場にしゃがみ込み、ぼんやりとしながら暇を潰す事にする。

パーティメンバー集めか……。わたしに出来るんだろっか。

先程のフロロの話しを思い出し、溜息が漏れた。

プラティニ学園では五期生から本格的な冒険へ出る『校外授業』が始まる。同じ学年でメンバーを募り、パーティを組んで学園が用意したクエストに出掛けるのだ。

パーティ組みに教官達が絡む事は余り無く、生徒達は自分達の手でパーティを作り上げる。もちろん全員が魔術師などという「パーティとしての機能が得られていないもの」は不可になる。

スムーズにバランス良く仲間を集められるか、も冒険者にとって重要なスキルなのだ。毎年この時期になると五期生達が慌しく仲間集めに翻弄しているのは見てきたはずなのに、ころっと忘れてしまっていた。学年全体の人数に比べてソーサラークラスの生徒は少ないので、嫌でもあぶれることはないかな、なんて甘い考えもあったことは否定しない。しかしフロロの言葉で急激に不安が押し寄せる。わたしが他の人の立場だった場合、自分と組みたいと思うだろうか……。はつきり言って自信ない。魔法は駄目、どころか暴走の連

続で周りの命が危ないレベル。キラのように何にもしなくても良いから傍に置いておきたい！と思わせるような美貌も無い。それどころか黒に混じって一人だけ派手なローブ着込んでるって『イタイ子』扱いなんじゃ……。

今更になって嫌な汗が吹き出た。

「ま、まあキラには『可愛い』って褒めてもらったしね」

意味の無い慰めの言葉を吐いた時だった。

「どっせい！」

威勢のいい掛け声と共に頬を何かが掠める。植え込みをメキメキとなぎ倒しながら現れたそれは、勢いそのままに後ろの校舎の壁を叩きつけた。ごうん！という衝突音と飛散する壁の破片。

「ひ、ひえー！ひええー！！」

情けない悲鳴を上げながら壁に出来たクレーターを凝視する。校舎の壁にめり込むのは棘棘の付いた巨大なウォーハンマーだった。

腰を抜かすわたしの頭上から可愛らしいがどこか棒読みな声がする。

「リジアじゃないですかあ」

振り返る先にいたのは黒髪の美少女。ぱっちりお目目の人形のような顔にウェーブした美しい髪。ピンクのギンガムチェックのミニスカートワンピースの上に、フリフリのエプロン。ツインテールの髪型といい『ロリータファッション』というやつだろうか。肩に背負い戻したウォーハンマーが大分浮いている。

その彼女を睨みつつ「出たな、電波女……」とわたしは呟いた。

「そんな所にいたら危ないですよ？」

間延びする声にわたしは立ち上がり怒鳴る。

「危ないって！あんたに危なくされたのよ、イルヴァー！」

彼女の名前を呼ぶと目の前の電波女——イルヴァ・フリユクベリは唇に指を当て答える。

「うさぎさんかと思ったんです」

その答えにわたしは絶望と共に崩れ落ちる。わ、分からない。その答えが、意味が、何もかも……。

イルヴァ・フリユクベリはわたしを知る中でも最も不思議な生物である。まず彼女はファイタークラスの生徒のはずなのだが、いつもこんな謎のコスプレ姿だった。ファイタークラスの生徒といえば皆、動きやすいズボンにブーツ、上は革鎧や防護服が一般的だ。そんな中で彼女だけは今日のようなロリータファッションや時代から丸ごと間違えたようなお姫様ドレス、きわどい水着やらボンテージ、かと思えばフルプレートアーマーなどとにかく幅広い。

極めつけがこの会話の成り立たない『電波』さだった。無表情が崩れるところを見たことがなく、口を開いたかと思えば意味の分からない言葉が飛び出るのだ。彼女の場合に限っては「演技であつて欲しい」と思ってしまう。

再び立ち上がり、膝についた葉っぱを払っているとイルヴァに手を取られる。

「リジア！イルヴァとパーティ組みませんか？」

「え！？」

言われたわたしは一瞬、笑顔になる。が、直ぐに眉間に皺寄せた。イルヴァは電波だがファイタークラスの生徒だ。わたしが一番知り合いのいないクラスだったりするので、この誘いは少し嬉しい、のだが……。

『破壊王』と『電波女』、これ以上危険な組み合わせも無い気がする。他のメンバーを探すにあたって、こんなに強力な敬遠される要素を作っていいものだろうか。

午前中の授業のコマが全て終わり、わたしは窓の外を見ながら伸びをする。五期生に上がってから極端に授業数が減るので、今日わたしが受ける授業はすべて終わっていた。

がやがやと騒がしくなる教室内、さて、お昼ご飯は何にしようかなー？などと考えていると、教室にメザリオ教官が入ってくる。どこことなく空気が張り詰め、自然と全員が席に戻った。

「昼休憩に入る前に一つ連絡事項を伝えておくぞ。えー、諸君も既に知っていると思うが、来週から『演習』が開始される。クエストを受諾出来る状態になる……その前のテストだな」

全て周知の事だったが、メザリオ教官から改めて話しが上がると、やはり皆の雰囲気も変わる。テスト、といっても普段受ける古代語のテストや魔術理論のテストとはわけが違う。五、六期生はクエストを受けることで単位を稼いでいかなくてはならないのだから、実質この『演習』のテストを乗り越えなければ卒業は無い。

もちろんこれ以降も学園に通うのは変わらないが、四期生までに比べれば少ない授業の単位取りの為と、主に情報収集に集まることになる。『半冒険者』のような立場になるわけだ。

「演習にはパーティを組んだ者から参加する。パーティメンバー編成書は今日の放課後から受付だ。ぼうつとして乗り遅れるなよー」

普段には無い軽い調子の教官の口調に気遣いを感じた。皆が緊張した状態なのを分かっているのだろう。そこへ一人のクラスメイトが手を上げた。

「あーのう、演習って具体的に何をするんでしょう？」

教官は頷く。

「演習は組んだメンバーと一緒に実際にクエストをこなしてもらう。ただ先輩達が今やってるような本格的なものではないぞ。簡単なものを選び分けて、現地には教官達が一度足を運んでいる。あんまり心配するな」

そうは言っても学園の外で行動を起こすのは、ソーサラークラスのような『引き籠もり』たちには初めての経験だった。ざわざわと不安の声が漏れ出す。

「これこれ、静かに！まずはメンバー集めだ。人数は四人から六人、クラスをなるべく被らせないこと。これに乗り遅れたら演習には出られないんだから、まずはこっちに集中しなさい。来週から演習が始まるんだから、当然締め切りはそれまでだからな」

それを聞いてなのか後ろの席から声がする。

「……でもソーサラーは少ないから余らないし、大丈夫よね」

「まあね、でも変な人と組むことになったら大変じゃん」

「きつと卒業してからもずっとの付き合いになるわけだもんねー。深刻よ」

「ファイタークラスは人数多いから大変みたいよ。一パーティに三人以上は厳しいし、余った人は強制的に傭兵訓練に回されるから」

「それ考えると魔術師科にきて良かったと思うわー」

「……まあうちのクラスでも敬遠されそうな問題児もいるから、さ」

「しい！聞こえるわよ……でも仲間に背後から撃たれちゃ堪えないわよね、くく」

わたしの事ですかー！と頭に血が上る。がたん、と椅子を引いた時だった。

「リジアー！！」

ばこん！という軽快な音と共に教室のドアが吹っ飛ぶ。「ひ！」という悲鳴が上がった。視線の集まる入り口に立つのはウォーハンマー片手に仁王立ちした電波女の姿。

「リジア！イルヴァとパーティ組みましょう！」

豊富なバストを自慢するかのように胸を張るイルヴァに立ちくらみがする。隣りにいたロレンツが肩を叩いてきた。

「もう仲間いるなんてすげーじゃん。お似合いなんじゃない？」

厭味なのか何なのか判断つかないその言葉に、わたしはイルヴァと初めて会った日のことを思い出していた。

「趣味が合うかと思って」

共通の知人が紹介してくれた女の姿にわたしは「どういう意味だ！」と言いたくなるのをなんとか堪えた。

ウサギ耳のカチューシャにハイレグカットの水着、網タイツを着たコスプレ女と趣味が合うとは思えなかったが、わたしは頬を引き攣らせつつも握手の手を伸ばす。

それに応えながら「にへ」と笑ったのがイルヴァだったのだ。

「リジャー！イルヴァと……」

「わわわかったわよ！」

わたしは慌ててイルヴァの腕を取り、教室から連れ出す。後ろから教官の「……まだ終わってないぞ」という呟きが聞こえるが、気付かない振りをして逃げ出した。

「イルヴァと組んでくれるんですね？じゃあこれからずっと一緒にすねえ」

廊下を駆ける後ろからイルヴァの嬉しそうな声がする。そう、自分で言うとは恥ずかしいがイルヴァはわたしが好きなのだ。なぜこんなにも懐かれたのか謎でしようがない。教官からも派手すぎる服装に多少の小言を受けたことはあるわたしだったが、コスプレの趣味は無い。

「じゃあこの調子でどんどんメンバー見つけましょう！」

とてもポジティブな台詞を無表情のまま叫ぶイルヴァに「分かったわよ」と小声で返した。

猫の企み

とりあえず昼食にしよう、と提案するとイルヴァは、
「お弁当取りに行つていいですか？」

と窓から別の校舎を指差す。頷くもののわたしはどきりとしてしまった。彼女が指差すのは、当たり前だが彼女の所属するファイタークラスの校舎。馴染みの無い校舎に入るといのは緊張するものだし、この時間だともしかしたら『彼』がいるかもしれない。ファイタークラスは人数が多いので二クラスあり、イルヴァとは別のクラスなのは知っているが教室は隣りのはずだった。

「イルヴァ今日ねえ、五段弁当なんですよ」

すらつとしているが大食漢であるイルヴァがわくわくした声を上げる。

「ふうん、わたしはパンが何か買わなきゃ……」

そう答えながらもそわそわしてしまった。

グラウンドを抜けて戦士達の集まる校舎に入る。ファイタークラスはやっぱり男の子が多いので校舎の雰囲気からして違う気がする。騒がしくてちよつと汚い、かな。

二階だという五期生の教室のあるフロアに上がると、直ぐに視線が集まるのを感じた。「早速メンバー集めかな」というような好奇の目もあるが、視線が合いそうになると露骨に逸らす人もいる。イルヴァとわたしの顔を交互に見て、露骨にぎよつとする人にはさすがにムツとしてしまう。

そちらに気を取られていると、イルヴァが景気いい声を上げる。

「おべんとー！」

謎の掛け声と共に教室の扉を勢いよく開け放った。中にいた集団が呆気にとられた顔でこちらを見ている。机の上に座りパンなどを齧っているところを見ると彼らも昼食中だったらしい。目を丸くしたまま固まっている男の子達の中、銀髪に端正な顔をした一人を見

つけてわたしは飛び上がった。

「あ、間違えちゃいました。こっちは、こっち」

思考停止寸前のわたしの腕をイルヴァが引く。先程開け放った扉の教室とは別の隣の教室に入ると、イルヴァは室内後ろにあるロッカーを開ける。中から巨大な弁当袋を取り出して頬ずりした。

「……ねえ、ねえねえねえ！」

我に返ったわたしはイルヴァに詰め寄る。

「こうなったらさ、イルヴァと上手くやっていこうと思ってるよ！でもさ、もうちょっと落ち着いた行動取れない！？とりあえず扉は静かに開けようよ！」

『彼』を含めた集団に一気に注目を浴びた恥ずかしさから、涙目になる。が、イルヴァは唇に指を当てて暢気に答えた。

「んー、イルヴァ扉に入る前から意識が中に飛んじゃうんです。扉があつた瞬間からイルヴァは中にいるんですよ」

すーっと引いていく自分分かる。この娘をコントロールしようとした自分が馬鹿なのだ。

溜息と共に廊下に出る。恥の上塗りをする前に急いで校舎を出よう、と思つた時だった。

「イルヴァと組んだの？唯でさえ問題児だつてのに、どこ目指してるのかわかんない人だね、アンタ」

生意気な声に顔を上げると又してもモロ口族四人が窓辺に腰掛け、こちらをにやにやと見ている。二階だというのに身軽な彼らには関係ないらしい。始めは睨みつけていたわたしだが、今の発言をしたフロロの顔を見て思いつく。

「そうだ、フロロもわたしと組まない？」

「いいぜ」

思わぬ即答に聞いた自分がびっくりする。フロロは生意気でムカつくことも多いが、シーフクラスでは成績優秀のエリートだったからだ。

フロロは軽い身のこなしで廊下に降り立つと、わたしとイルヴァ

に不敵な笑みを見せる。子供のような顔のくせに何ともイケメンな態度だが、フロロの茶の髪と栗色の瞳、クリーム色の耳と尻尾というのはモロロ族の中でも『一番モテる色合い』だそうだ。現に他のモロロ族三人は黒髪や赤茶髪をしており、尚且つフロロをリーダーとして崇めているようだった。

「俺だって単に友情なんて絆で組むんじゃないぜ？俺には匂ってくるものがあるんだな」

フロロの言葉にイルヴァは自分の腕の匂いを嗅ぎ、わたしはフロロと出会った日の事を思い出していた。

フロロとわたしが仲良くなったのは、今思えばほんの偶然だった。図書室で居残り勉強をしている時、わたしは粗方片付いたレポートを前に大きく背伸びをした。ふと前を見ると、向かいのテーブルで何やら分厚い本と妙な金属片を交互に睨めっこしている人物がいる。それがフロロだった。

何をしているのかさっぱりだったが、妙に気になり見てみると、どうやら本を参考に金属片を分解しているようだ。頭をかいたり汗を拭ったり、ため息をついたり忙しい彼をおもしろく思い、近づいて一言、

「そのでっぱり押しながらそこ引つ張って見たら？」
なんてことを適当に言ってみた。

すると彼の顔がみるみる険しくなり、わたしはやばい、と思ったのだが、次の瞬間、かちつと何かが外れる音がした。

「外れた…」

惚けたように彼は呟くと、がばつ、とわたしの手を取り、

「アラームのレベル10を外すことが出来たぜ！ありがとう！」

意味のわからないわたしの手をぶんぶんと振り回したのだった。それからというもの、

「リジア」というと奇跡が降ってくる気がする」

なんてことを言いながらわたしの周りをうろちよろとしているのだった。

フロロとイルヴァに挟まれながら移動し、いつも昼食を取っている中庭に着く。噴水が中央にある芝生の上に数組の生徒達がいた。その中の一つ、異様な雰囲気を出す二人組みに近づいていく。

「……どうしたの？」

わたしがそう声を掛けたのは白地に金の刺繍が入った美しいローブを着るプリースト、ローザ。綺麗な顔を歪めてメソメソと泣いている。その彼女が寄りかかっている人物は、露骨に嫌な顔をしてこちらを見た。

「早く何とかしろ」

偉そうな口調でエルフのアルフレートはわたし達三人を睨んでいた。

「慰めろって？曲芸でも見せりやいいのかい？」

その場に飛び跳ねるフロロにアルフレートは舌打ちする。

「その減らず口を慰める方向に役立てるよ、フロロ」

「アルの方こそ嫌味ばかりで、人の慰め方はわかんないんだろー？」

言い合う二人の異種族の横でイルヴァがローザの頭を撫でた。

「どうしました、ローザさん？オカマが原因でいじめられました？」

「その遠慮が少しも無い言い様がムカつくけど、そうかもしれないわあ……」

そう零しながら漸く顔を上げたローザの話しを聞いていく。

プリーストクラスもわたし達と同じ時間に、教官から『演習』の説明を受けていたらしい。一通り終わった後、教室を出ると知り合いのソーサラーがいたので話し掛けたのだが、何も言わずに物凄い勢いで逃げていったのだという。

「あたし、自分で言うのもなんだけど司祭としての腕前はちゃんと

してると思うし、避けられる要素としては『このキャラ』しか考えられなくて」

めめめするローザの話しを聞いて、数年前もこんな事があったっけな、と思い出す。

入学して直ぐは今のプリーストクラスとソーサラークラス、一緒に『魔術師クラス』として編成されていたので、わたしとローザは同じクラスだった。その魔術師クラスの一番初めの授業、自己紹介の時間の事だ。一人一人が恥ずかしそうに自分の名前等を発言していく中、

「ローザでええす！」

と言い放ったのがヴィクトル・アズナヴール、この人であった。未知のキャラに純情な少女は戸惑い、悲しいかな孤立寸前になってしまったローザに話しかけたのがわたしだったのだ。

実は単に興味があつてオカマに触れたかつただけなのだが、ローザ本人はすごく嬉しかったのだという。「マイペースな友人にあたしは救われたのよ」と言われた時はなんだか恥ずかしかった。一人話し掛ければ不思議なもので、ローザはすっかりクラスに馴染んでいた。と思っていたらこの状況というわけか。

薔薇の刺繍の入ったハンカチで涙を拭うローザに、フロロが口を開く。

「別に生まれ持った個性を変えろとは言わないけどさ、自分が『変人』ってことは理解しろよ。これから学園出て、自分達で依頼を取ってくる機会も出てくるんだ。仲間にオカマがいたら変な目で見られるかも、って考えは別の見方したら『プロフェッショナル』なんだよ。俺は嫌いじゃないぜ」

フロロの辛辣な言葉に再びローザの顔が歪んだ、と思つたのだが、ぐつと堪えるようにハンカチを握り締める。

「……分かつてるわ。でもね、あたしが腹立つのは、その子にちょっとでも『パーティ組まない』なんて話しは出してないことなのよ。勝手に勘違いして、しかも逃げていくって。それって凄い失

礼じゃない!？」

野太い雄叫びと共に立ち上がるローザにアルフレートが溜息をついた。

「怒りに変わったんならもう大丈夫だな。……めんどくさい奴だ」

いつの間にかお弁当を食べ始めていたイルヴァが手を止め、アルフレートとローザを見る。

「じゃあ二人ともメンバー組み終わってないんですね？」

それを聞いてローザが肩を竦めた。

「まだよ。というか話し聞いたの、さっきだもの」

「じゃあこのメンバーで組めばいいじゃないですか。仲良しなんですもん」

イルヴァの発言にわたし達は顔を見合わせる。フロロガにやっと笑った。

「……結局『いつものメンバー』じゃん。ま、いいんでないの？」

そう、この五人がいつもお昼やらなんやらでつるんでいるメンバーなのだ。一人一人ちよつと問題はあるが、わたしが一番落ち着く人達でもある。

済んでみれば当たり前前の結果に終わってしまった。問題の解決である。

そもそもこれだけクラスが均等に分かれているのに、何故かこのメンバーのパーティは思いつかなかったのだから、わたしもちよつと薄情かもしれない。しかし何より自分があぶなくて良かったな、とほつとした溜息をついた。

買って来たサンドイッチの包み紙を解いて顔を上げると、上に見える渡り廊下の窓の奥に見える光景が目に残る。

『彼』だ。後ろ姿なので顔は見えないものの、ずっと見てきた人だ。仕草や雰囲気の間違いないと分かる。その彼の前にいるのは見覚えのある顔なのでリーストクラスの子だろうか。他にも人影は見えるがよく窺えない。

メンバー入りの相談かな、と思う。本決まりのメンバーなのか違

うのか、どちらが誘う側なのかは分からないけど、目立つ人だもの。きっと色々なところから打診があるに違いない。

「演習ねえ、面倒だなあ」

アルフレートの声に我に返る。欠伸を一つした後、わたしの視線に気付いたのか、

「何だ」

そう言い放つエルフは人の顔を睨みながら林檎に齧り付いた。

オカマ、嘆く

変り者のエルフが学校に入って来た。

そんな話を聞いたのは、わたしが三期生に上がった時だった。人間より遥かに寿命が長く、また魔力や精神力でも人間のそれとは比べものにならない程優れている彼らは、基本的に人間界には立ち入らない。それは立ち入る理由がないからである。

たまに物好きなエルフを町中で見ることがあっても、それは「人間の観察」目的だ。人間より確実に優秀な生き物であるエルフが、間違ってもその人間から物を教わろう、などとは思わないだろう。ところがどっこい、アルフレート・ロイエンタールはプラティニ学園に入学して来たのだ。

当時、そんな彼を一目見ようと学園中の生徒が彼の元へ詰め掛けた。わたしもその中の一人。精霊使いとして超が付くほど優秀なことと、エルフ特有の線の細い美貌を持つ異種族を、色恋とは別の憧れの目で見たものだ。

しかし、わたしの予想とは少々違う場所に彼はいた。

「バードクラス」

そう、吟遊詩人のノウハウを学ぶクラスにいたのだ。エルフのイメージといえば、いうまでもなく精霊魔法の使い手としての魔術師の姿だ。しかしながら、ああ、魔法はもう習うことなんてないんだろ？、ちよつとした趣味のつもりで音楽でも習うのかもな。あの見た目だもの、さぞかし様になるだろう。誰もがそんなことを考えていたと思う。今となっては当時の自分に忠告してやりたい。彼の歌を聴くな、と。

若き少女に軽くトラウマを与える結果となった歌声と連日割られるガラス窓に、いつしか彼の学園でのあだ名は『歩く鼓膜破壊機器』。学園に入ってくるようなエルフがまともなわけがなかったのだ。

そんな彼とわたしが知り合ったのは、彼の意外な一言だった。

「お前はアルマ・ファウラーの孫か？」

アルフレートはわたしの祖母であるアルマ・ファウラーと知り合
いだったのだ。彼曰く、わたしと若かりし頃の祖母はそっくりらし
い。わたしが驚きながらも肯定すると、彼は何やら嬉しそうにニヤ
ニヤ笑い、それから何かと話しかけてくるようになった。

しかしその後、アルフレートから祖母の名が出てくることはない。
わたしと祖母は離れて暮らしている。その為、アルフレートと祖母
のつながりはよくわからないままだ。

もしかして一緒に冒険なんかしてたのかな、とアルフレートの横
顔を見ながら思う。わたしの祖母は両親とは違い、魔法使いだった
からだ。その才能をこんな形であれ、引き継いだのがわたしになる。
その辺の話しも一度聞いてみたいものだ、と食べ終わったサン
ドイッチの包みを丸めた。するとそれを見ていたのか、ローザが口
ーブの懷から何かの紙を出す。

「これ、記入して教官のところを持っていきましょう！こんだけ早
い結成なんてあたし達が一番かも！」

見るとパーティ編成書の記入用紙だった。メンバーの名前と所属
クラス等を書き込む欄がある。日の光を反射する白い用紙に「いよ
いよだね」と呟いていた。

わたしの魔術書の表紙を下敷きにして全員の名前を書き込む。出
来上がったそれをわたしは手に取ると、

「じゃあ教官室行こうか！」

と全員の顔を見た。

昼食の残骸を片付け、鼻歌なんて口ずさんじやったりしながら教
官室に向かう。廊下を歩き、見えてきた茶の重厚な扉の前に立つと
ノックした。くぐもった「どうぞ」の声に意気揚々と中に入り込む。
机と積みあがった書類で構成された教官室、入り口から一番手前
の席にいるメザリオ教官はわたしの顔を見て目を丸くした。しかし
ぞろぞろと続く仲間の顔を一つ一つ見る毎に、どこか遠い所を見る

ような目つきに変わる。

「……どうした？」

低い教官の呟きに、わたしは記入してきた編成書を差し出す。

「はい！出来ました！普段の仲良しグループですけど、良いですよ
ね？」

明るいわたしの声に、

「ああ、うん……」

呻きのような教官の声。その対比に、漸くわたしは空気がおかしい、と気付いた。顔を上げると室内にいる教官達が全員こちらを見ている。戸惑っているわたしにメザリオ教官は静かに言い放つ。

「却下」

「え、な……なんで？」

突っ返されたメンバー編成書を手にしながら、わたしは辛うじて乾いた声を出す。

「なんでも何も……メンバーが片寄りすぎだろう」

メザリオ教官は溜息をついた。わたし達五人はお互いの顔を見回す。

「でも、人数の問題もクリアしていて、クラスだって一人も被って
ませんよ！？」

詰め寄るローザに教官は答えにくそうに口を開く。

「それは認めよう。仲良しグループだって別に構わない。しかしね」
口籠るメザリオ教官の後ろから一人の女性教官が顔を覗かせた。

「言いにくいなら代わりに私から言いましょうか？」

冷たい声と女性教官の光る眼鏡に、わたしは思い切り身を引いて
しまった。

「まず、貴方達は一人一人が問題視されている存在だということを
理解しなさい」

女性教官——コルネリウス教官は持っていた指示棒をびっ！と伸
ばした。五人の背筋が伸びる。

「貴方」

指示棒で差されるのはイルヴァ。人形のような顔を傾げて見せる。
「日ごろから服装について注意を受けているはずです。ファイター
クラスの生徒は薄い物でもレザーアーマーか防護服を着用のはず。

…… なんですか、その格好は」

メザリオ教官を含めてその場にいる全員がイルヴァのフリフリな
服を見る。

「ミニスカート、防護服無し、靴もなんですか、その厚底のヒール
靴は」

「確かにねえ」

頬に手を当て溜息つくローザに「ハイそれ！」と指示棒が迫った。
ローザは身をのけ反らせる。

「個人の性格についてとやかく言いたくありません。けどね、外部
の人間がオカマ言葉全開の生徒を見て、どう判断するかは、我々も
関与出来ません。普通ではない、これをまず理解しなさい」

「お、オカマの何が悪いのよ！」

うわーんと泣き出すローザに一気に修羅場感が増す。いかん、こ
こは地獄だ。

「婚期逃した独身女のヒステリーって嫌だよな」

にやにや笑うフロロの頭に指示棒がぱちん！と当たる。「いてえ
！」という悲鳴があがった。

「貴方はそれ！その口の悪さがトラブルの原因になるかもしれない
！それを胸に置きなさい！盗賊としての腕前がどうこうなんて関係
ありません。この問題児達を引っ張る力は貴方には無いんだから！」
痛そうに頭を摩るフロロに同情するものの、普段からコルネリウ
ス教官の魔術理論の授業はとんでもなく厳しいのだから馬鹿だな、
とも思う。

「……そして一番の大きな問題は貴方達」

指示棒が差すのはわたしとアルフレートだった。わたしは棒の先
をぎよろぎよろと見つめ、アルフレートは欠伸する。

「貴方達が演習場や校舎の壁、窓ガラスをそれぞれ破壊したその修

繕費、それはどこから出てるか知っていますか？」

コルネリウス教官の目がずっと細められた。黙っているわたし達に教官は縦にやたら長い一枚の紙を突きつける。ずらずらと並ぶ日付と学園内の施設の名前に嫌な予感がする。これってもしかして、わたしとアルフレートが破壊して、修理が必要になったもののリストなんじゃないだろうか。

「学園の維持費用からです！学園の予算なんです！貴方達が大人しければ魔術書がいくつ増えたでしょう！奨学金枠がいくつ増えたでしょう！……いいですか？貴方達、特にその二人は退学寸前の状況だということを肝に銘じなさい」

その言葉にぎよっとする。退学になったらどうすればいいんだろう。というかどうすれば回避できるんだろう。大人しくしてれば、って授業の一貫だったんだけどな。……ってそれがマズイのか。

わたしの動揺を見透かしたようにコルネリウス教官は指示棒を手の上で弾いた。

「今回は見返すチャンスだと思いなさい。学生としては底辺の貴方達が、冒険者としては立派なものだと、周りを見返して御覧なさい。そしてこの学園、貴方達を慈悲で許容してくださっている学園長に恩返しなさい。プラティ二学園の生徒、そしてその出身冒険者は頼れるということをし、世間に知らしめるんです！」

「そ、その為には！？」

熱い演説にわたしは思わず大声で尋ねる。コルネリウス教官は厳しい顔のまま答えた。

「まずはバラバラになる方がいいと思うわよ？メザリオ教官が言いたいのも、よりによって学園の問題児が一同に揃っていることを仰っているんだから」

一瞬の間の後、全員がメザリオ教官を見る。視線を向けられた教官は額に浮かんだ汗を拭きつつ息をつく。

「……まあまあ、何も全員バラバラになれ、とは言わん。数人ずつ分かれるのもいい。それか、まだ五人なんだ。最後にもう一人、

そうだな、君らをびしつと導いていけるような生徒を探すんでもいいぞ」

「既に輪が出来あがってるグループに外部からリーダーを引っ張ってこい、って事か？そりゃあ若い身空には酷じゃないかね？」

アルフレートがメザリオ教官の肩に寄りかかる。こんなに自分の立場が分かってないのも羨ましい。再びコルネリウス教官のこめかみに筋が浮かんできたのを見て、わたしは慌ててアルフレートの腕を引っ張った。

「わ、わかりました！出来るだけ早く残りの一人を見つけてきます！そりゃあ教官達もびつくりしちゃうような！」

そう喚きながら仲間の腕を引っ張り、全員を教官室の外へ押し出す。重い空気を遮るように扉を閉めると、その場にへたり込んだ。

「……ど、どうするの？あんなこと言って、リジア、当てでもあるの？」

ローザの小声の質問にわたしはゆっくりと首を振る。

「あるわけないじゃない……」

銀の戦士

「まさか許可貰えないとはね」

既に窓からの光が夕暮れの茜色に染まってしまった中、眉間に深い皺を作り気だるい空気でローザが呟いた。

放課後のカフェテリアには居残った生徒達が何をするわけでもなく、たむろしている。大体は友達と談笑するのに安い学食の飲み物を利用する人々であり、学校の雰囲気の名残惜しむかのようにただ、だらだらと他愛無い話を続ける。

その中で笑顔もなく、たまに口を開けばうなり声をあげているわたし達は周りから見れば異様なのであろう。心なしか距離を置かれている。

「許可貰えないどころじゃないわよ。全否定じゃない」

わたしはいらいらとしながらも、メザリオ教官の出した決断、コルネリウス教官の指摘も間違っていないのだ、と苦い思いだった。校外に出て人に触れる、依頼を受ける、遂行する、それらが始まるということはわたし達はこの学園の『顔』になるわけだ。半端な情で許可を出すわけにもいかないのだろう。

テーブルに工具を広げて何かの金属片をいじっていたフロロが顔を上げる。

「もういいよ。こうなったら勝手に出掛けちまおうぜ」

「勝手に行ってどうするのよ！クエストは教官達が用意してるんだし、単位だって貰えないわよ」

わたしはフロロの適当過ぎる意見を却下する。退学をちらつかされたわたしには常識外をやって教官達を見返す、なんて勇気も持てなかった。

「じゃあ言われた通りにするしかない。一からメンバーを探るか、残りの一人を探すか、だ」

アルフレートが指を二本立てて、ゆっくりと繰り返す。思わぬ駄

目だしに自信を失いかけていたが、考えてみれば演習の話しが出たのは今日のことなのだ。まだ他の生徒はこれからメンバーを探す段階かもしれない。少なくとも教官達が納得するような非の打ち所の無い人格者を探すよりかは、すんなり行きそう。しかしだった。

「……なんか悔しいよね、ばらばらになるのは」

ぼつりと本音を漏らす。同じテーブルを囲む全員が頷きはしないものの、同じ空気になったのを感じた。どことなくしんみりした空気をローザが手を叩いて破る。

「じゃあ、残りの一人を探す方向で考えましょう!」

明るいついに少し気持ちが和らぐ。わたしは大きく頷いた。

「そうなるとファイターだな」

アルフレートがイルヴァを見る。各クラスの生徒が揃ってしまっているわたし達には、複数人いても形になるというとファイタークラスの生徒しかない。元々、推奨されるパーティの形は「前衛と後衛、半々ずつ」というものだった。ぼやっとした顔のままの彼女にわたしも尋ねる。

「イルヴァ、誰か知らない?」

「イルヴァ友達いないんですよねえ」

イルヴァはそう答えると「てへ」と舌を出した。こんなに明るく友達いない宣言をするのも、ある意味相当な強さがないと出来ないのではないか。がっかりしつつも少し感心する。

「安心しろ、私もいない」

自慢げに答えるアルフレート。どうでもいい。

しばらくの間、知っている名前を出し合う。リーダーになってもらうくらいの人だ。わたしのクラスでいうロレンツのような優秀な人。わたし達でも知っているような人、というとやっぱりうちには入ってくれそうにない。極めつけが名前を知っていても友人といえるような人が全員いないことだった。

「……腹減った」

フロロが切なげにぼやいた。わたしも言われてみて空腹に気がつ

く。窓の外を見ると茜色はとうに過ぎ去り、既に暗くなっていた。
「とりあえず今日のところは帰ろうか。もう学園に残ってる人も少ないだろうし」

わたしは半分自分に言い聞かせるように提案する。全員が頷き、立ち上がった。

いつの間にか人氣がさっぱり消えていたカフェテリアを出る時、ローザがわたしの肩を叩く。

「大丈夫よ！あたし最近『フロー神』がとても近くに感じるの。きっと何もかもうまくいく前兆だと思うのよね」

フローとはローザの信仰する大地母神だ。豊穡や大地の恵みを司り、結婚や恋愛、命の営みといったものを推奨する『愛の女神』である。世界を創造した六柱の神の一つなので、当然信者も多く、神殿、教会もいたるところにある。

ローザを始め司祭達は皆、神からの助言を貰う『インスピレーション』と呼ばれる力がある他、勘が冴え渡るといような現象もあるそう。いずれも自分のさじ加減でどうにかなる問題ではなく、全て神の気まぐれらしい。

「近くにいて、神様ってそんなに暇なの？」

思わず出た正直な感想にローザは顔をしかめる。だってこの世界にどれだけのフロー神信者がいるのか知らないけど、一人に付き切りになってくれる神様なんて相当暇なんじゃないだろうか。

学園のグラウンドで皆と別れた後、わたしは裏門のすぐそば、通学用のバス停のベンチに腰掛ける。魔法の『ライト』がいたるところで光る学園は綺麗だ。それを眺めながら肩に掛けていた重いカバンを横に置いて肩を回した。

ソーサラークラスの生徒のカバンは重い。魔術書に限らず他の教科のテキストもいっぱい持ち歩いているからだ。魔術師というのはパーティ内の役割において知識人として振舞うことも求められる。

魔術師というのが本来「世界を解明する人」という職業だったかららしい。わたしも日夜、泣きそうになりながら外国語や数式を解いているのだ。

今日は授業数も少なかったのに……しかも内一コマはサボったというのに、やけに疲れたなあ、と思う。気疲れ、なんていうと生意気かもしれないが、そんなものかもしれない。

時間が時間なのでバスを待つ人も自分以外いない。そんな開放感から足を伸ばしていると、裏門からきい、という音がした。見ると緑色のローブにそろいのハットを被ったメザリオ教官が、重そうな力バンを抱えて出てきたところだった。

「おお、こんな遅い時間まで残ってたのか。で、どうした？」

問いかけに躊躇しながらも残りのメンバーを探すことを伝える。

「そうか」

教官は厳しい顔に見えるが、どこかほっとしたようにも見える。

わたしは思わず、

「すみません」

と謝っていた。それを聞いた教官はベンチのわたしの隣りに腰掛ける。「よつこらせ」という掛け声に少し笑いそうになった。

「……実はな、私はこんな職に勤めているが所謂冒険者、という職の経験はない」

驚いて教官の顔を見てしまったが、考えてみればそうかもしれない。前にちらりと聞いた話ではメザリオ教官はずっと学問をやってきて、就職先としてこの学園に来たのだから。

「だから、正しいパーティの形なんて分からない。これが本音だ。でも少しでも違う、と思えば私は生徒にブレーキを掛ける。これが私の仕事だからだ」

教官の言葉が胸にじんわりとした痛みを残す。悲しいのかもしれない。嬉しいのかもしれない。教官が黙っているのを確認すると、わたしはぼつりぼつりと不安を打ち明けていった。

正直コルネリウス教官から退学という言葉と言われるまでは、わ

たしは軽く見ていた気がする事。自分の出来損ないを軽く考えていたわけじゃないけど、「わたしだって頑張ってるじゃん」で認めてもらおうとしていたのかもしれない、という事。

自分が思っていた以上に教官達はわたしを問題視していた事がシヨックだった。でも考えてみればオカマだってコスプレだって人様に迷惑はかけてないもの。暴走魔法の使い手があのパーティ編成で一番のネックかも、なんて気付いてしまったのだ。

そんな事を教官に伝える。するとメザリオ教官は何度も頷いてみせ、

「頑張りなさい」

そう一言呟いた。慰めの言葉や叱咤激励が無いのが教官らしい。それにこの一言で「頑張っていていいんだな」という気持ちになっていた。わたしがお礼を伝えようとした時、再び門の動く音がした。出てきた人物はわたしと教官を見て戸惑った顔をした後、頭を軽く下げる。わたしはといえば跳ね上がる心臓と一緒に体まで持ち上がりそうになった。

腰元に携えた長いソードに灰色のジャケット、黒いブーツの人物に教官が声を高くする。

「おお、ヘクター・ブラックモア。君も今帰るか」

「はい」

そう答える彼の銀の髪も青みがかったグレーの瞳も、夜を照らす光源によって今は不思議な色合いに見えた。

教官と何か話しているが動揺で全く頭に入ってこない。ただファイタークラスの生徒であるはずの彼の名前を、メザリオ教官がさらに口に出したということは、それだけ教官達の間で期待されているのだらうな、と思う。

「送っていつてやってくれないか？」

そんな言葉と共に、教官がわたしを指差しているのに気がついた。一気に意識が覚醒する。

「いや！結構です！大丈夫！」

わたしは真っ赤になった顔を隠すように手を振り続けた。教官が「何いつてる」と少し怒ったような声を出す。

「だったらこんな時間まで居残っちゃいかん。今日のところは送ってもらいなさい。……悪いね？」

そう言つて教官は隣りの彼に尋ねる。

「いえ、大丈夫です。送つていきます」

教官に答えながらヘクター・ブラックモアはわたしを見て、少し照れくさそうに微笑んだ。

ちょうどその時、道の向こうから乗り合いバスを引っ張るコルバインの足音が聞こえ出した。地鳴りのような響きをさせて、巨大な馬のようなコルバインはバス停前に止まる。

「……家、どの辺？」

「え！？」

ヘクターの質問に季節はずれの汗が吹き出る。後ろから教官がじつと見ていた。な、なんで嘘つくなよ、って空気なのかしら。

悪いので適当に近い所を言おう、と思っていたが教官の影が動かない。わたしは正直に家のすぐ近くの通りの名前を伝えた。

嫌味なメガネ

わたしは不器用な人間なのだろう。

三期生に上がる日、年度初めの学園に登校するバスの中で初めて彼を見かけた。驚くほど綺麗な顔の少年に、わたしは初めて人の顔をじっと見るのが恥ずかしいと感じた。目が合うかもしれない、と考えただけでもう一度彼の方を振り向き見る事が出来なくなってしまうた。

二週間後、クラスメイトの噂好きが話しかけてきた。

「ねえ、今年からファイタークラスに入ってきた人で、びっくりするくらいカッコいい人がいるの知ってた？」

とづくに知っていた。なぜならわたしが会った日が、彼の初めての登校日だったのだから。

話しをしてきたクラスメイトは一期生の時も同じクラスで、初年度の恒例行事『懇談合宿』の時も一晩中、恋愛話をしているような子だった。好きな人を聞かれたわたしは「全員好きな人がいる」という事実には面食らっているような遅れた状態で、無理やり近所の生まれただけの男の子の名前を出すような有様だった。十二になっただけの歳の苦い思い出だ。

転入生の話題に盛り上がるクラスメイトに、曖昧にしか返事が出来ないわたしだったが、一つ誇らしいことがあった。住宅地と少しずれた場所に家があったわたしは、通学路が同じになる同級生がいなかったのだが、噂の彼とはよく行き帰りが同じになった。同じバスを使っている、というだけで優越感に浸れたのだ。

「ヘクターって剣の腕前も凄いいんだって！」

一月後、クラスメイトの噂話で初めて彼の名前を知ったわたしは、早くも優越感が崩れ去った。この頃になると何かしら理由をつけてファイタークラスの校舎に入り込むクラスメイトが沢山出てきた。わたしはそれを羨ましく見ながらも、興味が無い振りをした。「話

し方が優しい」「目が綺麗」など騒ぐ声の中、「でもちよっと近づきがたいよね」という意見にほっとしたわたしは、きつと褒められた性格ではないだろう。

魔術師科二クラスとファイタークラスには見えない壁があった。前者には女の子が多く、後者は男の子ばかりだからだ。それに目指すものが180度違うというのは共通の会話が生まれない。でもきつと彼がソーサラーを目指す人物だとしても、わたしはずっと話しかけられないままだったに違いない。現に噂話の輪にも入れず、彼と仲良くなつた女の子がいなかどうかに耳を澄まし、いないと分かるかとしていような嫌な子だった。

二月後、わたしも初めて彼の声を聞いた。帰りのバスの中、彼が席を譲つたおばあさんは大きな荷物を抱えていた。

「どこまでですか？」

「悪いわ、そんな」

「いいんです、ちょうど俺も降りる所だから」

そう言つておばあさんの荷物を持ち、足取りのゆっくりなおばあさんと共に彼が降りて行つたのは、いつも降りるバス停の二つ前だった。帰ってから練習した「昨日見えました。偉いですね」という台詞が使われることはなかった。

背の高い彼は学園のどこにいても目立ち、常に遠巻きに見ている女の子がいた。それを更に遠巻きに見ているわたしに、彼に近づく機会など一生無いんだろうな、と思い始めていた。

人生何があるか分からないものだ。たった十五のわたしにそれを教えてくれたヘクターが、今隣りに座っている。緊張から話し掛けることはおるか、頭の天辺から指の先まで動かすことが出来ない。そのわたしの空気が伝わっているんだろう。彼の方も居心地悪そうに顔を触ったりしているのが、気配で分かる。

「やだお母さん、荷物忘れてるよ？」

そんな声と人の降りるばたばたとした雰囲気顔に顔を上げると、普段ヘクターが降りている停留所なのに気がついた。

「あ！ちよつと、こ……」

ここで降りなくていいの？と聞こうとするが、慌てて抑える。これじゃまるでいつも見ているのを教えるようなものだ。そして今の動きで初めて間近で顔を合わせてしまった。そのまま再び固まってしまう。

「あ、俺の降りる所は気にしないでいいよ」

そう微笑む顔に頭がくらくらする。なんでこんなにいい人なんだろう。せめて黙ったままなのは何とかしたい、と回らない頭から無理やり会話を引き出す。

「い、いつもはこんな遅いわけじゃないの。今日はたまたまで、何か色んなことがあった日だったから」

自分でも何言ってるのか分からない。漸く出てきた台詞が意味の無い自分語りとは。カバンの持ち手をぎゅうぎゅうと握りしめた。

「うん、知ってる」

「え？あ、そうかあ、はは」

汗をかきながらヘクターの答えに頷くが、少し首を捻る。何を知ってると言ったんだろう。もしかして『色んなことがあった』に対して言ってるんだらうか。もしかして今日の演習場の騒ぎの事を……、と流す汗が冷や汗に変わった。

横目に見えた窓の外の景色に再びはつとする。自分の降りる停留所だ。

「あ！降ります！降ります！」

わたしは立ち上がり、いつもには無い大声を上げながら手を上げる。前に座るおねえさんにくすりと笑われてしまった。

「家、どっち？」

バスを降りるとすぐに聞かれる。ここまで来るとやたら遠慮する方が『嫌がつてる』と取られるかもしれない。わたしは真っ直ぐ自宅の方向を指差した。

窓からの光に加え、役所の人が毎夕、街灯に施す魔法の光が足元を照らす。でもきつと変な歩き方になっているはずだ。学園の入学式、家に帰ると母親に「アンタ、足と腕が左右同じの出してたよ」と言われたことを今思い出してしまふ。

停留所から家が近いことを今日より残念に思ったことはないだろう。何か会話を！と焦る内に家の前の通りまで来てしまった。

「あの、家そこです。すぐそこ」

「あ、近いんだね」

せめて最後くらいは会話を続けさせたい。しかし『ええ、近いしか取り得が無いんです』『近いだけで狭い家なんです』など、自分でも無いな、と思う台詞しか浮かんでくれない。せめてお礼だけは言い忘れないようにするぞ、と拳を握る。

「毎日長い距離帰ってるんだとしたら大変だな、って思ってたんだ。いつもカバンが重そうだったから」

「ありがとう……え？」

噛み合わない会話に思考が止まる。何の話をしたんだろう、とぼんやりしていると、ヘクターは軽く手を上げた。

「じゃあ、また明日」

言い終わるなり去って行ってしまう彼の影を見ながら、わたしはまだぼんやりとしていた。

翌日、わたしは頬杖つき教室の窓から見える景色を眺めていた。自習時間なので咎める人もいない。午前中の陽射し強い景色にひたすら酔いしれる。

なんて美しい学校なのだろう。白い校舎は光を反射し、輝いて見える。学園長の趣味で植物が多いのも良い。グラウンドには今日も鍛練を続ける戦士達の姿。

「素晴らしき我が学び舎よ……」

「何言ってるんだよ、気持ち悪い」

その声に振り返ると、眉を吊り上げたロレンツが立っていた。

「何？」

「あのなあ、レポート出してないのお前だけなんだよ。折角の自習なんだから今終わらせてくれ」

溜息交じりの呆れた声に彼の手元を見ると、他の生徒が提出したらしきレポートが束になって積み上がっていた。わたしは慌ててカバンを探る。それを見ながらロレンツの御小言が続いた。

「こういう学科で頑張らないでどうすんだよ……。聞いたぞ、お前退学ちらつかされたんだって？」

ぴたりと手が止まる。なんで同級生からの言葉がこんなにも上から目線なのか、とロレンツを睨むが、それも直ぐに止める。

「……いいわ、許す許す。今日のわたしは機嫌が良いから！」

ぐふふ、と笑うわたしに「はあ？」とロレンツは顔をしかめた。

昨日のヘクターの言葉を思い出す。

『毎日長い距離帰ってるんだとしたら大変だな、って思ってたんだ。いつもカバンが重そうだったから』

そう言ったのだ。それは彼の方もわたしの存在を知っていたということに他ならない。今日の朝は同じバスにならなかったようだが、それでもわたしは見るもの全てが輝いているような気分だった。

「あー、やっぱこれからは会ったら挨拶しなきゃだね！緊張するなあ。でもそっからお話し出来るようになるかもしれないだし、今が頑張り時だ！」

浮かれるばかりに言葉をそのまま口に出していると、

「うん、レポート頑張れ」

ロレンツが水を差す。わたしは舌打ちするとカバンからレポートを引っ張り出した。

「じゃーん！『ワイト王国とレエ男爵についての考察』。完璧よ」
受け取ったロレンツはぱらぱらとめくり、感嘆の声を上げる。

「おお！さすが！オカルトな歴史になると違うな！」

レポートの主題となったレエ男爵は「夜な夜なあんなことやこん

なことやって変態ぶりを発揮しただけで無く、本気で金を作るべく錬金術にはまって怪しい儀式で悪魔を呼び出し、その悪魔に食われちゃった」人物である。わたしの得意な分野だ。

そう胸を張るも、ふと思いつ。

「……話し掛けるにしても、こういう話題じゃ駄目よね。普通の男の子ってどんな話が好きなんだろう」

「デーモンの出てこない話しだろうな。……そんな事より、お前達大丈夫なのかよ」

小声になるロレンツに首を傾げるが、言葉の意味を飲み込む。わたしの退学の噂を知っているくらいだ。パーティメンバーの話しだろう。

「う、うるさいわね。そういう自分は……と、そっか……」

わたしは抗議の声を途中で詰まらせる。彼、ロレンツは「研究科」に行く事が決まっている。研究科とは魔術師クラスにだけある制度で、通常の生徒のようにクエストで単位を取るのではなく、魔導の研究にのみ専念出来るクラスだ。その現研究員たちからのスカウトを受けたことは大変な名誉であり、ロレンツ自身も冒険活劇をするより研究に没頭する方が魅力的らしく、早々と進路が決まっているのである。

「来週まで時間があるっていても、時間が経てば経つほど人材は減っていくんだぞ」

「……うん」

まとも過ぎるロレンツの指摘にわたしは気持ちが萎えていき、うなだれるしかなかった。

リーダー狩り

「がり勉男の言う事も一理あるわね」

ローザがお弁当のタコさんウインナーを刺したフォークを握りしめ、唸った。

「いや、一理どころか真理だろ」

フロロがチキンサンドにかぶりつきながら答える。わたしが話したロレンツの台詞の内容に全員が考え込んだ。

わたし達のパーティが教官達に認められるには、追加メンバーは誰もが認める優秀な生徒でなければならない。そして優秀な生徒程、パーティ組みには苦勞しないはずなので次々に『売れて』いくのだ。時間が経つほど状況は悪くなる。

「イルヴァにお友達がいれば良かったんですけど。コスプレ仲間ならいるんですけどねえ」

イルヴァが残念そうに呟いた。本日の衣装はヒョウ柄のビキニに角の付いたカチューシャを頭につけている。この格好で授業受けるんだろうか……。暴れまわった時に目のやり場に困る姿だ。

「いや、イルヴァが増えても困るだけだから」

わたしが手を振るとイルヴァは首を傾げる。その仕草を見て思う。わたしもピンチではあるけど、この娘も皆バラバラになった際に新しい仲間の元で上手くやっていけるんだろうか。

わたしは考えなど浮かんでくれない頭で空を見上げる。四階の渡り廊下、最上階にあるここは屋根がなく、スペースも広めで日当たりがいいので、シートを敷いてランチを取る生徒も多い。今日はわたし達四人の他は二組程、輪を作って食事を取っている。

「悠長にしていられないのであれば、それなりの方法を考えるしかない」

後ろからした声に振り向くと、りんごを齧るアルフレートの姿。彼はわたしの隣に座ると、わたしのお弁当箱の蓋にりんごの芯を捨

てた。

「どんな方法よ？」

わたしは聞きながら、芯をアルフレートの膝に突き返す。

「頭を働かせる前に聞き返すのは馬鹿のやることだぞ」

アルフレートは鼻で笑いながら、返されたりんごの芯をイルヴァのお弁当箱に投げる。それをイルヴァは見事な反射で弾き飛ばした。「何それ？自分だって考えなんて無いくせに」

わたしが性格の悪いエルフを睨む横で、空から舞い戻ったりんごの芯がローザのお弁当に、ぽとり、と落ちる。ローザがわなわなと震えだした。

「きゃー！！もう食べられないじゃない！」

「私は病原菌かー！！」

騒ぐオカマとエルフの横でフロロが「うるせえなあ」と耳を押さえる。のん気だな、と溜息つかずにはいられない。

「……考えなら一個あるわよ」

わたしの言葉に全員が振り返る。立ち上がり腰に手を当てるわたしを見るメンバーの顔には期待の色はない。内心むっとしつつ口を開いた。

「聞き込みよ、地道な聞き込み。確かな達成を得るには地道な努力が必要なのです」

胸を張るわたしにローザは「あら、あたしの得意分野だわ」と手を叩き、アルフレートとフロロの妖精二人は露骨に嫌な顔をした。

「やだあ、緊張しちゃう！」

ファイタークラスの校舎、重そうな両面開きの扉の前でローザが首を振る。

「いや、顔嬉しそうだし」

眉を下げつつも口元が緩んでいるローザにわたしは突っ込む。そう言っている間にもローザの目は通り過ぎる男子達へと泳いでいる。

獲物を探すハンターに見えるのはわたしだけか。

『地道な』と言った途端にふらりと消えた妖精二人のことは諦めて、わたしとローザは正面口から、イルヴァは裏口から校舎を回り聞き込みをしていくことにする。休み時間ということもあるが、やはり同じようにメンバー集めに苦労している同族の姿もちらほらあった。その中の一つに目が留まる。

「あら、リジアのお仲間」

ローザの言うとおり、入り口付近の廊下で身を縮めている二人組みは真つ黒のローブ姿。やっぱりこういう場だと黒づくめの方が浮いてるじゃない、と妙に誇らしい気分になった。向こうもこちらに気付いたらしく「あ」と声を上げた。一瞬、気まずそうに目を伏せていたが、その後は何故か睨んでくる。

二人の顔に見覚えのあったわたしは好戦的に睨み返す。なぜならわたしを『敬遠されそうな問題児』と笑った二人だったからだ。

お仲間には徹底的に強気な内弁慶のソーサラー達が睨み合う様を、
「やだあ、おもしろーい」

とローザは眺めているという変な状況が暫く続く。が、虚しくなったのか一人がわたしに尋ねてきた。

「……仲間、揃った？」

「いや、だからこんな所に来てるんじゃない」

わたしの答えに黄緑色の不思議な色合いの髪をした少女は少しほっとしたように息をついた。もう一人のオレンジヘアも寄ってくる。黄緑色がディーナ、オレンジがジリヤである。

「私達もまだ揃ってなくて。ここにいれば声掛けがあるかな、って思ってたんだけど、もうやだ……。知らない人と話すくらいなら学校辞めたい」

ディーナの半泣きの台詞に、横目に見えるローザの表情が呆れの極みになるのが窺えた。わたし自身はここまでではないものの、これが『ソーサラークラス』なのである。

「まだパーティ組んでない奴ねえ」

ディーナ&ジリヤと分かれ、話し掛けることに成功した一人目の人物、赤毛のクリスピアンくんは答えながら顎を摩った。

わたしは元々彼の事を知っていた。交友範囲が広いのか魔術師クラスの校舎でもたびたび見かけるからだ。整った顔に明るく派手な雰囲気。腕も立つなかなか周りからの評価が高い人物である、らしい。なんせ腕前に関しては噂で聞いた話しでしか分からないからだ。授業風景はよく覗いているものの、魔術師であるわたしには腕の差なんてよく分からないというのが本音だ。重い武器を振り回しているだけで充分凄いと思うし。

さて、目の前のクリスピアン君、目立つ存在なゆえ友達も多いようなタイプだ。わたしも数回程話したことがあり、それだけで彼の気さくさが分かる。彼を見つけてとりあえず聞き込み開始。別に彼がパーティに入ってくれなくとも情報が聞ければ十分なのだ。すなわち、彼の友達ならそれなりの人が多いはず。いやらしい考えたが人間、自然と同じようなタイプが集まるものなのだ。

「意外と多いぜ。俺の周りじゃ」

返ってきた答えはまさに意外なものだった。

「え？そうなの？」

わたしが驚いていると彼は頷き、腕を組んだ。

「結構選り好みしてるやつが多いからなあ。俺の友達なんかでも、何組も断ってたぜ。なんでも『入れてもらおうと思ってる』ところがあるから」とかなんとか

わたしとローザは顔を見合わせる。うーん、うらやましい話である。こういう話を聞いてしまうと嫌でも格差を感じてしまうじゃないか。

そんなわたし達の空気を読んだのか、クリスピアンは苦笑しつつ首を振る。

「あ、そういう贅沢な状況の奴ばっかりじゃないよ？単純に仲間が

揃わない奴もいっぱいいるしな。ファイタークラスだと魔術師クラス
の知り合いがない奴って多いからさ。ほら、建物も違うし」

「なるほど……。けっこう同じ悩みの人もいるかもね、わたし達と」
「そういうこと。だから良い方だよ、メンバー5人まで決まってる
んでしょ？」

良い方、なのかは置いておき、クリスピアンの笑顔にわたし達が
頷いた時だった。いきなりぶわっ！と黒い影がわたし達三人に覆い
かぶさる。

「え？」

わたしは頭上を見上げた。視界に飛び込んできたのは素早く動く
二つの影。次の瞬間、

「うおおー!!」

クリスピアンの絶叫が廊下に響き渡った。足下の光景に啞然とし
た後、立ちくらみがする。

「何してんのよおおお!!」

ローザの絶叫する声。目の前には巨大な虫網のようなものを地面
に振り下ろしてがっちり押さえこんでいるアルフレートとフロロの
姿。網の中ではクリスピアンがもがいている。

「な、なんなんだ!？」

「ふふふ……、我々は君を拉致しに来たのだよ。おとなしく我々の
パーティに入るんだ」

恐ろしいことを言いつつクリスピアンに近づくアルフレート。

「何言ってるのよ!無理矢理すぎるでしょ!っ!かなんでフロロま
で手伝ってるのよ!」

「楽しそうだから」

さらりとわたしに答えるフロロ。こ、こいつ。ある意味アルフレ
ートより性質が悪い。

「お前達もよくやったぞ。よくこの男の気を削いだ」
「共犯にするな!さりげなく!」

アルフレートの頭をはたくわたし。クリスピアンは呆気に取られ

ていたが、ようやくもぞもぞと網からはい出してきた。

「ご、ごめん。俺はもう無理だよ。決まってるんだ。メンバーが」
律儀に答えてくれるクリスミアン。いい人だ……。

「ちっ、なら貴様にもう用はない。行くぞ！フロロ！」

悪役でしかない台詞を吐きつつアルフレートは網を掴むとフロロを手招きする。割とあっさり退くを見ると完全に遊び目的なのが伺える。

「ちよつと！待ちなさい！」

ローザが叫ぶもむなしく、次の瞬間には二人は消えていた。くそー、さすが妖精コンビ。足が早い！むなしい風が吹くのかみの廊下に佇む。

「君達も大変だね。まあ楽しい仲間とも言えるじゃない」
クリスミアンの軽いの声にローザが返す。

「じゃあ交換してよ。今ならコスプレ女も付けるわよ」

「……仲間なんじゃないの？」

この質問にはわたしが答える。

「仲間だけど深い友情で結ばれてるわけじゃないのよ」

隣りでローザも頷いている。すると、表から戸惑いと驚きを混ぜたような悲鳴が聞こえてきた。

「も、もしかしてあの二人じゃないの！？」

ローザの声にわたしはクリスミアンへの挨拶もそこに駆け出す。後ろから必死の形相でついて来るローザがわたしに叫んだ。

「あの馬鹿共！今、騒ぎ起こしてどうするのよ！始めは大人しく良い顔しとけば捕まえることも出来るかもしれないのに！いいリジア、これは男を捕まえる時の常識よ！」

実行したことがあるのだろうか、というどうでもいい疑問が湧いてきてしまう。が、頭を振ることですれを消し去った。

「解散も考えた方がいいな、こりゃ」

そう呟く。組むのも早ければ散るのも早い。共に学園記録なのではないか。脇に避けていく生徒達を見ながら、そんなことを考えて

しまつた。

異議あり！

表に飛び出したわたしの目に入ってきた光景は、半ば予想していたとはいえ現実逃避したくなるものだった。グラウンドへの通路に尻餅ついている黒髪の少年とその彼に掛かる網、そして見慣れた異種族の二人の姿。

「やめなさいって言うてるでしょうが！」

ローザが走りながら叫び、網を押さえていたアルフレートを蹴飛ばす。わたしはその間にフロロの首根っこを捕まえると持ち上げる。「ニヤーン」などと憎たらしい声が上がった。

「ごめんなさいねえ、大丈夫？」

甘い声を出しつつローザは網に掛かった少年を立ち上がらせる。呆気にとられていただけのようで相手も時間を置くと笑顔を見せてくれた。

「ああ、大丈夫。いや、びっくりしたけどさ」

苦笑しながらの答えに頷いていると、アルフレートがわたしの肩に腕を寄せ寄りかかってきた。

「どうだね、我々のこの作戦は。捕獲と同時に混乱させ、相手に正しい判断が出来ないようにするんだ」

「やってる事、丸つきり悪人じゃない！わたしは正常な状態でも自分達を選んでくれる人が良いのよ！」

わたしの真つ当な叫びにアルフレートは眉間に皺寄せた。

「お前、正常な人間が自分達を選ぶとでも思ってるのか？凄まじく歪んだ自信だな」

「ははは」

アルフレートの言葉を受け、何が可笑しいのか笑う少年に、

「何が可笑しいのよ」

わたしの思い切り睨みつけた顔を向けると「すいません……」と小さくなる。

「いずれ私の考えが正しいことも証明されよう。行くぞ、フロロ！」
網を抱え込みアルフレートは再び走り去る。その後ろ姿にわたしは怒鳴った。

「ばかー！コルネリウス教官に見つかったら今度こそ退学よ！」

あれから何人の生徒を悪の手先——もといアルフレートとフロロの手から逃がしただろうか。これだから嫌われるんだよ、と今更思う。

「つたく、何てことしてくれんのよ、あの馬鹿ども！」

ローザが怒りの声をあげる。その顔に浮かぶのは疲労と焦り。わたしだって同じような顔をしているのだろう。

「あの二人だけ楽しんでいるのは納得いきませんねえ。イルヴァも早く呼んでくれればよかったのに」

「お願いだから止めてね！？あの二人を押さえつけるだけにしてよ！？」

応援に呼んだイルヴァにわたしは突っ込みつつ、辺りを見回す。とりあえず全体を見回そう、とグラウンドの真ん中まで出てきたは良いが、二人があまりにも神出鬼没なことに、わたしもローザも疲れてきた。こんな事をしている場合じゃないというのに、目的が馬鹿二人を探すことに変わっている。

「もう！休み時間も終っちゃうわよ！あたし次のコマは授業出なきゃいけないのに……」

「ローザちゃん！あっち！」

わたしはローザの袖を引っ張りつつ、ある方向を指差す。グラウンドの隅にある第二演習場の屋根の上、こそこそと歩く怪しい影二つ！なぜか上空から網を振り下ろすことに美学を見いだしているようである。

「あそこね！」

ローザが駆け出す。イルヴァと一緒に後を追いつつ、わたしは下

にいるのであろうターゲットに目を移す。

その瞬間、息が止まった。周りの音が止む程の最悪な事態がわたしを襲う。昨日、一瞬天に昇ったわたしを神は突き落としてくれた。遠い距離からでもはっきり分かる。演習場の前を歩いていたのはヘクター・ブラックモア。彼に他ならなかった。

このままではわたし達のお馬鹿コントを彼の前で披露することになるのは確実だ。それだけは絶対に避けなければならない。わたしが貧血を起こすんじゃないか、という程顔を青くしているのも知らずにアルフレートとフロロは下に見えるヘクターを指差し、確認している。わたしは走る速度を限界まで上げローザを追い越した。アルフレートが網を振りかぶり、屋根を蹴る！

「やめてええええ！！」

絶叫と共に突っ込むと、ヘクターを突き飛ば……そうとしたが、届かない。空を切る自分の手と彼の驚いた顔が見えた。次の瞬間、ごりっ！！

頭の上から網の淵であらう、棒状のもので叩き付けられた。あまにも痛い衝撃が走ると目から星が飛ぶ、って本当だったんだな、などとちかちかする視界に思った。「あ、やべ」というフロロの声が聞こえる。

「い、いったあー……」

頭を摩りつつ、起き上がる。頭が凹んでるんじゃないか、と一瞬思ってしまったが既にコブが出来始めていた。

「だ、大丈夫？すごい音したわよ？」

ローザが頭をさすってくれた。涙目になりつつも目の前を見ると、啞然とした顔のヘクターが座り込んでいた。見開かれている綺麗な瞳と目が合う。きちんと網に包まれている状態を見て再び顔が青ざめるが、恥ずかしさから一気に血が上るのが分かった。

「ち、ちよつとお！何してんのよ！」

そう叫ぶわたしはひどい顔をしているに違いない。

「い、いや、今のはさすがに済まないと思った」

アルフレートはわたしの言葉にそう答えつつ、しっかりと網の柄は放さない。

「そうじゃなくて！この状況よ！」

わたしがびしつと網を指差すとアルフレートははっとする。

「あ、そうだった。……ふふふ、我々はお前を拉致しに来たのだ」
そっからやるのかよ。

「そうじゃないでしょ！」

「どうだ、大人しく我々の仲間にならないか？」

わたしの言葉を見無視してアルフレートは続けた。心なしか台詞は棒読みである。さすがに動揺しているようだ。次の瞬間、わたしは一生で一番耳を疑う台詞を聞くことになる。

「いいよ」

……うん？短いが理解出来ない彼の返答にわたしを含め、ヘクター以外の全員が固まってしまっている。ヘクターはゆっくりと網をどけると立ち上がった。何故かこの状況の中で笑顔である。

「いいよ。君らのパーティに入れてくれ」

それでも尚、痛い程の沈黙が広がる。

「……あれ？だめだった？」

ヘクターの言葉に、全員がブンブンと首を振った。わたしは頭の痛みも忘れ、この展開にただただ啞然とするばかりだった。

「もの好きな方だったんですね、ヘクターさん」

放課後のカフェテリア。昨日より一名増えたメンバーでテーブルを囲む。そんな中、大変自覚ある台詞を言うイルヴァ。同じファイタークラスでも違うクラスらしいが、イルヴァもヘクターを知っていた。イルヴァが他人を認識することのハードルの高さを知っているわたしは驚いてしまった。

「ほんとよねえ。あんたぐらいだったら他にあったんじゃないの？誘いがさあ」

ローザも腕を組みつつ頷く。

「いやあ、見る目があるんだよ、彼には」

上機嫌なのはアルフレート。まあ、彼のお陰、とも言えなくはない。絶対に感謝したりはしないけど。

ヘクターはというと、にこにこみんなの話を聞き、口を開いた。

「いや、こんな魅力的なパーティーはないと思うよ」

こんな台詞でもおべっかに聞こえないのが彼のすごい所。それを聞き、五人の顔が緩む。

『そ、そうかなあー』

ヘクター以外の全員の声が重なった。それを見てまたにこにこする彼は、わたし達の救世主となるはずだ。なぜなら「ファイタークラスであり」「学年で誰もが知るような存在であり」「まともな人」という条件全てをクリアしているのだから。

わたしはというと皆と一緒に同調したり、盛り上がったりはしているものの、まだ彼と目を合わせられない状態だったりする。現状に心が追い付いていけないのだ。

「じゃあ早速だけど、これに名前書いてくれない？」

悪徳詐欺師のような台詞と共に、ローザが昨日と同じように懷からメンバー編成書を取り出す。受け取ったヘクターがペンを紙に近づけた時だった。

「ちよつと待った」

響いた声にヘクターが手を止め、見守っていたわたし達は顔を見合わせる。誰の声？と一人一人を見ていると、ローザがわたしの背後へ目を動かし「あ」と呟いた。

わたしが振り返るとそこにいたのは何人もの生徒の姿。何故か全員がこちらを睨んでいる。

「俺達も彼を誘ってたんだ。その話し合い、参加させてくれ」

先頭にいる盗賊のような雰囲気のが、わたしを睨みながら言い放った。それを皮切りに後ろに立つ生徒からも声上がる。

「うちだって誘ってたんだぞ！参加させろ！」

「わ、私達なんて今年度始まってからずっと誘ってたのよ!？」

「それ言うなら、あたしなんて去年からアプローチかけてたわよ!」

「何それ! キモいのよ、ストーリー女!」

派生した発言から喧嘩まで始まってしまい、声は鳴り止まなくなる。酷い混乱にわたしとローザは目を合わせた。すると横から「ポロン」と澄んだ音が聞こえる。

一瞬で静まり返るカフェテリア内、全員の視線を集めるのはテーブルに座り込んだアルフレートだった。膝に置いた銀のハープを弾く度に美しい音色が響く。

「ぴーちくぱーちくうるさい奴らだな。理論的に話せないなら帰れ。さもないと……」

「さもないと?」

シーフの少年はアルフレートの手元を見ながら喉を鳴らす。アルフレートはにやりと笑った。

「歌うぞ」

ざざざ!と波が引くように集団は離れていく。同時に逃げようとしたわたしだったが、後ろからローザに腕を取られてつんのめる。

暫く楽しそうに弦を弾いていたアルフレートだったが「さて」と言うのと、ハープをテーブルに置いた。

「冷静に話せるなら聞いてやってもいい。だが一つ言っておくと彼、ヘクター・ブラックモアが選んだのは我々のパーティへの加入だ」

「そ、それがまずおかしいんじゃない!」

叫んだのは黒いローブを頭からすっぽり被った少女。クラスメイットのポリーナじゃないか。よく他クラスの噂話を持ち込んでおしゃべりに花を咲かせるような子なので、わたしはあまり仲良くしたことがなかった。理由はわたし自身が何言われてるか分かったもんじゃないからだ。

「あんた達、自分の評価を分かってないのよ! オカマだ、音痴だ、規則も守れない奴ばっかりで、彼は未来あるエリートなのよ!？」

悲鳴のような叫びにシーフの少年が続く。

「そ、そうだ！絶対おかしい！何か脅迫して加入させようとしてるんだろう！？」

ヘクターが困ったように手を振り、それを遮った。

「いや、それは無いよ。そんな事されたなら余計に入らない」

その言葉に感動するわたし。ポリーナは「う」と詰まったが、こちらをびしりと指差してくる。

「じゃ、じゃあヘクターはこいつらがどんな問題児か知らないのよ。ずっと同じクラスだったもんだから散々迷惑掛けられたのよ、その魔術師には！」

わたしは思わず指差された方へ振り返る。すると後頭部に「お前だ！」という罵声が降ってきた。

再び騒ぐ声は止まなくなってしまう。

「ど、どうすればいいのよ」

というローザの涙声を聞いて、わたしは頭に血が上るのを感じた。すると次の瞬間、ぱーん！という乾いた音が連続で聞こえ出す。ずっと静かになる集団にアルフレートを見るが、彼は腕を組んで座り込んだままだった。

「こらこら、何の騒ぎだ、これは？」

厳しい顔で手を叩きつつ入ってきたのは、学年主任であるメザリ才教官だった。

切れるお姉さま

「何だかよく分かんが、よく分かった」

メザリオ教官はそう言って大きく息を吐いた。

「分からないならもう一度お話ししましょうか!？」

わたし達の話を聞き終え、難しい顔をしている教官にポリーナが黒いローブを激しく揺らしながら詰め寄る。が、教官は手を振り「座りなさい」と場にいる全員に伝える。渋々、という様子で皆が空いた席に着いた。

「正直に言って今、私はがっかりしている」

メザリオ教官が良く通る声で言った第一声にカフェテリア内は静まり返る。ポリーナを始め、シーフの少年も他の生徒も眉を下げ、周りを伺うよう見合わせた。

「私がこの学園に来て日々生徒に物事を教え、五年間という長い間授業を受け持った生徒達が今主張している事は、私の理想とは掛け離れたものだったからだ」

「で、でもバランスの良いパーティを、と言ったのは教官ですよ？」

ポリーナが手を挙げる。教官は髭を撫でつつ頷いた。

「ではバランスの良いパーティとはどんなものだろうか。成績の優秀な魔術師に成績の良いシーフ、誰もが腕を認める戦士。こんなものかね？」

メザリオ教官は言い終わるなり「私は違うと思う」と否定した。

「腕の良し悪しはとても重要な事だ。難度の高いダンジョンに挑む場合を考えても、誰か一人が足を引っ張ったばかりに全滅、なんて事態が容易に想像出来る。では『何をもって優秀とするか』について考えてみよう」

教官はポリーナ、そしてわたしを指差す。わたしもポリーナもびくり、と身を引いた。

「まずリジアとポリーナ。リジアは……まあ皆も知っているように

魔法の使用、特に制御に関して非常に苦労している生徒だ。そしてポリーナ、彼女はクラスの中でも魔法の使用に関してとても器用だ。不得意分野も無くバランスが良い」

言われたポリーナは胸を張り、横目でわたしを見てくる。むっとするが教官の話が続くので、そちらに集中する。

「しかし学科になるとそうとも言えないと、私はそう評価している。リジアのレポートはどの分野でも毎回、きっちり理論立っていて出来る範囲は狭くとも表題に沿ったものが出来上がってくる。着眼点や選ぶテーマも面白い。そしてポリーナ、君はレポートも優秀だ。優秀な生徒が選ぶようなテーマを選び、どこか見覚えのあるものが多い。一番頂けないのは、言葉巧みにごまかしが多い事。理解していないのに理解したかのようなごまかしが多い」

ポリーナは徐々に身を小さくする。教官は一つ咳ばらいをした。

「魔法とは未知なるマナを解明しつつ、発動するもの。今のやり方だといつか躓くぞ?……かといって現在の評価が変わるわけではないので、勘違いしないように」

教官のきつちりとした釘刺しにわたしも身を縮ませる。

「次、シーフクラスの君だ。フィラヴィオ君だったかな?」

先程までのわたし達への詰め寄り様はどこへやら、シーフの少年は頭を下げる。

「君もクラス内では優秀な生徒だと聞いているよ。器用で体力測定値も申し分無く、真面目だと」

フィラヴィオは少し目を輝かせるが、ポリーナの話を聞いているので「油断できない」というように上目遣いで教官を見た。

「ただ成績に残せない要素、というのがシーフにおいては重要だと思われる。例えば盗賊の重要であり基本的な仕事『聞き込み』だ。君のように肩に力が入り、メモを構えた状態で詰め寄って来て、学園の事を聞かれても私なら警戒するね」

肩を落とすフィラヴィオの頭に教官はぼん、と手を置いた。

「しかし何事にも妥協せずに熱心になるというのはとても良いこと

だ。その長所は捨てないでいて欲しい。……一人一人に言葉を送りたいが、時間もあることだ。最後にしよう」

そう言って教官はヘクターを見る。少し驚いた顔をする本人よりも周りの空気が凍りつく。

「ヘクター・ブラックモア、君は『何を考えているか分からない』と言われた経験は？君は自分の気持ちを周りに伝えるのが苦手に見える」

「そうだと思います」

ヘクターは苦笑した。その答えに教官は満足そうに頷き、暫くゆつくりと歩き回る。

「このように人間の優劣など、色々な要素が組み合わさりすぎて測れないものだ。少々私の強いメンバーにヘクターのような子が入るというのは、私はとても面白いと思うよ」

教官が言い終わると詰め寄ってきていた生徒の全員が気まずそうに顔を合わせ、次第に溜息をつきながら立ち上がる。がっかりして疲れきったように肩を落とす皆へ、教官は手を叩いた。

「まあまあ、そう気を落とさずに。今言ったように一つ着眼点をずらせば君らに合った優秀なメンバーは必ず見つかるよ。メンバー内での『輪』を作る、これも忘れないでいて欲しい」

そう締めくくり、長い演説を終えたメザリオ教官は満足そうに髭を触るのだった。

カフェテリアから出て行く最後の一人を見送り、にこにここと満悦顔だったメザリオ教官にローザが近づく。そして身を寄せるようにしてから肩を叩いた。

「嬉しい評価をどうもありがとうございます！で、これ、承認していただけることでよろしいですね？」

満面の笑みでローザが広げて見せたのはメンバー編成書。わたし達がじっと見つめる中、教官はぼりぼりと頬を書き、大きく息を吐

いた。

「成り行きとはいえ、そうだな」

そう答えると腰を屈め、テーブルに腕をついてペンを走らせる。メンバーの名前が並ぶ最後に達筆な文字でサインを書きこんだ。思わず全員で拍手する。やったやった！などと騒ぐわたし達を暫く見ていたが、ふと思い立ったように教官はヘクターの方に向き直った。「それで一つ気になったんだが、どうしてまたこのメンバーに入りたいなんて思っただんだ？」

ぴたりと全員が止まる。わたしも淒く気になっていたことだ。全員の視線を浴びる中、ヘクターはゆっくりと口を開く。

「あー、……面白そうだから？」

その答えにローザと教官は頬を引きつらせ、イルヴァとフロロは手を叩き合う。アルフレートが「『から？』って聞かれてもな」とぼやく横で、わたしはちよつと変わった人だな……などと考えてしまった。

翌朝、騒がしい学園廊下を欠伸びながらやってくると、わたしは手荷物を入れる為に廊下に設置されたロッカーを開ける。そしてすぐさま固まってしまった。

「まあ、淒いこと」

あまり思ったださそうな声に振り返ると、わたしのすぐ後ろに立っていたのはクラスメイトのキラ。朝からお色気満点な顔で美しい金髪をかき上げる。

「聞いたわよ、学園の人気者を引っ張ってくるのに成功したんですってね？」

にこつと笑うキラは何だか楽しそうに見えた。わたしは「ま、まあ」と口ごもる。

「教官からも認められたみたいで良かったじゃない。でも、そのロッカーへの悪戯は序章と思った方が良くないかも」

キーラが言うのはわたしのロッカーの中の惨状のことだ。もう一度確かめる為に振り返る。

外から見た時は普段と変わらず綺麗だったというのに、中は酷い有様だ。まず目に付くのが背面部分に大きく書かれた『呪う』の文字。物騒な言葉が物騒な赤い字で書かれていた。

「これ、血……じゃないわよね？」

キーラが眉をひそめる。

「じゃないと信じたいわね」

わたしは答えながら中の側面に目を移す。びっしりと黒インクで書かれた文字は『破壊魔女』やら『問題児』などのくだらない落書きに始まり、「絶対に認めない、なぜなら」という気合の入った長文まである。

キーラの「それ何？」という言葉に扉の裏側を見ると、何かのレポート用紙が貼り付けてあった。表紙を見ると「マナと四大元素」というお堅いタイトルにポリーナの名前が記されていた。思わずわたしは苦笑してしまう。キーラが不思議そうに首を傾げた。

「どうということ？」

「優等生の負けず嫌いが発動したんでしょ」

ぱらぱらと中を見ると徹夜で書いたのか荒い字が並んでいた。最後のページに「どうだ！」と書いてある。これ、評価しなきゃいけないんだろうか？

「荷物は荒らされてない？」

キーラが元々入れっ放しにしていた辞書やテキストを確認する。

「大丈夫そうね」と呟くと、こちらを見てにこっと笑った。

「もし荷物にまで被害が及んだらちゃんと言うのよ？その時は私も暴れてあげる。私、こういうの大嫌いな」

にこにこ言うも言葉の最後には殺気を感じてしまった。この見た目の彼女だもの。きっと今までした苦勞があるのだろう。わたしはというと生まれて初めて浴びた嫉妬という馴染みないものに「物語の主人公みたいだな」とぼんやり考えていた。

「そつえばキーラはメンバー決まったの？」

わたしが尋ねるとキーラは一瞬の沈黙を見せ、髪をかき上げつつ答える。

「まあね、前々から約束があったから」

余裕の言葉である。さすが同級生以外からもモテる女は違う。キーラの長い睫毛を見ていると、廊下の窓から何かが覗いたのに気がついた。

「またフロロ、そんな所に乗って」

わたしは窓枠に腕を乗せ、外から廊下に身を乗り出す猫耳男を睨む。

「連絡だよ。今日も授業終わった奴から集まって、ミーティングだ」
言い終わるなりふっと消える姿に悲鳴を上げそうになる。慌てて窓に駆け寄り表を見ると、元気に中庭を駆けていくモロ口族四人がいた。ここ三階なんですけど。

「気合入ってるわねー。ミーティング重なる過程で仲良くなれるといいわね」

意味ありげな笑みでこちらを見るキーラにわたしは慌てる。

「な、何でよ、そんな不純な動機で仲間になったと思われたくないもん」

それを聞いて「誰とは言っていないのに」と笑いながらキーラは去っていく。朝から変な汗を一杯かいてしまった。

冒険へ出掛けよう

出席予定の授業も終わり、わたしはミーティングに参加する為に階段へと走る。その時、

「リジア・ファウラー」

聞き覚えのある声に背筋が伸びる。曲がり角からやってきたのは眼鏡を光らせたコルネリウス教官だった。タイトスカートから伸びた足をきびきび動かしこちらに向かってくる。

「メンバー編成書も提出して、承認されたようですね。おめでとう」「あ、ありがとうございます」

怒られているわけでもないのに緊張してしまう。今日は嫌な汗をよくかく日だ。

「彼のような学年でも期待のかかる生徒が入ったということは、貴方達にもそれなりの期待が寄せられるということです。これまでのような行いではいけないということですよ」

もう一度教官の眼鏡が光る。わたしは可笑しくもないのに笑顔で歪む顔で「はあ」と答えた。すると教官の目線がわたしの後ろへと動く。つられて振り返ると、黄緑色の髪の下に陰鬱とした表情を浮かべるディーナが歩いてくるところだった。

あの後、メンバーを見つけられたんだろうか。というか話し掛ける段階をクリア出来たのだろうか、と思っているとコルネリウス教官がディーナの名前を呼んだ。ディーナがはっと顔を上げる。

「貴方もパーティーが決まってなかったわよね、ディーナ。どうしました？」

「あ、あのう、私……」

しばらくもじもじとしていたディーナだったが、答えにくそうに口を開く。

「私、『研究科』への試験を受けてみようと思って……」

それを聞いてわたしは正直、残念だな、と思っていた。特に仲が

良いわけではないけど、彼女が普段の聞こえてくる会話では通常のクラス、つまりわたしと同じように冒険者を目指す道を希望していたことを知っていたからだ。

頑張ろうよ、という言葉がかかるもの白々しい気がする。それに全く運だけでパーティを組んでしまったわたしが言うもの気が引けた。そしてこのまま会話に参加していいのだろうか、と教官を見ると、びっ！と指示棒が伸びるところを見てしまった。

「いいですか？」

きらりと光る眼鏡にわたしとディーナは飛び上がる。教官のこの仕草が出る時は怒っている時だ。

「貴方、進級前の面談では通常のソーサラークラスにそのまま残ることを希望していましたよね？もちろん研究科は六期生から用意される制度です。一年あるのだし、希望が変わる生徒もいるでしょう。しかし、貴方のその姿勢がよろしくない」

ぱし！と自らの手に指示棒を叩きつけるコルネリウス教官にディーナ、そしてわたしの姿勢も伸びる。

「前々から貴方が迷う素振りを少しでも見せていたなら、私も納得しましょう。でも貴方はつい先日まで冒険業に赴く希望を話し、旅の日々を夢見て未来を語っていましたよね？さあ、どういうことでしょうか？それに、そのような姿勢で入ってくる生徒を研究に日々まい進する研究生達が受け入れてくれるでしょうか。彼らは彼らでエリートなんですよ？」

「あ、あの私……」

何故かディーナがわたしに救いを求める目を向けてくる。が、この教官に反論するなんて冗談じゃない。

「……貴方また諦めましたね？」

教官のすつと細めた目がディーナに突き刺さる。すると、

「ご、ごめんなさい！私無理です！男の子に話し掛けるなんて出来ません！」

顔を覆ってディーナが泣き出す。うわあ、うわあ……。

「よろしい！」

一際大きな声が響き渡り、わたしは再び飛び上がる。指示棒がディーナの顔に伸び、彼女も驚きで涙が引っ込んだようだった。

「よくぞ正直に不安の核を口にしました！貴方はいつも何が怖いのかも言わずに逃げているばかりでしたね、ディーナ。『男の子に話し掛けるのが怖い』よく分かります。年頃ですもの。でもね、長い人生を考えるとくっつたらない！実にくだらない問題です！」

ここでこほん、と一つ咳払いするとコルネリウス教官はディーナの肩を叩く。

「私がディーナに言いたいのは、立ちはだかる問題を口にすること。問題を明確にして対処すること。何事もやってみてから、それで駄目なら諦めましょう。まずは人見知りの対処方法から考えていきましようか」

この言葉を受けてくくりと頷くディーナに、わたしは思わず拍手する。が、鐘の音にはっとした。いかん、わたしはわたしでやる事をやらなければ。

わたしはこっそり一礼すると『男なんて怖くない！』という講義に移り変わりつつあるその場を後にした。

「さあ今日はこれを埋めていくわよ」

カフェテリアの片隅、昼時は過ぎた為生徒の数は少ないが、遅い昼食を取っている先輩の姿もある。その中、集まったわたし達に口ーザが掲げて見せたのはまたも一枚の用紙だった。

「何これ？」

わたしが聞くとローザは大きく頷いて見せる。

「個人のスキルを記入していくの。やりながらお互いに確認し合えるしね。これを教官に見せると、それに基づいたクエストを紹介してくれるわけ。まあ『演習』はどれも大したものは無いだろうから、とりあえず形だけって感じじゃないかしら」

説明を聞きながら記入用紙を見る。名前を書く欄と白い空白のマスが六人分ある。あとは教官のサインを記入する余白だけの簡単なものだ。

「じゃあ手始めにあたしから行くわよ」

そう言ってローザはぽん、と手を叩く。

「プリーストクラス所属なんだから当たり前だけど、専門は『神聖魔法』よ。大地母神フローからの慈悲を頂く形態ね。他の魔法もそれなりに基本は抑えてるけど、得意分野は治癒だとかそういうものだと思っ頂戴」

追加で「さしずめ癒しの女神ってところかしら」と言っているとフロロが顔を歪める。

「何よ、その顔。あんたの擦り傷、どんだけ治してきたと思ってるのよ！……次、どうぞ」

ローザは隣りにいるイルヴァに手のひらを向けた。イルヴァがウォーハンマーを手に取り、立ち上がる。

「イルヴァはハンマーさんしか使えません。授業で一通りの武器を使いますけど、ソードもスピアもヘタクソです」

「……終わり？」

確認するローザにイルヴァは「あ、あと力持ちです」と拳を握ってみせた。

「じゃあ、次」

ローザの声に、

「私は何でも出来る」

「俺も何でも出来る」

と妖精二人が胸を張る。わたしとローザはわざとらしい程、大きく溜息をついた。

「何で一々突っ込まないと出来ないかな……あんた達のその細い腕でイルヴァのウォーハンマー振り回せるの!？」

「いいわよりジァ……、じゃあ得意なことを教えてちょうだい」

ローザの言い直しにアルフレートは胸を張る。

「精霊魔法だ。なぜなら私は精霊を統べる者、エルフだからな」

そう答えてから「なんだ今の子供に聞くみたいな言い方は」と身
を乗り出すが、隣りにいるフロロがそれを遮った。

「モロロ族っていうとどんな印象持ってるよ、にいちゃん？」

フロロに指差され、ヘクターは目を丸くすると飲んでいたカップ
をテーブルに置く。

「すばしっこくて器用だね。盗賊ギルドに行くと半分が君達だって
話も聞いたことあるよ。シーフに成るために生まれた種族みたいだ
な」

「そういうこと！その中でもとびきり優秀なのが俺なんだな。……
で、アンタは何をしてくれるんだい？」

フロロの言葉に話し手がヘクターへと移る。一度、腰に携えたソ
ードの柄を触るとヘクターは口を開いた。

「イルヴァと似た感じかな。俺も剣の扱いには自信があるけど、他
は駄目だ」

「一個自信があるって言えるものがあるなら十分じゃんよ」

フロロの意見には同感だ。わたしはというと、何を売りにすれば
いいのかな。皆の視線を集める中、言葉に詰まる。アルフレートが
「校舎破壊だ」と言ったり、フロロが「デーモンとかオカルトめい
た話しになると長いぜ」などとうるさい。するとヘクターがこちら
に顔を向ける。

「受けてる授業でいいんじゃないかな。この紙に書くのも、そうい
うことだと思うよ」

そう言っただけでローザの持つ用紙を指差す。なるほど、そういうことな
ら、とわたしは頷いた。

「ローザちゃんみたいな神聖魔法は使えないけど、他の魔法なら一
通り習ってるよ。専門は『古代語魔法』。あとは言語学とか地理学
とか、そういう分野は得意かな」

ローザがぱちぱちと手を叩く。わたしはほっと息をついた。ヘク
ターの前で話すこともそうだけど、皆に改まって自己紹介するのも

恥ずかしいものだ、と思う。

ローザは記入用紙を置き、ペンを握り締めてにつこり笑った。

「じゃあ！書いていくわよ！いいよだわ！演習クエストは『お使い』か『モンスターの巢の掃除』くらいだけど、ある程度選ばせてもらえるんですって」

「なんだ、そんなものか。もっと大きな獲物を狙いたい。血沸き、肉踊るような……」

アルフレートのうつとり顔を押しつけてフロロが手を上げる。

「俺、あつたかいところがいい」

「イルヴァは海に行きたいです」

一気に騒がしくなるメンバーをヘクターはにこにこ見ていた。わたしはその様子を眺め、何とも言えない安堵感に包まれるが、ふと思い出す。

「……そういえば、ヘクターに『リーダーになってください』って肝心な部分を伝えてない気がするんだけど。いいのかな。」

「……まあいいか」

わたしはそう呟く。微笑む彼の横顔を見ながら、今更逃げられても困るのだ、と拳を握り締めるのだった。

出発

馬車は揺れるよ、どこまでも。

まだ暗い中に出発したのだが、今は大地を暖める日差しがさんさんと輝いている。遠くには種を蒔かれたばかりの茶色い畑が広がって、緑広がるこの辺りと景色を二色に分けていた。

無事にパーティを組み終わり、いざ初冒険の地へと向かうべく馬車に揺られているわたし達。暫しのお別れ、ウエリスペルトの町。

「おやつ持ってくれば良かったですう」

そうイルヴァがばやく。本日の格好はタンクトップにホットパンツ。レザーアーマーを着込んだその姿はかなりまとまだ。本人曰く「アマゾネスルック」といつていたその服装に、コルネリウス教官あたりにかなり強く言われたのであろうと想像した。

言ってきく子ではないと思っていたのだが、イルヴァなりにこのパーティのことを考えてくれたようで嬉しいかぎりだ。

ローザが投げた何かが馬車内を飛んでいく。イルヴァは器用にそれをキャッチした。

「家の姉様が焼いたクッキーよ」

「ありがとうございますう」

緊張感がない雰囲気の中、わたしはすでに遠くになってしまった町を眺め、旅の出発を噛み締めた。期待でいっぱい胸の中に、ちらりと湧く早すぎる望郷の念。たった二、三日で戻るはずなのに、なぜ旅立ちというのはこうもおセンチな気持ちにさせるのか。そんなわたしの気持ちも知らずにアルフレートは、

「一曲歌おうか」

などと言いだす。

「止めて、耳が腐る」

ローザにぴしゃりと言い放たれ、アルフレートはむっつり押し黙った。

心地いい馬車の振動に身を任せていると、ふいに体が斜めになった。山道に入ったのだ。そのまま揺られること暫し、

「リジア！見て見て！ほら、学校が見下ろせる！」

ローザがはしゃいだ声をあげる。馬車が走るのはアルフォレント山脈。アルフォレント山脈はローラス共和国のほぼ中央にある。標高は大したことはないが距離の長い山脈だ。ローザの言うとおり、馬車から身を乗り出すとわたし達の学園のあるローラス共和国の大都市ウエリスペリトの町が眼下に見えた。

「こうやって見ると、すぐ近くにあるみたい」

わたしは呟きつつもちらり、後ろへ視線を移す。ヘクターが外の景色を見ながら柔らかな笑みを浮かべている姿があった。その姿を見ながら、いや、ずつとだ。「君らのパーティに入れてくれ」と彼が言った日から、わたしは気になっていた。

ヘクターはわたし達のことを「魅力的だ」と言った。でもわたしには……イマイチ彼がそう言った理由が分からなかった。もちろんわたしにとっては大事な仲間だけど、何とか彼がそう言ったのが意外だったのだ。わたしは長い間、ヘクターに憧れて遠くから見ているだけだったけど、その期間もここ数日で会話をするようになってからも、彼の印象は変わらなかった。

絵に描いたようないい人、が彼の印象だった。話し方は優しく嫌味が無い。困ったような顔はしても決して怒らない。そんな彼がわたし達のことを「魅力的だ」と言ったことは嬉しくもあり、意外でもあった。どう考えてもいつも彼の周りにいる人達とわたし達とは雰囲気が違うのではないか。期待を裏切りたくない。良いパーティだと思ってほしい。常にそんな風に考えてしまう。

「俺も腹減った」

フロロの声に我に返る。そういえば朝が早すぎてわたしもお腹空いたな。

「着いたらご飯にしましょうか。少しくらい遅くなっても大丈夫でしょ」

ローザの提案にわたしとフロロは頷いた。

荷馬車を改造した、お世辞にも乗り心地が良いとは言えない小さな馬車に揺られてお尻がいい加減痛くなってきた頃、

「そろそろ着くよ」

学園から派遣された御者さんが馬の手綱を握りながら言った。

「おじさんはすぐに帰るの？」

わたしの質問に肩をすくめる。

「学校側からお使いも頼まれてんだ。買い物したらトンボ帰りさ」それを聞いたローザが顔をしかめる。

「じゃあ帰りはバスかなにか探さなきゃ」

バスといえば一般的には馬より大型の生き物「コルバイン」一、二頭に二階建ての車体を引かせる大型の乗り物である。今乗っている普通の馬車に比べて乗り心地は良いし、何より早い。しかし今から向かう「チード村」はかなり規模は小さいという事だし、今走る道も狭い山道だ。バスのような乗り物は期待出来そうにない。

「チードってどんなところですか？」

「冒険者たるもの、自分の目で確かめなきゃ」

わたしの言葉におじさんはニヤリと笑い、前を指差した。山間にぼつぼつと立つ建物が見え始めた。わたし達が向かうチード村である。山の中腹にあるこの村は山脈を越える旅人や商人の休憩地として栄えているのだという。

「結構栄えてるのね。もっと寂しいところ想像してたわ」

ローザが村の入り口から見える景色に感嘆の声をあげた。

そう、チード村は村とはいいいながら建物の数も歩く人の数も多い。ウェリスペルトのような大きな都市に比べれば寂しいが、まずまず賑わったところだった。何よりお店が多い。きっと旅人の休憩ポイントになっていることからだろう。看板も宿のものが多くようだった。

御者のおじさんと別れ、予定より早い到着となった村を歩く。青空の下に広がるのは山頂までの緑と、その中をぐにやぐにやと伸びる歩道。脇に積み木細工のように詰め込まれた商店や民家が並ぶ様は、絵画で見た田舎町といった感じた。普通の観光旅行で訪れても良い場所なんじゃないだろうか。

「依頼人ってどんな人なんだろうね」

わたしは少し不安な気持ちを漏らす。

今回の「演習」は学園の生徒が受ける教育課程の一つになっているものの、その全てが実際に学園に来た本物の依頼なのだ。もちろん依頼主も学園外から「お助けお願いします」と言ってきた人達になる。これが緊張の元になっていた。

いつもは若手の教官や教育課程を終えた五、六期生が捌いている依頼を、簡単そうなものを選び分けてわたし達が「演習」として行う。

依頼人には許可を取ってあるし、実際現地にも教官達が一度足を運んでいる。まどろっこしいやり方をとっているが、そこは「未来の冒険者」達の為。一般の方達も協力的なのが嬉しいことである。

正規の冒険者に、ではなく学園にわざわざ依頼をよこす時点で大した依頼はなかったりする。

学園にくる依頼の中で一番多いのが「お使い」と呼ばれるものだ。隣り町までポジションを買いに行つて欲しい、マウニの森まで行つてキノコを採つてきて欲しい、等の依頼がそう呼ばれる。

お使いなどの簡単かつ面倒な依頼は嫌がる冒険者が多いので、学園を重宝している人も多いのだという。正規の冒険者を雇うよりもずっと安上がりというのが一番の理由かもしれない。

わたし達が選んだ依頼は、やっぱりお使い。ここチードで研究をしている科学者、という人の研究材料の調達である。選んだ理由は単純に科学者という存在が珍しく、興味を引かれたからだだった。

「捕って喰われたりしないだろ。それより飯、飯」

フロロがわたしを見ながらお腹を摩った。

小さな店舗が並ぶ中、広い間口で目立つ一件の大衆食堂を見つけ、そろそろと入る。カウンターバーと大きな丸テーブルがいくつあるような、酒場兼飯処、といった感じか。早い時間なのでカウンターバーに人はいないが、テーブル席で朝食を取る地元民らしき姿があった。

白いエプロンを着けた「元気いっぱい！」という言葉がぴったりな若いウェイトレスが近寄ってきて、大きなテーブルを案内してくれた。

各自思い思いの飲み物を頼んでいると、アルフレートがウェイトレスの女の子に尋ねる。

「バレットという研究家の家を知っているか？」

わたし達が向かうべき依頼人の家のことである。一瞬、女の子に戸惑いの色が見えた……気がした。村の中でも有名な人だから、と聞いていたので即答が無いことに違和感を感じる。しかし、

「バレットさん？この店の前の大通りを北に向かうと村のはずれに出るから、そこにある大きな屋敷だからすぐわかると思うわ」

戸惑いの色は気のせいだったのか、彼女はにこやかに答えた。

「さーてと、何食べよっかなー」

ローザの声にわたしは我に返りメニューに目を落とした。考え過ぎかもしれない。初めてのクエストに神経が高ぶっているのかも。

そう自分に言い聞かせながら、わたしはお腹を満たすメニューを選んでいく。いつもよりがつつかないようにしなきゃ、とヘクターの顔をチラ見しつつ考えた。

「ちょっと難しい人なのかもね」

決まったメニューをウェイトレスに伝え、彼女が厨房の方へ下がつていくとヘクターが小声で呟く。

「何で？」

ローザがきよとした顔で聞き返す。

「いや、名前が出た途端に店の空気が変わったから」

ヘクターに言われて何気ない素振りで見ると、何やらこっ

ちを見ながらこそと話す客や従業員の姿。躑がなつとらん。

「研究者なんて変人が多いからなあ。『科学者』なんて特によく分からんし」

フロロが天井を仰ぎ見ながら椅子を揺らす。

「……仮にバレットとやらが本当に研究者らしい研究者だったとしたら、依頼の中で嫌みのひとつも言われることもあるかもしれないが、私が言い返してやるさ」

アルフレートはそう言うってくれるが彼の場合、本気で相手の心臓を突き破るような嫌味を言いそうで少し怖い気もする。

しかしここまであからさまに町の人から注目されるバレットさんとはどんな人物なのか。わたしは自分の趣味の影響か、どんどん人間離れたバレットさん像が浮かんでくるのを頭を振って消し去ることにした。科学者なんてわたし達も『珍しい』と思った職業の人だ。得体の知れない人種なのでお友達が少ない、なんていう話だろう。

馴染めない研究者

「おねえちゃん達、バレットのところに行くんだって？」

料理の半分程を平らげたわたし達に声を掛けてきたのは、隣のテーブルで一杯ひっかけていたおやじ。あからさまに酔った顔では無いものの、この時間から酒をあおっている時点であまり絡みたくない。

「そう……ですけど、何か？」

無視するわけにもいけないので、おやじに一番近い位置にいるわたしはそう答えた。

「何しに行くのか知らねえけどさ、気をつけた方がいいぜ」

そう言つて手に持った黒いエールを一口。にやける顔を抑えているようにも見える無表情には、綺麗に整えられた顎髭がある。

「気をつけるって……何か問題でもある人なの？」

ローザが聞くと、おやじは顎髭をいじりながら答えを考えるように唸った。

「問題っていうか……、あんまり良い噂がないことは確かだな」

「悪い噂はあるんだな？」

アルフレートがずばり聞く。

「うーん……」

臭わせる割にはつきり物を言わない人だ。かといって適当にあしらう気にはなれない台詞じゃないか。

「俺達バレットって人から依頼受けてて、今から会いに行くんですよ。何か知ってたら教えて欲しいんですけど」

「あんまりおすすめしないな」

ヘクターの質問に答えたのは、空いたお皿を下げにきたウェイトレスの女の子だ。

「正直いつてどういう人なのか、村の人もよく知らないのよ。ある日突然、だったしね、村に住み着いたのも。結構前になるけど未だ

に村には馴染んでないし」

横でおやじも頷く。

「さっぱり姿は見せねえわ、しょっちゅう屋敷からでかい音が聞こえてくるわで気味悪いしよ。何の研究してるのかもわかんねーしな」
本当に絵に描いたような研究者ってことか、と思ったら続くおやじの言葉にぎよつとする。

「噂じゃ人体実験してるなんつー話もあるし……」

「人体実験!？」

わたしは思わず大声を上げる。オカルトめいた話しは好きだが、マッドサイエンティストといわれるような人物に憧れはない。しかし依頼人に会う前から妙な雲行きになってきてしまった。

わたしの反応に女の子は手をぱたぱたと振る。

「噂よー、うわさ。なんかね、バレットさんの家に入ってく姿が最後になつて行方不明になつて人達が結構いたりするのよー」

そ、それって……結構大事な気がするんだけど。軽い言い方といいこの人達も普通感覚じゃないような。

「な、なんか思わぬ方向に話が進んできたわね」

ローザが呟く。

「これって……学校側も知らない話、よね？」

言いたい事は言い終えたからなのかおやじとウェイトレスが去つたを見て、わたしはローザの肩を突く。「さあ？」とローザは肩をすくめた。

「そこまで含めての学園からのテストだったら、どうする？」

ローザの言葉にまさか、とも思うがクエストとは一筋縄では解決出来ないものである、なんて事を普段から言われていたりした。でも人体実験してるような極悪科学者の悪事を暴け、なんて見習いがするには荷が重いのと思うんだけど。

「私、仲良い先輩方からお話聞いたんですけど……、演習の段階じや単なるお使いレベルのクエストしかなかったって話でしたよ?だからそんな難しい話じゃないと思いますよ」

イルヴァの言葉にアルフレートは驚いて彼女の顔を見る。

「な、仲良い先輩なんているのか？その……お前が」

言いたいことは何となくわかる。しかしイルヴァはしれつと言いつ返した。

「はい、主にコスプレ関係の」

なかなか奥の深い世界である。濃い趣味だけに横のつながりが強い、というやつか。

「ま、今聞いた話の全部が本当だとも限らないし、それに放棄するわけにもいかないしね」

「あんたわくわくしてない？」

明るく言ったヘクターに、ローザは呆れた声を上げた。言われたヘクターは慌てるように手を振る。

「い、いや……まあ多少バレット氏へ興味は湧いたけどね」

「だーから、このメンバーじゃ普通に事が運ぶわけないんだって」にやにやしながらこちらを見て、楽しそうに言うフロロにわたしは深く溜息をついた。

「わたしは普通に運びたいわよ……」

しかし『おすすめしない』と言われても、じゃあ帰りましょう、というわけにもいかない。テーブルに料金を置くと、明るい日差しの中に出る。忙しそうな様子で通りを歩く商人達の姿に、現実に戻ってきたような安心感を覚えた。

「ここだな」

村はずれの一軒家を前に呟いたのはアルフレート。わたしは頷いた。

しかし……予想以上に大きい建物である。よく都会よりも人口の少ない村は家一軒が大きい、なんていうが、ここ山の中だよね？

目の前の家は「大きいお屋敷」のレベルを超えている気がする。周りを高い石壁に囲まれ、屋敷本体はつたに絡まれている。窓は少

なく、まるで巨大な箱がぼすん、と落ちてきたような印象だ。山間にある家とは思えない大きさは明らかに他の建物が並ぶ景色から浮いていた。土地を切り開くだけでも大変だったんじゃないだろうか。「これを押せばいいんじゃないかな？」

ヘクターが門の左右にそびえる石柱、その右側についたスイッチのようなものを指差す。見ると「御用の方どうぞ」の文字。

「あ、それよ。押せば中でチャイムがなるから。うちにもついてる」ローザが頷いた。さすが、というべきか。ローザの家はかなりのお金持ちなのだ。羨ましいことに、こういう庶民には縁のない物に異様に詳しくたりする。

「ここで押したものが中で鳴るんですか？」

イルヴァの問いにはわたしが答える。

「簡単な魔法装置の一種だからね。まだローザちゃん家とかここみたいに声が届かないような大きい家しかつけてないけど」

もっともそういう大きな家には大抵使用人がいたりするので、そういう面でもこの道具は普及していなかったりする。しかし町の人話しからして、てつきり人嫌いで家に籠っているタイプの人間かと思っていたら、訪問客の為にこんな物を取り付けていたりよくわからない人だ。

「じゃ、押すよー」

いつのまにかヘクターに肩車されたフロロがスイッチを押した。

押してもこちらには何も聞こえないが、中では来客を告げる音が響き渡ったはずである。

数秒たった時だった。

ぎいぎいぎい……と不快な金属音を立てて黒い大きな外門が動き出す。わたしは思わず身を引く。

「すごいですー」

手を掛ける人間がいはいはずの門が開いていく様子に、イルヴァが感嘆の声を上げた。どこか薄暗い屋敷の前に一同は顔を見合わせる。少し躊躇した後、門の中へと足を進めた。屋敷の大きさの割に

は狭い前庭を通り、大きな扉の前に立ち止まる。

「なんか嫌な雰囲気……」

わたしは暗く飾り気の無い建物にそう呟く。村の人の話を聞いた後なので余計に不気味な雰囲気に感じてしまう。

立派な玄関の扉の前に「どうするか」という空気のまま固まっていると、わたし達がノックするより早く、静かに開いた隙間から何かが顔を出す。

「どちら様ですかにや？」

わたしはその話し手の姿を見て一瞬驚く。猫である。フロロと違って耳やしっぽだけでなく、顔も体も猫。しゃきつと背筋が伸びているところを見ると二足歩行する生物のようだが、まさに猫そのもの。普通の猫より大きくてフロロと同じぐらいの身長だが、服を着ているわけでもなく茶の縞の猫。フワフワの体毛に大きな目、小さな手はどうやって扉を開けたのか不思議に思う程、猫のまんまだ。同じように面食らってるヘクターだったが、すぐに我に返ったらしく猫に挨拶をした。

「こちらのバレットさんがプラティニ学園に依頼を出されたと思うのですが」

猫はそれを聞いてぱちぱちと瞬きした後、大きく頷く。

「ハイハイ。学園の方ですか？お聞きしておりますにや」

最後の「にや」に悶えそうになる。いかん、かわいい。

「そうです、学園からきました」

ヘクターが言っていると、猫は扉を大きく開けた。

「どうぞ、中へ。旦那様を呼んできますにや」

入るとエプロンを着けたもう一人（？）の猫。こっちは耳と手足の先だけ黒い白猫だ。

「にゃんが旦那様を呼んでくるにやー。君はこの方たちを応接間へ」

茶虎がテキパキと言うと白猫が頷く。も、もしかして「にゃん」

は「私」とか「僕」の意味だろうか。かわいい！かわいいすぎる！

「なに身よじってんのよ、あんた」

「だって予想外の展開で……」

ローザの突っ込みにわたしは悶えながら答える。

「こっちですよー。着いてくるにゃー」

白猫の言葉に六人はそろそろと廊下を歩いていく。ぼてぼてと前を歩く白猫の姿にすっかりわたし達の雰囲気は和んでしまっていた。「歩いて来たんですかにゃ？」

白猫に聞かれ、わたしは首を振る。

「村までは馬車で……」

「馬車はお尻が痛くなるにゃー」

猫でもそうなのか……。いや、猫ではないのか？

しばらく歩くと見えてきた廊下の突き当たり、そこに扉を構える一室に通された。窓は少なめだが、手入れの行き届いた広い部屋である。中央に大きな大理石のテーブルが置かれ、隅には大きなソファーもある。花が飾ってあったり、クロスやカーテンの趣味も良い。窓が少ないからか、天井からは明かりの魔法『ライト』を封じた魔晶石らしきものがいくつもぶら下がり、そのいずれも趣味の良いランプシェードがかけられていた。促されるままにテーブルにつく。

「今お茶入れるにゃー。旦那様もすぐ来るにゃー」

白猫がぱたん、とドアを閉めると、すぐに隣の部屋から物音がする。「にゃー」だの「なぉーん」だの、食器のかちゃかちゃいう音もする。どうやら給湯室があるらしい。数匹の猫のあわただしい声がするのだ。

この時点でわたしの中ではこの家の嫌なイメージなどすっかり吹き飛んでしまっていた。

リーダー誕生

「君らが『卵』達かね。よろしく頼むよ」

わたし達がお茶を飲みつつ待っていると現れたバレットさんは、拍子抜けする程普通の人だった。

研究者特有の変わり者の雰囲気はうつすら醸し出しているものの、頭がボサボサなくらいで、柔らかい顔つきはむしろ良い人そうであった。歳は六十を超えるぐらいか。白髭で顔を覆い、同じ色の頭は寂しくなっている。小柄なので威圧感も無く、青いローブを着ている姿は魔術師のようにも見えた。

『卵』とは、学園外の人がよく使う、わたし達のような学生の愛称だ。

「君達を呼んだのはね、私の研究に必要な材料を付近の洞窟から採ってきてもらおうと思ってなんじゃが」

そこまで言うと、バレットさんは髭をさすりつつわたし達を見回す。

「若い子はいいのー。目がキラキラしてる」

と嬉しそうな声を上げ、にこにこした。おじいさんと言っていい年代の人から見るとそう見えるのかしら。

「で、話の続きじゃが、その材料というのが『ポゼウラスの実』でな」

ポゼウラスの実。わたしも魔術を習う身である。その存在は辛うじて、といった程度の知識でだが知っていた。

光を好まない植物、しかしながらある程度の温度湿度が必要な生態で、それゆえ洞窟などに生える珍しい植物である。洞窟といえば野良モンスターの巣になるのが世の常。そのため依頼してきたのであろう。

「その姿がわかる方はいるかの？」

わたしとローザ、アルフレートが手を上げる。わたしは図鑑で見

ただけの知識だが十分だろう。

「よしよし、なら大丈夫そうじゃの。で、この村から半日程の所に自然洞窟があるんじゃが、その奥に生えてるはずじゃ。小さい洞窟だから苦勞も無いだろう」

「今までもそこで調達を？」

アルフレートの質問にバレットさんは頷く。

「ここに来て何年になるかわからんが、ずっとじゃ。今までは流れの傭兵に頼んでいたんじゃが、欲しい時期に丁度よく流れの傭兵が村にいるとは限らなくての。今回初めて学園に依頼したんじゃよ」

「じゃあ最後に頼んだ傭兵が、根こそぎ取ってない限りはあるはずだ」

アルフレートが一人呟く。彼がしつこく聞くのには訳がある。ポゼウラスはその珍しい生体ゆえ、あまり見かけることがない。ここにはないから他を探そう、とはなかなかいかないのだ。自分たちの非がないとしても、行ってみてありませんでした、では後味悪い。『見つけてくるまで探し回れ』なんて言われなくても限らない。

「乾燥させて使うんですよね」

わたしが聞くと、バレットさんは満足そうに頷いた。

「そう、よく知つとるな、お嬢ちゃん。だから持てる限り持つてきてほしい。ただし、後先のことを考えて根は残してきてくれよ。根が残ればそこからまた成長するじゃろうからな」

「お茶のおかわりをどうぞにゃ」

会話が途切れた調度いいタイミングで猫達が紅茶を運んでくる。

「一緒にどうぞ」とカップケーキまで出された。オレンジの輪切りの蜜漬けが乗ったそれを見ていると、

「食べながら少し話そうじゃないか。そうだなあ、学園の話なんて聞きたいねえ」

バレットさんにににこと言われるが、皆顔を合わせて躊躇してしまう。こんなのにのんびりしていて良いのかな。その気持ちを見透かしたようにバレットさんは手を振った。

「今日は時間も中途半端だから、出発は明日にするといい。寝場所と食事は提供するから、年寄りの話に付き合ってくれると嬉しいね」
「そういうことなら」

わたしは答える。こちら珍しい学者の話聞いてみたいところでもある。

バレットさんの質問により学園での授業やどんな教官達がいるのか、生徒の数、学校内の施設などを話していく。興味深そうに聞いていたバレットさんがわたし達一人一人を見回した。

「君らは何故、このメンバーで組むことになったのかね？くじか何かで決めたのか？」

バレットさんの問いかけにローザが「いえ、そうじゃ……」と言いかけた時、

「学園でも優秀な生徒の集まりですよ」

アルフレートがにこやかに答えた。「はは……」と何人かの乾いた笑いが響く。

「そいつは楽しみじゃの。くじ引きじゃないとすると、生徒が自主的に組むということか。なかなかシビアじゃの」

わたしは頷きつつも、こんな話し面白いのかな、と思ったりする。しかしバレットさんは身を乗り出し質問を続けてくる。

「パーティの役割もあったりするのかね？例えばリーダーとか」

「この人です」

バレットさんの質問にローザが即答する。指差されたヘクターがむせこむ。

「え、ちょ……」

何か言いたげに全員の顔を見るヘクターだったが、全員から目を逸らされてしまい、最後にバレットさんと目が合う。

「やつぱりリーダーになる子は見た目も違っの。お兄さん、男前じゃよ」

バレットさんの言葉に後ろにいた猫達がぱちぱちと手を叩いた。

猫達に泊まる部屋を案内されたのは、既に夕方近い時間になってからだった。用意された部屋は二つ。男女に別れ、わたしとイルヴァ、ローザが同じ部屋へ入って行った時は猫達も不思議そうな顔をしていたが、ローザのしゃべる姿を見て何やら納得顔になっていた。物分かりの良い子達である。

部屋は広さもベッドの柔らかさも申し分ないものだった。一つ気になるのはやっぱり窓が少ないこと。明かりを取り入れる為に上方に横長の窓があるだけである。

「何か拍子抜けよねー」

ベッドにうつぶせに寝転んだローザが枕に顔をうずめ、唸る。

「うん、特に問題のある人にも見えないけど。付き合いが薄いだけなのかもね、村の人と」

わたしの言葉にイルヴァも頷く。

「田舎特有の陰湿さなんですよ」

……それはちよつと同意しかねるが。

でも村の人にも問題がある気がしてしまうな。バレット邸に入るのを最後に行方不明になった人がいる、なんて話しても見間違いなのかもしれないし。

「まあ無理矢理気になるところを上げれば、何で学園の事をあんな興味があるのか、よね」

わたしが言うところローザは首を傾げる。

「若い子の話しが面白いんじゃない？お年寄りってそういう方多いわよ」

とんとん、と遠慮がちなノックの音がする。

「はい」

一番近場にいたわたしは扉を開けた。目の前にはヘクターの顔。

「うどあー！」

わたしは思わず後ずさる。ここ最近の流れで少し馴れたとはいえ、顔アップはだめだ。

「今、大丈夫？」

ヘクターが言うと、その後ろからアルフレートとフロロも顔を出す。

「このお兄さんが何か言いたいことがあるらしいぞ」

そう言うつとアルフレートは部屋にずかずか入ってくる。部屋をぐるつと見て一言。

「ふむ、部屋の質は一緒なんだな」

「デリカシーのないエルフねえ……」

ローザがむくり、と起き上がった。

「で、話つて？」

みんなが適当にベッドに腰掛けるのを見て、わたしはヘクターに尋ねた。

「いや、その、さっきの『リーダー』の話なんだけど……」

「ぴつたりじゃない。他に誰がやんのよ。いよ！リーダー！男前！」

ローザの冷やかしにも、めげずにヘクターは手を振り遮る。

「いやいや、俺はさ、ここに入れてもらった立場なわけだよ。新参

者がやることじゃないような気がするんだけど……」

「私がやるよりはよっぽどマシですよ」

イルヴァの大変自覚ある言葉に、皆頬を引きつらせる。

「なら逆に尋ねよう。他に指名するとすれば誰がいい？」

アルフレートに顔を覗きこまれ、ヘクターは困ったように頭をかいた。暫く考えた後、ローザを指差す。

「ローザとかは？」

「あたし？リーダーっていうと何かと教官と話したり、あと依頼人と話すのも役割でしょ？無理無理、オカマだもん」

「じゃあアルフレート……」

「私か？言つとくが教官にも依頼人にもおべつか使わないからな。

それと全員が私を神を崇めるならいいぞ」

それわたしが嫌なんですけど。そう思い、アルフレートの顔を睨んだ時だった。

とんとん、と再びノックの音がする。

『お食事ですよー』

扉の向こうからは茶虎猫の声。

「じゃ、そういうことで」

ローザは立ち上がるとヘクターの肩をぽん、と叩いた。

「応援してるぞ」

これはアルフレート。

「ヘクターさんなら大丈夫ですよ」

これはイルヴァ。三人は順に部屋を後にする。そしてフロロはおもむろにヘクターの肩に乗ると、肩車の体勢をとった。

「さ、行こうか」

それを聞くとヘクターは溜息一つ、諦めの表情で立ち上がった。ハラハラと状況を見ていただけの自分が情けない。

廊下に出ると茶虎猫を先頭にぞろぞろと歩く列。その最後尾にいる白猫がわたしを見てにやり、と笑う。

「今日のご飯は張り切って作ったにや。タンタもいっぱい手伝ったにや」

「あ、タンタっていうのね、あなた」

わたしは思わず顔がほころぶ。先端が黒い模様なのを見るに始めに部屋を案内してくれた猫だろう。

「こんなに大人数の食事頼んでごめんね。大変だったでしょう？」

わたしが聞くとタンタは大きく首を振る。

「にやん達はお世話するの大好きなんだにやー。お仕事いっぱいあると嬉しいにや。若い人ご飯いっぱい食べるから大好きにやー」

若い人、っていうとバレットさんもそんな事言ってたな。しかし働くのが好きとは。彼ら皆がそういう性格なんだろうか。

「ウェリスペルトの学園にも行ってみたいにやー。若い人いっぱいにやー」

「一度来てみれば？わたしが案内するよ」

するとタンタは大きな目をぱちぱちさせ、ゆっくりと首を振る。

「……バレットさんに村から出ないよう言われてるにや。にゃん達とバレットさんとのお約束」

「あー、そうなんだ……」

わたしはそう呟き、タンタのぽてぽてと可愛い歩きを眺め見る。村から出ちゃいけない、とは。どういふことなんだろう。

魔法と科学

猫達があわただしくカトラリーを並べる間をくぐって、夕食の席につく。テーブルを見渡すと、目の前にはオードブルらしき冷製ものが。他にも大皿のグラタンやらやたら大きなお魚の丸焼き、コールドビーフにキノコが散らばるサラダ。随分と熱のこもった歓迎ようだ。

「さあさあ、みんな席に着いたらいただこう」

バレットさんが奥の席からニコニコとした顔を向けてくる。

「すいません、何から何まで」

恐縮するヘクターにバレットさんは首を振った。

「私は普段、この子らとだけで暮らしとる。たまの機会、じっくり楽しみたいんじやよ」

この子ら、とは猫さん達のことであろう。バレットさんと猫達は顔を見合わせるとにこー、と笑った。始めに会った茶虎に白猫のタシタ、他にも黒にお腹だけ真っ白な子や、三毛タイプにクリーム色の長毛種もいる。

「みなさんお若いから、今日はオレンジジュースにしましたにや」

三毛の子がそう言って、グラスにそそいでくれた。お礼を言うといの前の料理に口を付けた。ベビーリーフに油ののったお刺身がきれいに並べられ、バルサミコの匂いがするソースがお皿に線を描いている。

「おいしい！」

お世辞なしの感想を漏らすと猫達は嬉しそうに目を細めた。

「これってみんなあなた達で作ったの？」

わたしが聞くと、茶虎が頷く。

「食事はにゃん達で毎日作るにゃー」

ぶっ、とアルフレートが吹き出す。そこにがつーと痛そうな音。隣りに座っているローザが、彼の足を踏みつけたのであろう。そう

いやアルフレートって変に潔癖なところあったっけ……。それにしても失礼な奴だ。

「バレットさんはどんな研究をしているんですか？」

誤魔化そうとしたのか、ヘクターがバレットさんに尋ねる。

「ふむ、主にやっているのは生活用品じゃな」

意外な答えにわたしは頭に「？」が浮かぶ。その顔を見たのかバレットさんは話を続けた。

「私は魔術も多少かじつとるが、あくまでも研究に必要な部分だけ。私は科学者でな。生活が豊かになるような発明品を考え、実用的に使える物を日夜研究しとる」

そこでワインを一口。

「ふう、例えばこんな夕食の支度なんかじゃな。この魚を焼く場合……、お嬢ちゃんだったら何を使う？」

わたしは問いに答える。

「これだったら、オーブンね。この大きさじゃフライパンじゃ焼けないし」

「そのオーブンは、どうやって温められる？」

「どうやって、って……火を焼べたり、最近じゃ魔力装置で簡単に火を着けられるタイプが出てきたわ」

「それを作ったのが私じゃよ」

「えっ……！」

絶句しているわたしの隣りから、イルヴァがのほほんと口を出す。

「へー、すごいじゃないですかあ」

うーん……。あんまりすごそうに聞こえない。本当に仰天するくらい凄い事なんだけど。

バレットさんが言ったオーブンはほんの一例で、実際にはそのオーブンに組み込まれている着火装置がすごい発明なのだ。スイッチ一つで発火させ、さらには火の大きさの調節までしてしまう装置はオーブンに限らず、コンロやお湯を作る設備まで使われている。

家庭のキッチンがらりと変えさせた発明に「この発明家に女は

感謝し、男は恨みに思った」という話しを授業で聞いたことがある。わたしが生まれた時からあるものなので、わずか十数年前の発明品と知った時は驚いたものだった。

「今はまだ魔術に頼っている段階じゃ。これからは魔法の力無しに……そうじゃな、照明のようなものが出来ればいいと思つとる」

なるほど、それで『科学者』というわけか……。もしかしたら門のベルもこの人の発明品だったりするのかもしれない。

「貴方にとって魔法と科学の違いは何だ？」

アルフレートも興味を持ったようで身を乗り出す。バレットさんは髭をゆつくりと触る。

「マナへの追求、かね……。魔術師、特に現代の魔術師はマナを解明出来ない粒子だと位置づけておる。これはかの偉大な大魔導師セシルが『マナの解明は不可能』と結論付けたことからじゃ。そこからマナの研究は止まっておる。嘆かわしいことじゃ」

「追求を続けるのが『科学者』だと？」

にやりと笑うアルフレートにバレットさんは頷く。確かに魔術師というと『魔法を使う人』みたいになつてゐるもの。ソーサラーであるわたしにはちよつと寂しい話しだけど、自分がマナを解明出来るか、と聞かれると自信が無い。

「マナって何ですか？」

イルヴァがわたしを見る。わたしは少し頭を捻ると彼女でも分かりそうな言葉で答えることにする。

「いたるところに漂つてゐる魔法の源よ。これがあるから魔法は発動するって言われてゐるの」

「へー」

棒読みな返事だが分かつてくれたんだろうか……。

「魔術を研究するのが魔術師なら、科学者は世の仕組みそのものを研究する者、というのが科学者の間ではよく言われることじゃな。」

……まあわしは細かい物をいじって作るのが好きなだけ、とも言えるがね」

バレットさんはふっふ、と笑った。

「俺もからくりは好き」

フロロの言葉にバレットさんは目を大きく開ける。

「おお！そうか！じゃあ君とは今度ゆっくり語り合いたいもんじゃの」

その笑顔を見て、わたしはフロロが物の『解体』が好き、という事を、教えるべきか躊躇していた。

まだ日の昇りきる前に、わたし達はもそもとベッドから這い出した。バレットさん特製目覚まし時計を探り当てると、叩くようにして止める。

「むー……眠いー」

横から聞こえたローザの声にわたしは答える。

「わたしだつて眠いわよー……。あ、イルヴァ起こして。絶対また寝てるから」

昨日はバレットさんときつちりデザートまで楽しんだ後、部屋に戻って毎日の習慣にしている呪文の詠唱の練習までしたのだ。わたしも寝起きが良いとはいえないが、初の冒険に赴く日にぐだぐだしてもいられない。

「おし！」

気合いを入れると部屋を出た。

「お目覚めかにゃー」

廊下をちょうど、白猫のタンタがお湯を持って来てくれるところに会う。

「ゆっくり寝れたかにゃ？お湯どうぞにゃー」

タンタがお湯の入った洗面器を渡してくれた。猫達もわたし達の出発が早いのに合わせて起きてくれているらしい。廊下の曲がった先から「にゃー」という声が微かに聞こえた。

「ほんと、何から何までありがとう」

「気にするにや。働くのが好きなんだにや。人がいっぱいいるとやることいっぱい嬉しいにやー」

そう言ってくるくと回ってみせた。本心から言っている様子にほつとする。初めて出会う種族だが世界でも数少ない種族なのだろうか。町では見たことが無いもの。

がちや、という音が廊下に響く。隣の部屋の扉が開いた。

「あ、リジア、おはよう」

少し眠そうなヘクターが顔を出す。

「ああおおおおおはよう」

心臓が爆発しそうになる。朝の挨拶からこの調子だ。この先、生き残れるのか、わたし……。しかし寝起きの顔を見たり見られたりするの、やましいことなくとも気恥ずかしいものである。

「あのさ、アルフレートがどうしても起きないんだけど、どうしたらいい？」

困り顔のヘクター。うつむ、見るからに低血圧顔だもんなー、あのエルフ。

「大丈夫。意外と頑丈だから死なない程度にやっちゃって」

「うん、わかった」

わたしの言葉に真顔で部屋に戻って行く彼。……大分わたし達に馴れてきてくれたようで嬉しい限りだ。

イルヴァを叩き起こし、そのあと全員でアルフレートを叩き起こす。朝食もしっかりいただき（ふつかふかの焼きたてパンだった！）、なんとお弁当まで持たせてもらったわたしたち達。至れりつくせりな対応は高級ホテルに泊まったかのような気分で、これから洞窟に出かけるなんて雰囲気を感じられない。

出発の際には玄関扉の前でタンタがわたしの手を握り、

「がんばってくるにやー」

と言ってくれた。わたしはぷにぷにの手を握り返すと、にっこり頷いた。

「いつてきますー！」

全員で大きな声で挨拶をすませると、まだ静かな村を歩きだした。

山の中、日の昇る前は薄っすら霧掛かっっていて寒い。わたしは口―ブを首元までしっかり閉めた。来た時は賑やかだった看板が並ぶ通り、まだ人の気配は無い。ちちち、と小鳥が鳴く声がするだけだ。と思つたら、あの大衆食堂の前でウェイトレスの女の子が箸をかけていた。

「あら、随分早いねー。……帰るの？」

そう声を掛けられ、わたしは首を振る。

「ううん、今からバレットさんに頼まれた物の調達よ」

「会つたんだ！どうだった？」

何だかわくわくした様に見える。やっぱりバレットさんを本気で気味悪がっているというより、半分面白がっているようだ。

「良い人だったわよ。一緒に暮らしてる猫も可愛くて」

ローザが言つた感想にわたしも頷く。ウェイトレスの女の子は目を丸くし「へー」と呟いた。

「なら良かったじゃない。あれから結構、皆で話してたのよ。君達まで消えちゃったら、さすがに押し掛けた方がいんじゃないかって」

わたしとローザは顔を見合わせる。フロロが間に入ってきた。

「そんな相談するぐらい、村人の失踪事件ってマジな話なわけ？」

「そりゃそうよ、だって騒ぎになつた時は警備団の人まで来て捜査していったのよ？ 結局

『単に挨拶無しの引越し』で片付いたみたいだね」

再び微妙な空気になるわたし達を見て、ウェイトレスの女の子は慌てたように付け足す。

「でも実際に会つて良い人だったんなら、それで良いんじゃない？」

「……まあね」

わたしはそう返すも、すっかりしない気分だった。

『にゃん達とバレットさんのお約束』

何故か唐突にタンタの言葉が蘇る。どうして村から出られないの
だろう。あんなに良い子達なのに。

「頑張ってきてね」

女の子の声に我に返る。「ありがとう」と伝えようと、既に歩きだ
していた仲間の元にわたしは走っていった。

リーダー、最初の試練

村を訪ねてきた時に使った道とは違う脇道に入り、半分獣道のよ
うな鬱蒼とした中を歩いていく。

「半日ぐらいつて話だったわよねー。急げば昼ぐらいには着くかし
ら？」

小枝を踏みしめるばきばきという音が鳴る中、ローザが口を開い
た。

「順調に行けばいいけど、日帰りは無理だと思った方がいいかもね」
あいかわらずフロロを肩車しつぱなしのヘクターが答える。それ
を聞いていたアルフレートがうんざりしたような声を出した。

「野宿ってことか？私は体力がないんだ。まいったな」

えっと、エルフって本来『自然生活をする人』じゃなかったつけ
？一日の野宿ごときでぶーたれる妖精って一体……。

しかしそのアルフレート含めた四人に比べて、わたしとローザの
歩き方は何だか覚束ない。同じような底のしっかりしたブーツを履
いてきてはいるのだが、経験の差がでてしまっているようだ。体力
が持つか早くも心配になってきた。

「それより気になってたんだけど」

フロロが話題を変える。

「ポゼウラスの実ってどんなもんなの？聞いたことないけど」

わたしとローザは顔を見合わせた。

「魔導をかじってる人間でもあんまり触れる機会が無いものだと思
うわよ。マナの動きをほんの少しだけ鈍くするんじゃないかな」
「それだけ？」

わたしの言葉にフロロが眉をひそめる。

「だけ。……話聞く限りじゃ、かなり特殊な研究しているみたい
だからね。バレットさんしか知らない効果があるのかもしれないけ
ど」

「バレットさんがやってる研究って魔法の反対、みたいな事言ってたね」

ヘクターの言葉に頷いたのはローザ。

「あたしも聞いたことないことばっかだったのよね。『魔導の力じゃない方法での照明』やらなんやらって」

わたしも大きく頷いた。

バレットさんが語ってくれた彼の研究内容とは、わたしの理解を超えたものだった。魔導の力を使わない照明器具、と彼は言っていたが、蠟燭や松明、はたまた光ゴケや精霊の力を借りるわけでもない『別の力』とは何なのか。わたしには分からなかった。

今主流になっている照明器具といえば魔晶石を使った「ライト」だろう。

魔晶石という魔法の力を封じたり、それを簡単なスペルで解放出来たりする恐ろしく便利なものが、古代文明の遺跡から見つかったのが数百年前になる。そのままと強大すぎるそれを簡略化、大量生産にこぎ着けたのがわずか十数年前だ。そのプロトタイプに「ライト」等の簡単な魔法を封じてやると、あら便利。誰でも使える光源の出来上がりである。今ではデザインも増えて一般家庭にまで広がっている。それもこれも魔導の進歩の恩恵であると言えるよう。

バレットさん自身がそれに大きく貢献しているのであることは、彼の「オープン」の話でも想像がつく。何しろ彼はエレメンツの中でも扱いにくい「火」のエレメンツを、スイッチ一つでコントロールすることができる魔晶石を発明する、という偉業を成し遂げているのだ。わたしも発明者の名前を知らなかったのだが、まさかこんな形で会うことになるとは思わなかった。その彼が魔導の力を否定する研究をしている。彼はこう言ったのだ。

「不可思議な力を『魔導』『魔法』というのだ。人間は日々、真相の解明に努力するべきなのじゃよ。マナという力に頼るなかれ。人間は魔法に頼りすぎる」

その話しに魔術師を目指す自分を否定されたような気持ちにこそ

ならなかったが、わたしにはその内容も、その研究の意味でさえ……分からなかった。

「噂と違って良い人ではあったけど、まあ変わり者よね」

ローザの呟きにわたしは頷く。

「『良い人』になつてたのは俺らにだけかもよ」

フロロがけっけ、と笑った。わたしは「やめてよ」と返しつつ、ウェイトレスの女の子や酒飲みおやじの顔を思い出す。火の無いところに、じゃないけど単に引き籠もりなだけで人体実験の噂なんて立つものかしら。

「ただでさえ顔を合わせる面子が限られた人口の少ない村じゃ、あのじいさん浮きすぎてるからな。少々穿った見方されてもしょうがない」

アルフレートがニヤリと笑う。

「引き籠もり、『科学者』なんて得体の知れない職業、それに謎の同居人達だ。なんせまるきり動物の猫の外見で、あんなに高知能な種族、私でも見た事ないぞ」

わたし達より長い時を生きて来たアルフレートの経験したことは、わたし達より圧倒的に多いのだろう。その彼も知らないとは。

「でも、怪しいだけで悪人扱いは違うと思うよ」

わたしはそう漏らす。その瞬間、足に鈍い衝撃。木の根に足を引っ掛けたりしい。転ぶ、と思つて息を呑んだ。

「……大丈夫？」

ふわりと体が浮いたような感触とヘクターの声。気がつくと腕を取られていた。呆氣にとられるわたしに「気をつけてね」と言つて彼はわたしの頭にポン、と手を乗せた。こ、これは。

「この道どっちに行けば良いですかー？」

先頭を歩いていたイルヴァが大声を上げる。

「そんなにでかい声じゃなくても聞こえるわよ」

ローザが呆れたように返した。と、アルフレートがわたしの顔を見て仰天する。

「うわっ、お前どうしたんだその顔！」

わたしは顔から火を噴いている熱を感じながら呟いた。

「何でも無い……」

何か言い争っているローザとイルヴァにフロロが声を掛ける。

「左の下りになってる方の道に進みな。右方向から獣の唸りが聞こえる」

耳を微かに揺らしながら自信満々に言うフロロにヘクターが「へえ」と感心したような声を上げた。

その後も「どっち？」と聞くたびにフロロが適切な道を教えてくれる。バレットさんが持たせてくれた地図を見ると少々迂回した形になったりもしていたが、すぐに元の道に戻ってくるのが不思議だ。「モロロ族がこんなに耳良いつて知らなかったよ」

ヘクターが頭の上にいるフロロに言う。するとその彼の頭をぽんぽんと叩きながらフロロはにやりと笑った。

「俺と組むメリット、分かったかい？」

肩車される分際で偉そうな、と脇から思う。

徐々に道が広がってくるにつれ、頭の上を覆っていた木の葉や枝も開けていく。登りきった太陽から足元を照らす光と心地好い暖かさがもたらされていった。冒険というよりハイキングを楽しむのようない気分になってくる。

フロロが何も言わなくなったので、地図通りに歩き続けること暫し、

「朝早かったから眠くなってきちゃったわあ」

ローザが欠伸する口を手で覆った。するとイルヴァが立ち止まる。「何？」と口を開こうとした時、耳に聞こえてくる音があった。

ざざざ！と木の葉をかき分けてくるような足音だ。恐怖を感じた時には既に、黒い影が脇から飛び出してくる。

「コボルトだ」

ヘクターがロングソードを抜き、フロロが飛び降りる。目の前に飛び出してきたのはわたし達よりも数の多い集団。犬のような顔をしているが二足歩行で、短く細い手足は人のそれよりも歪で不気味に見えた。フロロより少し大きいくらい이지만目が爛々としていて怖い。

実はモンスターと間近に対面するのは初めてというわたしは固まってしまった。彼らの手に持つ汚いナイフを見て喉を鳴らす。

「うわ！」

ヘクターの驚いた声と同時に、ふ、と黒い物体が鼻先を掠める。遅れて襲ってくる風圧に、イルヴァがウォーハンマーを振り回したのだと気付いて腰を抜かす。コボルトの集団の中心に振り下ろされたウォーハンマーが地面を揺らした。ぼこん！と鈍い音を立てて地面にクレーターを作る。

「いやああああ！」

ローザの野太い悲鳴はコボルトに向けてではない。仲間存在を忘れたかのようにハンマーを振り回すイルヴァから、コボルト達も含めて全員が離れていった。

「なんだあいつは！迷惑な奴だな」

アルフレートが舌打ちしながら走り去る。わたしも出来るだけ遠くに離れたいのだが、足に力が入らない。だって！一歩間違えればわたしの頭がぼこん！って！

腰を抜かしたままの体勢で後ずさる、という情けない動きをしていた時だった。

「ん？」

手に何か柔らかいものが触れる。しゅるしゅる、という聞きなれない音と共に顔の前に現れたのは銀色の長いものだった。ちろりと赤い舌がわたしの鼻をくすぐる。思考停止状態の中、嫌悪の感情だけ爆発した。

「ぎゃあああああ！」

わたしの悲鳴に目の前の銀色の物体は動きを止めるが、「シャー

！」と大きな口を開けてくる。蛇だ、大蛇だ、毒蛇だ！と、再び悲鳴を上げそうになるが、すぱん！と景気の良い音と共に蛇は倒れる。光るロングソードとヘクターの顔が見えて安堵の息を吐いた。

「平気？ 噛まれなかった？」

ヘクターが心配そうな顔をしながら手を差し出してくる。それを戸惑いながら握り、立ち上がった。お礼を言おうとすると、ヘクターが何かを拾い上げる。

「ああ、大丈夫、こいつ毒無いよ」

だらん、とした彼の手の中にある物の断面図が見えた瞬間、わたしの中で何かがはじけてしまった。

「やだあああああ！ ファイアーボール！」

「ひえ！」

わたしの手から放たれた赤い光の弾は、仰け反るヘクターのぎりぎりを掠めて空へ飛んでいく。山の連なる景色に走っていくと、ぼーん……と遠くから爆発音を響かせた。

「ちょっと落ち着いて話そう」

ヘクターが神妙な顔で発言する。皆のお昼ご飯を食べようとする手が止まった。明るい野原のような場所に出たので時間も調度良い事だし、持たせてもらったお弁当にしよう、となったすぐである。

「やだあ、リーダーっぽいわよ！」

と手を叩くローザにヘクターは「……ありがとう」と頷いた。そして皆の顔を見回す。

「ちょっとパーティの役割みたいのがバラバラになってる気がするから、確認したいんだけど」

そう言ってフロ口を見る。

「さっきのコボルトの集団には事前に気付かなかった？」

「気付いてたよ」

平然と答えるフロ口にローザが険しい顔で身を乗り出した。

「ちょ、ちよつと何よ、それ。それまでみたいに教えてくれればよかったじゃない！」

「聞かれなかったから」

そう言ってフロロは「うけけ」と笑う。面白くない。全然面白くない。

「……じゃあこれからは、フロロは『聞かれなくても』何か察知した時は教えてくれ」

あくまでも口調は優しいヘクターを心底尊敬してしまった。フロロの頷きを見ると、次はイルヴァに向き直る。

「イルヴァの方はちよつと気持ちは分かるんだ。……今までファイタークラスのメンバーだけで遠征したりしてたから、さっきみたいな無鉄砲に突っ込むやり方でも何とかなってきた。回りも動ける奴ばかりだから気も使わないしね」

ヘクターのゆっくりと確認するような話しにイルヴァはうんうんと頷く。

「でもこれからはリジアとローザみたいに武器を持ってない人とも行動するんだ。二人を守るような形を取らなきゃいけない。まずは体勢を整えて、周りを見てから動いて欲しい」

「はい！」

イルヴァが元気よく手を上げた。アルフレートが「私は？私は？」とうるさい。

「アルフレートは……逃げるのすっごい速かったよね」

「そうじゃない、私だって手ぶらだぞ？なんで守る対象がこの二人だけなんだ」

ずるいー、を連呼するアルフレートの顔は完全に面白がっている。ヘクターが大きな溜息をついて肩を落とした。

口開ける魔物の巣

「いやーん、おいしそうだわあ！」

お弁当の中身を見て、ローザが身をよじらせた。タンタ達を持たせてくれたお弁当は朝食食べたパンで作ったサンドイッチだった。中身はツナやたまご、ローストビーフと野菜サンドもある。一生懸命作っている姿も可愛かったんだろうな、と思ってしまった。

「なつかしいなー」

ヘクターがタコさんウイナーをしげしげ眺め、妙に嬉しそうに口に運ぶ。こういう姿を見れるのも同じパーティという立場の特権だなあ、と頬が緩んだ。そんな風に油断していたからか、気がつくとなたしのお弁当箱にフロロが野菜を移動させている。

「ちよと！好き嫌いしないでこれくらい食べなさいよ！」

「肉が多いな……」

騒ぐわたしの横でアルフレートがぼやく。イルヴァがすかさずフロクを出した。

「じゃあ食べてあげます。そのかわり口付けしないでくださいね。付けたのは食べられませんから」

「だから私はばい菌か？」

アルフレートが睨みつけているにも関わらず、イルヴァは彼のお弁当から肉類を奪っていった。それを見て思いつく。

「アルフレートが野菜を食べて、フロロが肉を食べればいいじゃない！」

真つ当な意見を言ったと思うのだが、二人は揃って首を振り「つまらない奴」と言ってくる。イライラするな。

「仲良いねー」

ヘクターがしみじみと呟いた。ローザがそんな彼の言葉に溜息つく。

「いや、こんな低レベルなやり取りにほのぼのしないでいいから。」

……と、そうだリジア、あんた洞窟に着いても、中で魔法使わないでよ？」

厳しい顔のローザにわたしは「は？」と返すが、隣りでアルフレートも頷いている。

「な、何でよ」

「何でって……言わなくてもわかるでしょうが」

呆れた口調のローザの後をアルフレートが引き継いだ。

「みんな、死ぬぞ」

ごく……。その言葉に全員が唾を飲み込んだ。

わたしの魔法への不信感が、先程のファイアーボールでダメ押しになってしまったようだ。山の一部が黒煙上げてへこんでいたら無理もない。

「で、でも何もしないわけにもいかないでしょう？」

わたしの辛うじての反抗にイルヴァがいつもの真顔のまま答える。

「リジアは何もしなくて大丈夫ですよー。モンスターが出てきたとしてもイルヴァがやつつけてあげます」

「さっきはわたしの頭を『やつつけ』そうになつたくせに、よく言うわね……」

わたしは鼻を掠めたウォーハンマーを思い出して身震いした。

「まあ、良いように言えば、モンスター相手にも臆することないって頼もしいじゃないの」

ローザの言葉にイルヴァとヘクターは顔を見合わせる。

「授業ではモンスター相手にするなんて毎日のことですから」

そう答えるイルヴァにヘクターも大きく頷いた。

「俺達の授業じゃゴブリンやらコボルトやらの巣穴に突っ込まれるんだよ。それこそローラスの隅から隅まで被害を調べて遠征させられるわけ」

二人は眉間に皺寄せ、苦悶の表情を浮かべる。何やら辛い思い出らしい。

「トロールの集落に崖から蹴落とす教官もいますからねー」

そう言つてイルヴァはなぜかピースサインをする。

「な、なにそれ……」

ローザが呻いた。

そういやファイタークラスってしょっちゅう校外授業という事ではない時多いつけ。泊り込みの遠征も多いみたいだし、魔術師科の授業に比べて随分ハードだ。

「あんた達は大丈夫そう？」

ローザが黙つたまま食事をする妖精二人に問いかける。するとフロロは手を振つた。

「モロロ族の逃げ足を舐めるなよ。……それに旅は慣れてるしね」
なるほど。モロロ族は本来、定住生活をしない種族だ。旅から旅の生活ではそういうこともあるのだらう。彼が学園に留まっているのも不思議な事だし。

アルフレートの方はといえば、くだらない質問を、とばかりに返事もしない。

なんだか急に不安になってくる。わたしはモンスターに会うのも初めてだったし、魔法禁止令も出されてしまつて、このメンバーの中ですら足手まといになりそうな気配がしてきた。

皆が食べ終わった昼食を片付け始めたことにはつとめる。わたしもサンドイッチが包んであったクロスを畳むと立ち上がる。横で腰を伸ばす仕草をしているヘクターにそつと近づいた。

「あのー、さつきごめんね」

わたしの言葉にヘクターは目を大きくして瞬く。何の事が考えているようだったが、ふつと笑顔になった。

「ああ、気にしないでいいよ。俺も無神経だったなと思つたから」
「……蛇のこと？」

わたしの小声の問いかけにヘクターは「そう、それ」と言つて笑う。わたしの謝罪も何の事か分かつてくれたようだ。

「蛇見せただけで魔法ぶつ放されても許すんだ？にいちゃん優しいな」

フロロが早速、ヘクターの肩によじ登る。そのずうずうしさにむ
っとしていると、ヘクターがふ、と苦笑した。

「何ていうか、難しいね」

それを聞いてわたしは固まってしまふ。

「さー、もう洞窟まで近いはずだから、さっさと行きましょう！」
ローザの張り切った声にイルヴァが拳を上げた。その二人に続く
ヘクターの後姿を思う。

どういう意味だったんだろう？じわじわと湧く不安は先程までの
物より粘っこい。

どうしよう、呆れられたんだとしたら。

「やっぱこのパーティに入ったこと後悔してたらどうしよう……」

「『もう逃げられないぞ』って脅せばいいんじゃないか」

「……独り言に返事しないで、アルフレート」

わたしはいつの間にか横にいた、にやにや笑うアルフレートを睨
みつけた。

バレットさんの手書きの地図を頼りに、この辺かと思われる場所
を隈なく探していく。地図と周りの景色を忙しくなく見る動作に目
が回ってきた。

始めはハイキング気分でいい気持ち、などと思っていたのだが早
くも町の景色が恋しい。土踏まず辺りに違和感を感じてきた時だっ
た。

「あ！あれじゃない？」

わたしが指差すのは山の斜面にいきなりぼつかりと開いた横穴だ。
直前までの緑いっぱい景色と違い、この辺りは灰色の岩で覆われ
ている。洞窟の入り口は巨大な岩のお化けが大口を開けているよう
に見えた。大きさはトロール一頭分ぐらいだろうか。中は暗く、入
り口付近の様子しか伺えない。

入り口の前に来ると、

「ちょっと待った」

フロロがすつと音無くヘクターの肩から飛び降りる。そのまま地面に這いつくばり、猟犬よろしく付近を調べ始める。続いて洞窟の入り口辺りの壁を見ると満足げに声を漏らす。

「ふんふん……」

「何かわかった？」

ヘクターの問いかけにフロロはしたり顔で振り向く。

「ゴブリンの巣になってるみたいだね。見張りはいないみたいだけど、中から声も聞こえるぜ」

わたしも耳に手をあて音を拾おうとするが、もちろん何も聞かない。

知能レベルは低いとはいえ、一応集団生活を営み道具の使用の知識もあるゴ布林。通常はこういった住処の前には見張り役なんかを置いてる場合が多いのだという。人間を見れば襲い掛かるような彼等は、彼等からすれば人間が敵だからだ。わたしは本でみた赤黒い肌の悪鬼を思い出し、ぶるりとする。

「縄張りの跡もあるな」

アルフレートが一本の木を見て言うのを、ローザは後ろから覗きこみ露骨に嫌な顔をした。わたしも近づき覗き見る。

「サイヴァの紋章ね」

黒十字を丸で囲んだ紋章。歪だが力強く、木の表面に刻み込まれている。この世の混沌を司ると言われる邪神のシンボルである。サイヴァは邪神の中でも一番メジャーな存在である女神だが、人間社会では信仰を法律で禁止する国が大半だ。此処ローラスでもそう。神殿や集会場の建設はもちろん、信仰自体も厳しく国の法で禁止されている。

しかしゴ布林のようなモンスターの間ではなかなか人気の神様ということで、このように自分たちの巢穴に、表札のようにシンボルを掲げることが多いらしい。

「ポゼウラスが生える洞窟、っていうのもここで合ってるのよね？」

「だと思っよ」

ローザの問いにわたしは地図を睨みつつ答えた。

「じゃあ……入るしかないわね」

ローザの声は少し不安そうだ。後ろを向けば日差しが木々を照し、光がきらきらと輝く何ともきれいな景色だというのに、この真つ暗闇に入り込まなきゃいけないのか。

アルフレートが無言でフロロに指を振る。フロロは「はいはい」と言いながら洞窟内に足を踏み出していった。そのすぐ後をアルフレートが続く。アルフレートが光の精霊を呼ぶ声が聞こえ、闇の中にふわりと光が浮かび上がった。

それを見たイルヴァが続こうとすると、

「や、やあだあ、置いてかないでよ……」

ローザが引っ付いていく。

も、もうちょつと心の準備とか欲しかったなあ。せめて「オツケー？」とか聞いて欲しかった。

そんな事を考えながら踏み出すのを躊躇していると、ぼん、と肩をたたかれる。ぎくりとして振り返る。するとヘクターがいつものように微笑んだ顔をわたしに向けていた。

「俺が最後尾になるから、リジアはその前にいてもらえる？」

「え、あああ……う、うん」

「あと、後ろにも明かりが欲しいな。何かないかな？」

明かり、と言われて一瞬頭が真っ白になるが、先程のアルフレートの詠唱する声を思い出す。するすると紐が解けるように『ライト』の呪文が頭の中で完成していった。一呼吸してから精霊を呼び起こす呪文を実際に口にする。

「ライト」

一つの光の球がわたしの頭上に輝いた。ヘクターが「おお」と感嘆の声を上げる。やってて良かった、毎晩の詠唱練習。

「リジア、まだー？」

すでに洞窟内を歩いているローザから声がかかる。

「さ、行こう」

「うん！」

ヘクターに返事をし、わたしは緊張が大分解れていることに気が付いた。きっと不安が顔に出ていたのだろう。それに気付いて解すきっかけを与えてくれたのだ。

すごい、と素直に思う。わたしは色恋など関係無しに、ヘクターのことを尊敬してしまった。

魔女っ子、捧げられる

先頭にフロロを置く列に追いつく。ローザが土の壁を指でなぞり、
呟いた。

「中は土壁なのね……」

「自然洞窟なんて言ってたが、洞穴みたいなところを後から掘り進めていったんじゃないか？」

アルフレートの言葉を聞いてわたしも壁に手を触れる。ひんやりと冷たく湿っている。何か掘り起こす目的の物があるのか、単に居住スペースの為なのか。木の根が走っている箇所も多い。これの陰で崩れないでいるのかもしれない。

ふと、先頭を歩くフロロが足を止めた。

「二手に分かれてるぜ。どうする？」

小さな手が指し示す通り、先が二手に分かれている。両方とも道幅は狭くなり、明かりも見えない。

「右はちよつと下ってるな。左は逆に上ってる」

フロロが足で地面を擦るような動きを見せる。下り……つてちよつと嫌かな。

「『左手の法則』とか言うじゃない。左に行かない？」

ローザが左の道を指差した。

「それは左に行けば正しい、とかいう意味じゃないぞ？」

「し、知ってるわよ」

アルフレートとローザが言い合う後ろからヘクターがフロロに声を掛ける。

「ゴブリンの声はまだする？」

フロロは頷き答える。

「うるさいのは左だな。音が反響しまくってて分かんないけど」

じゃあ左に行くか、という空気になる。ゴブリンに会いにきたわけではないが、サイヴァの紋章を掲げるモンスターをそのままにす

るわけにもいかない。

「なんかじめじめすんなー。当たり前だけど」

フロロがぼやくように周りの空気がひんやりして湿っているのだ。土の中を歩いているようなものなのだから当たり前だけど、足元もぬるぬるしていて不安定だ。

「不安になってきたわ……歌いながら行かない？」

ローザの提案をアルフレートに拾われる前にわたしは首を振る。

「来襲を知らせてどうするのよ……」

ローザは「そ、そうね」と前を向いた。綺麗な白のローブが揺れるのを見て、汚れたらもつたいないな、と思ってしまった。

脇道も現れないのでそのまま進み続けていると、またフロロが足を止める。

「……火の匂いがするな」

火の匂い、と言われてもわたしには変わらずひんやりした土の匂いしかない。わたし達が明かりに使っているのも魔法の光だ。

「居住空間が近いんじゃないか？」

アルフレートの言う通り、ゴブリンの住处となっている所に近いのかもしれない。それよりもわたしには気になることがあった。

「なんかさ、下りになってきてない？」

踏みしめる地面が先程までは上り坂だったのに、少しずつ下りに変わってきている気がする。フロロがわたしの方に振り返った。

「やっぱそうだな？……なんか嫌な造りだなあ」

また暫く進むとフロロの予感とは当たってしまった事が分かる。太ももにかかる負担がかなりきつい下り坂になってきてしまったのだ。その上道幅が見るからに狭まってきている。

今にも転げてしまいそうな足を見ながらわたしは口を開いた。

「戻らない？」

二手に分かれた道の片側を思い起こす。しかしフロロは速度を緩めながらも渋い顔だ。

「ゴブリン共の声が大分近いんだよ……。何でこんなところに住

んでるんだか」

その時、首筋にぴとりと水滴が掛かる。「うわ」と呟き、反射的に首に手を伸ばした。

「こうもりの糞じゃないか？」

アルフレートの声にぞつとする。が、天井を見上げてはつとした。「こ、こうもりなんていないじゃん！」

かっとして足を踏み出す。すぐにしまった、と思うがもう遅い。

ずるりと足を滑らせて、お尻を地面に打ち付けた。思ったたら、

「ひえ！？」

そのまま体が下へと滑っていく。

「リジア！」

誰かの叫びがあつという間に聞こえなくなり、ざざざ！と滑る体は止まってくれない。

「のおおおおお！」

その叫びは狭い空洞に木霊し、落ちる速度に恐怖する。真つ暗闇を突き進むだけの感覚に気を失いかけた時、急激に視界が開け、ざ！と空に投げ出された。

ふわりとした浮遊感は一瞬のことで、次の瞬間にはがしゃん！というけたたましい音と共に背中に激しい痛み。

「あ、く……」

息が詰まる。暫く無言でのた打ち回るが、周りの明るさにはつとして顔を上げる。

ゴ布林達がわたしを見上げている。つり上がった目に歪な鼻、鋭い八重歯が覗く口元といい本でみたゴ布林そのままだった。が、ぼかんとこちらを見る顔は揃って間抜けに見える。

ばちばちと爆ぜる音がする。振り返ると巨大なサイヴァの紋章が洞窟の壁に彫られていた。その前に赤々と燃える大松明が固定されている。

ここって祭壇なんじゃ……。わたしを幾重にも取り囲む数のゴ布林が揃って頭上にこちらを見ているのだ。

「ギイ……ギイ！」

耳障りな声が一つ上がるとそれに反応するように大合唱になる。立ち上がるうとした足元、ブーツの踵が力チ、と金属音を立てた。その音を不思議に思い、下を見るとわたしが乗っているのは大きな銀のプレートのような物だった。

「ギギ、ギグギグ」

判別出来ない呟きを漏らしながらわらわらとゴブリン達が近づいてきた。恐怖で固まっていると、ぐい、と体が持ち上がる。数人掛かりで銀のプレートを持ち上げて、わたしを乗せたまま移動している。こうとする。

「え、ちよつと！待った！待って！噓噓噓！」

向かう先が大きな炎を上げる大松明だと気付き、わたしは悲鳴を上げた。

生贄だ！自分の立ち位置を理解した瞬間、パニックになる。反対にゴブリン達は乗り乗りの雰囲気ですべてプレートに乗ったわたしを運んでいく。

「ゲギヨゲギヨ！」

と陽気な声を上げるとプレートを揃った動きで振り始めた。

「うおおー！やめて！」

悲鳴を上げるが動きが止まることはない。もしかして火の中に投げ入れるつもりなのか。わたしは必死でプレートにしがみつく。ゴブリン達は揺らす動きを止めないまま、大松明へ足を進めていく。

徐々に近づく炎にぐくり、喉を鳴らした。逃げなきゃ！と漸く体が動き出す。手段を探す為揺れる視界の中、辺りの様子を窺った。

暗いので隅まで様子が見えるわけではないが、かなり広い空間に見える。そこに無数のゴブリンが蠢いていた。背後に感じる炎の熱に焦りが増すが逃げ場が見えない。

どうしよう、と視線を動かしていた時だった。わたしが落ちてきた出口だろうか。上の方にぽっかりと開いた穴からぽーん！と影が飛び出してくる。続けてもう一つ。地面に着地するなり手に持った

武器を振り回すのが見えた。

イルヴァとヘクターだ！そう気付いた瞬間、力が抜けていく。わたしを運んでいたゴ布林達が「ギギー！」と叫ぶと、わたしを放り投げて二人の方へ飛び出していった。

「あだ！」

投げ出されたわたしはプレートががしゃん！と落ちる音と一緒に地面に顔を打ち付ける。

「だいじょぶか？」

聞きなれた声に顔を上げるとこちらを見るフロロの姿。ほっとするわたしを指差し、フロロはげらげらと笑い出した。

「ひでー顔！真っ黒じゃんよ」

「うそ！」

頬に手を伸ばすと泥の感触。最悪だ……。既に泥だらけのロープで顔を拭くと、フロロの手引きに付いて祭壇の後ろに隠れる。

「ローザちゃんとアルフレートは？」

「ローザが落ちてくアンタ見て腰抜かしちゃったんで、アルが他の道探してる」

ということは今いる三人はわたしの後に続いて来たのか。凄い度胸だな、と感心してしまう。するとフロロが呟いた。

「にいちちゃんもイルヴァも躊躇なく突っ込んでくから、こっちも迷う暇なかったぜ」

その二人を祭壇の脇から覗き見る。広間の中央でイルヴァがウォーハンマーを振り回す豪快な姿がある。棘のついた鉄球がゴブリンの体に当たると、面白いように吹っ飛んでいった。細い腕にどこにそんなパワーが隠されているんだろう。二匹、三匹とまとめて壁に叩きつけるイルヴァは表情は変わらないが、心なしか生き生きしているように見える。

「イルヴァってさあ、悪役っぽいよな」

けけけ、と笑うフロロの言葉にはノーコメントとさせていただく。確かに悪役っぽいが黒い髪が揺れる様が綺麗だな、と思う。

そのイルヴァの後ろ、無駄の無い動きでゴブリンを一体一体仕留めていくのはヘクターだ。右腕に光るロングソードが水平に動く为一体、返す手でまた一体と倒れていく。

「うわーんかっこいいよおー！」

思わず漏れる本音。はっとしてフロロを見るが、彼の方は違う方向を見ていた。突如現れた戦士達に堪らん、と思ったのかゴブリン達が広間の左手にある通路に走っていつているのだ。

そこから顔を出した二人組みに息を呑む。ぎゃーぎゃーと喧嘩しながら歩いてくるのはアルフレートとローザだった。駆け寄るゴブリン達の姿に喧嘩を止め、ローザが顔を手で覆う。わたしとフロロは祭壇裏から飛び出していた。

その様子を見たのかヘクターがローザ達の方へ向き、顔を強張らせる。わたしも足が止まり、体が硬直した。

「ぎゃー！」

フロロが耳を押さえてその場にうずくまる。大量のゴブリンの前に、アルフレートが取り出したのは銀のハープだった。

止める間も無くぼろん、と弦を弾く美しい音色が響く。わたしも慌てて耳に指を突っ込む。

次の瞬間、脳髓をぐりぐりと刺激するような不快音が広間に爆発した。全身の肌がびりびりと痺れる。頭が痛い。なぜか喉も痛い！神様お許ください、お願いします！と何回も頭の中で唱える。

何度目のお祈りの後だったか、肌を刺す刺激が無くなったことで薄っすら目を開けていく。

「おおっ……」

わたしは思わず呻いた。広間に倒れる大量のゴブリン達の姿。イルヴァとヘクターが仕留めたものもあるだろうが、半分は泡を吹いて痙攣している。なぜかその姿には「可哀想に」と思ってしまった。「いやあ、歌っていいものだね」

のん気なエルフの声には本気で殺意が湧く。大体がわたしが転んで泥だらけなのも、ゴブリンの怪しい儀式の生贄になりそうになっ

たのも、全部こいつのせいじゃないか。

顔をもう一度拭っておく。隣りで耳を押さえて震えているフロロを立ち上がらせると、ヘクターとイルヴァも頭を振りながら起き上がった。

達成に火を囲む

「リジア！あんた真っ黒じゃない！」

通路からローザが駆けてくる。そこらじゅうに転がる再起不能となったゴブリンに嫌そうな顔をして、間を縫ってこちらにやって来た。

「転がっていった時に汚したのね。……顔まで打ったの？」

「いや、これはちよつと……」

言いよどむわたしの顔を良い匂いにするハンカチで擦ってくる。

ロープは背中からお尻にかけてひどい事になっているだろう。水が流れるようなところがあればいいんだけど。体の背後の湿り気に顔を歪めた。

「さて、『ポゼウラスの実』を探すぞ」

張り切ったアルフレートの声にむかむかとする。さっきの歌声といい、このエルフには協調という言葉はないのだろうか。

「そんな事よりまだ謝ってもらってない！くだらない悪戯でこっちは泥まみれよ」

わたしに顔を指差されたアルフレートはひよい、と肩をすくめる。

「私が悪いのか？だったらそもそも『左に行こう』なんて言い出したのはコイツだ」

彼が指差すのはハンカチを畳む途中だったローザ。

「あたし！？法則の話しただけじゃない！それに『声が聞こえる』っていつて決定させたのはフロロよ！」

「俺かよ！俺はにいちちゃんから『声がどっちから聞こえるか』って聞かれたから答えただけだぞ！」

全員がヘクターを見る。

「あ、えつと……ごめん」

頭をかき、謝罪するヘクターにわたしは思わず大きな溜息をついた。人が良すぎる……。

「あんたそんなんじゃこのパーティで貧乏くじ引き続けることになるわよ？」

呆れた顔のローザにヘクターは、

「いや、確かにそうかなーって」

と照れたように笑った。

しかし何時までも喧嘩しているわけにもいかない。わたしは気持ちを切り替えると『ライト』の呪文を唱えていった。光の精霊ウィル・オ・ウィスプが集まり出すと、松明の明かりだけの薄暗い広間がぱつと明るくなる。

「とりあえずここを探して、無いようなら次行こうか。他はどんな風だった？」

違う道を来たローザとアルフレートに尋ねる。

「途中で寝床みたいな藁敷きの空間もあったわね。他は一本道だったわ」

ローザが腰に手を当て答えた。イルヴァがわたしとローザを見てくる。

「どんなのか知らないですけどイルヴァもお手伝い出来ますかね？」

それを聞いてわたしは地面を見渡した。ゴブリンの物と思われる汚れたショートソードを拾い上げると、土の地面に図鑑で見たポゼウラスの実を描いていく。

「……確かこんな感じの植物なのよね」

「リジア、絵下手ですねえ」

「下手なんじゃなくて、本当にこんな感じなの！」

イルヴァの感想にむっとしつつ答えた。わたしの描いたひよろひよろとした植物の図を見て、ヘクターが呟いた「木の根みたいだな」という言葉にローザが頷く。

「そうそう、色も茶で目立たないと思うのよね」

わたしは『木の根』と聞いて嫌な予感がする。

『ライト』を誘導しつつ、洞窟の壁をぐるりと見て回る。ゴブリン達の生活道具らしきナイフやら壺やらが転がっているのをどかし

つつ、目的の植物を探した。

「あつた」

わたしの一言にメンバーは駆け寄って来る。怪訝な顔をするメンバーに壁を掘り返して根のような一部を切り取って見せた。一見、木の根にしか見えないが触ると凹凸がある。割ってみると中から黒い豆のようなものがぼろぼろと出てきた。

「これ……入り口の所からあつたわよね」

そう、ローザの言う通り壁に埋まる木の根は入り口付近から見かけていた。多分、この洞窟全体に根を生やしているに違いない。

「なんだよ、丸つきり無駄足かよ」

溜息をつくフロロをわたしは睨んだ。

「あんた、この状態のわたしによくそんな事言えるわね」

そこへローザが手を叩いて割って入ってくる。

「無駄？無駄じゃないわよ！一つの悪を倒したじゃない！」

は？と思いつつ彼女の指差す先を見ると、広間の最深部に大きく描かれた邪神サイヴァの紋章があつた。洞窟の壁面に直接描かれた黒十字は、大松明の明かりを煌々と浴びて藍色に見えた。

正直、どうでもいいけどこの状況を納得させるには丁度良いかな。思ったのだが、

「さ！消すわよ！」

続くローザの声に皆の顔が引きつった。消すって言われても、染料の染みた土壁をほじくるしかないんじゃないだろうか。

その通りだったようでローザは腕まくりすると落ちていたダガーを拾い上げ、壁を掘っていく。途中で出てきたポゼウラスの実を皮袋に入れるのも忘れない。

「あーあ……こうなったら梃子でも動かないぜ」

フロロが諦めたように腰に掛けたダガーを引き抜く。他のメンバーも溜息をつきながら壁に近づいていった。

洞窟を出るともうすっかり日は沈んでいた。昼間の陽気さは消え去り、辺りに響くのも夜行性の野鳥の声に変わっている。さわさわと揺れる木々が絵本で見たお化けを思い出させた。

ローザが頬に手を当て残念そうな声を上げる。

「あらー、意外と時間経ってるのねー」

「あんたのせいだろ」

全員が思っていたであろうことをフロロが代弁した。そのフロロにヘクターが声を掛ける。

「フロロ、川を探せないか？」

「ああ……」

フロロがちなりとこちらを見た。わたしの惨状を見てのことだろう。優しいなあ、とヘクターを見ていると、

「言つとくけど、この子大した体してないからな」

アルフレートがヘクターの肩を突く。フロロが「下品だねえ」と呟いた。赤面するわたしとは対照的に、ヘクターは何のことか分からない顔していたが、

「そうじゃないよ……」

と赤くなつた顔を手で覆い、呻いた。

フロロが耳を動かす。「ついてきな」と指差す彼に案内され、夜の山道を歩き出した。

「暗くなるとやっぱり怖いわねー。また魔物が出てこないといいけど」

ローザの心配そうな声にアルフレートが首を振る。

「騒いでりや大丈夫だろう」

そう言うのと脇に落ちていた木の棒を拾い上げる。短い詠唱で指先に火が現れた。それを木に纏わせる。獣よけなのかもしれない。

わたしの用意したライトの呪文にアルフレートの松明もあるが、足元の悪さに何度か蹴つまずく。迷うことなく進むフロロについていくこと暫し、すぐにわたしの耳にも川のせせらぎが聞こえ始めた。木々の合間から光る水辺が見える。

「リジアが洗い物してる間に焚き火の用意でもしましょう」

ローザが言うとイルヴァが「キャンプファイヤーですう」と喜ぶ。このままこの辺りで夜を明かすことになりそうだ。

焚き火用の枝を拾い始めた仲間を横目にわたしは川原に入る。山の川の水なんて冷たそう。ごろごろ転がる岩に転ばないよう川に近づいていった。

「溺れる心配はなさそうね」

細い川にそう呟く。ローブを脱いでシャツだけになるとさすがに寒い。まだ春になったばかりだ。早いとこ終わらせてしまおうと、勢いよくローブを水に突っ込んだ。

一通り泥を流すと顔を洗う。指先が痛くなってくる程冷たいが、気持ち良さの方が上だ。ついでに口に水を含んでいると、

「これ、入れといて」

ローザの声と一緒に皆の水筒が降ってくる。人使い荒いなあ。

渋々、水筒に水を入れていると「手伝うよ」の声。台詞だけで誰だか分かる。わたしの返事の前にしゃがみ込む姿に「ありがとう」と言うと、ヘクターの笑顔が返ってきた。

「冷たいね、大丈夫？」

川に足を突っ込むわたしを指差すヘクター。正直、寒いと思っていたのだが彼と話しているだけで暑くなってきた。

「ウサギ捕ってきました」

後ろから聞こえるイルヴァの声にローザの悲鳴が続く。

「ぎゃー！誰が捌くのよ！！簡易食があるからいらない、って言うたでしょ！」

「ローザさんです。簡易食じゃ足りません」

「俺がやるうか？」

ヘクターが立ち上がる。「助かるわあ！」というローザの言葉に、何だかこの流れがとても自然なことに思えて幸せな気分だった。

「見張り決めなきや」

ローザの提案に肉にかぶりつく皆の動きが止まる。赤々と燃える焚火で皆の顔が赤く見える。すでに眠気を感じていたわたしは、
「やっぱり危ないかな？」

と尋ねた。ヘクターが首を振る。

「火があるから獣の類いは大丈夫だと思うけど、火の番が必要だね」
少しの間を置いてアルフレートが拳を出す。それに続いて全員が
手を突き出した。

「じゃーんけーん……ぼん！」

揃った全員の声の後、各自出されたグーチョキパー。それを見て
わたしは眠気が吹っ飛ぶ。

「リジアとヘクターの負けー！」

ローザが嬉しそうに手を叩いた。この状況は運が良いのか悪いのか。視界がぐるぐると回る。これって一晩、二人つきりで起きてる
ってことだよな！？

「一晩丸々じゃキツイだろ。後半も決めといて交代制にしようぜ」
フロロがそう言って二回戦を促した。それに負けたアルフレート
は思い切り舌打ちすると、黙って毛布に包まる。続いて負けたイル
ヴァもこてん、とひっくり返り、毛布を引き寄せていた。

「この二人で大丈夫かしらね」

眉間にしわ寄せローザが唸るが、わたしは彼女に同意する余裕が
ない。どうしよう、二人つきりで何話そう。

黙ったまま固まっているわたしにローザは怪訝そうな顔をするが、
肩を叩いてきた。

「きつかったら起こしていいわよ。じゃあ、がんばってね」

一瞬『何をがんばるのか』を聞き返しそうになったが、大きく頷
き返す。フロロとローザも毛布に包まるのを見届けると、わたしは
焚き火の前に座り込んだ。

「よろしく、無理しないでね」

そんな言葉と一緒にヘクターから畳まれた毛布を渡される。

「お、面白い話とかあんまり出来ないかもしれないけど、ごめんね」

隣りに腰掛けたヘクターにそう言つと、一瞬の沈黙の後に何故か笑われてしまった。

待ち受けるは

ばちばちと爆ぜる火の粉を見つめながら、わたしは赤くなった頬をさすった。隣りではヘクターがあくびを一つ。どうしよう、退屈なんだな。

たき火の向こうでは残りのメンバーがいびきをかいている。皆が寝入るぐらいの時間経ったのに、まだ一言も喋っていない。再び熱を持った頬を手でさする。

わたしは会話の糸口が見つからないことに焦っていた。男の子ってどういう話がいいんだろう。クラスメイトのロレンツの『デーモンが出てこない話しだな』という言葉が蘇る。レッサーデーモンとハイデーモンの違いって口から火を吹くか吹かないかなんだって、というどうでもいい話ししか浮かばない。

「どうしたの？火が近いんじゃない？」

ヘクターに顔を覗き込まれ、わたしは心臓が飛び跳ねる。

「いや！大丈夫！」

そう答えて手を振るわたしを見て、ヘクターはふ、と笑った。

「やっぱり赤いよ。もう少し下がれば？」

これは熱いわけじゃなくて……、と説明したいところだ。わたしが腰を浮かせ、少し火から離れた時だった。

「リジアはどうして学園に入ろうと思ったの？」

急な質問に動揺するが、数年前の自分を回顧していく。改めて聞かれると一つに絞れないものだ。考えるわたしをヘクターはじっと待っている。

「……子供向けの本にね『勇者アキリーズの冒険』っていうのがあるの。それにイリーナって魔女が出てきて……子供の頃、すごく好きだったんだ」

ヘクターは黙って頷いてくれる。わたしは続きを話す。

「勇者一行もかっこいいんだけど、それよりイリーナの方が大好き

だったの。旅のヒントとかくれるんだけど、ちょっと意地悪で、でもすごい力を持ってて。……実は本自体はそこまで好きじゃないんだけど、イリーナだけは未だに好きなんだよね」

「そのイリーナみたいになりたくて？」

ヘクターの問いに少し考える。そして首を捻った。

「うーん、きっかけはそうなんだけど、目標とは違うかな。イリーナってすらつと背が高く黒髪で、胸の大きいイルヴァみたいな人だもん」

言ってしまったからちょっとしまった、と思う。何だかずれた返答だ。しかしヘクターが「金髪の魔女も良いと思うよ」と言ってくれて、チビで胸の無いわたしは嬉しくなった。

「でも、何で？」

何となく返した問いに、

「リジアは凄いな、って思ったから」

ヘクターが言った答えでひっくり返りそうになった。学園に入ってから、いや生まれて初めて言われたかもしれない。

「え？え？何が？」

「いや、同年のはずなのに色んなこと知ってるんだなあ、と思って」

「……もしかしてこれのこと？」

そう言っわたしはポゼウラスが詰まった袋を指差す。

「いや、それもあるけど明かり付けたり火を起こしたりする魔法も全部呪文を覚えてるんでしょ？」

そう改めていわれると照れるが、ファイタークラスの人から見ればそんな簡単な魔法でも凄いと思うのかもしれない。

「うーん、ある程度理論を勉強すれば、暗記しなくても呪文が組み立てられるっていうか……そう『おしゃべり』する感じになるのね。あと全部覚えてるわけじゃなくって……実は魔術書持ち歩いてるし」

「ああ、いつも荷物多いもんね」

その言葉でわたしは送ってもらった日の事を思い出す。「あああ

！」と突然叫んだわたしの声にヘクターがびくん、となった。

「そう！そうだ！聞きたい！あの時！思ってた！」

「お、落ち着いて……リジア」

「わ、わたしの事、いついついつから知ってたの？」

その質問に始めきよんとしていたが、ヘクターはゆっくり答え出す。

「ああ、いつからだったか……。たまにバスで一緒になるから知ってたよ。毎日荷物多くて大変そうだったから」

『知ってたよ』の言葉にジーンとしてしまう。

「あんまり関心なさそうな顔だったから、俺のこと知ってたのに驚いたけど」

うわああああ、ち、違うんだ。ストーカー認定されるのが怖くて目が合いそうになるたびに、そっぽ向いてただけなんだ。しかし今更『実はがつり見てました』などと言えるわけがない。

「魔術師クラスの人って……とくにソーサラークラスの人っていつも分厚い本を持ち歩いてるから大変だなー、って。……俺らのクラスなんかだと魔力そのものが無い奴がほとんどだし、魔法覚えるだけでもすごいなーって思うよ」

そうなんだ……。毎日ファイタークラスの人を羨望の眼差しで見ていたわたしとしては嬉しいことだ。暫くの沈黙の後、ヘクターが突然笑い始めた。

「実はさ、前から話したかったんだ」

「え、え？え？ええ！なん、なんで？」

「君らの仲間になったかったから、かな。今年になって演習が始まったら絶対組みたいって思ってた」

ヘクターの言葉が嬉しすぎて頭がぼーっとする。が、ふいに湧く緊張のような感情。わたしはおずおずと尋ねることにした。

「聞いて良いかな？」

「何？」

「どうしてわたし達のパーティーに入りたいと思ったの？」

学園のカフェテリアで教官がした質問をもう一度してみる。ヘクターは言葉を探している様子だったが、ふとわたしの顔を見る。
「旅をしてる自分の姿を考えた時、普通のパーティじゃ嫌だったんだ。……普通の旅で終わってしまう気がして」

何故か胸がどきどきとする。飛び上がるような幸福感じゃないけど、嬉しくて仕方が無い。わたしは顔を見合わせたまま尋ねる。

「昼間、『難しいね』って言ってたでしよう？ やっぱ失敗したー！とか……は思ってた欲しくないけど、何かあったら全部言ってね？」

「まさか、思わないよ。ありがとう」

そう言って笑うヘクターの銀色の髪がたき火でオレンジ色に輝いて、わたしは見とれてしまっていた。

ふ、と目が覚めるとひんやりした空気に頬が触れる。手足が冷え切っているが頭はすっきりしていた。薄いオレンジに空の下の方が染まっている。

暫くじつとして朝日の暖かさに体を温めてから、わたしは毛布から抜け出すと伸びをした。野宿という状況に加え、昨日のヘクターとの会話に興奮してしまってた眠れないかと思ってたが、やはり疲れていたらしい。信じられないほど眠り込んでしまった。

ふと周りを見ると、もう火の気が消えた焚き火の前でイルヴァとアルフレートが座ったまま眠り込んでいる。眠り……おい。

「ちよつと……」

わたしは起き上がり、二人の肩を叩いた。ビクン、となったのち、目を明ける二人。

「……んあ、リジア……おはよーございますう」

イルヴァが間抜けな声を出す。目が開いているのか開いていないのか分からない酷い顔だ。

「おはよー、じゃないわよ。なんで寝てんのよ！これじゃ見張りの意味ないじゃない」

「この二人に頼んだあたし達が間違ってたのよ」

いつの間にやら起き出していたローザが後ろから不機嫌な声を響かせる。寝起きの悪さワースト2の揃い組ではやっぱり無理があったか。また静かな寝息に変わる二人にがっかりしてしまう。

「おーい、フロロ！起きなさい。ほら、リジアもそこのお兄さん起こしてよ」

ローザに言われ、毛布に包まるヘクターを見る。木の幹に背を預けてるところを見ると、当番の後も見張りを続けていたのかもしれない。今はすっかり寝息を立てているが、起こすのが可哀想になってしまう。暫く寝顔を眺めさせていただき、ヘクターの肩を叩いた。

「おはようございまーす……」

はっと目を開けるヘクター。

「あ……おはよう」

少し照れ臭そうな顔の後、のそりと起き上がると伸びをした。「

もう朝かあ」と呟く声に、

「うん。早く村に戻ってご飯にしよう」

とわたしは答えた。すると後ろから悲鳴が聞こえてくる。

「助けて！」

見るとフロロが寝ているイルヴァに押しつぶされている。その隣りではローザがアルフレートの襟を掴み、無言でビンタを続けていた。

た。

「お腹空きました……」

「もう何回目？分かったからもうちょっと我慢してよ」

イルヴァの弱々しい声にわたしはそう答えた。お腹空いているのは皆一緒、と言いたいがふらふらのイルヴァを見るとちょっと心配になってくる。

「帰りは早いわね」

ローザの呟きの通り、知った道を帰るのはスムーズに感じた。見

覚えのある木の形に角を曲がると、チード村の入り口が現れる。自然と全員で万歳してしまった。

「これでバレットさんにサイン貰って帰れば、演習も終わりよー！試験合格よー！」

既に涙目のローザを皆で笑う。イルヴァの「お腹」の声に急いで村の中に入ることにする。

既に昼前の時間になっていたので商店は賑わいを見せていた。何人かの村人が「おや？」という顔ですれ違う。

「ご飯、バレットさんが用意してるわよね」

少々ずうずうしい台詞だが全員頷いてくれた。タンタを始めとした猫達の顔を思い出して頬が緩んでくる。賑やかな通りを抜けると相変わらず外観は不気味なバレット邸が見えた。フロロが駆け出すとチャイムのボタンに飛びついた。

「……あれ？」

フロロに追いついたわたしは首を傾げる。追いつくまで結構な時間があったと思ったが、扉から応答は無い。お互いの顔を見た後、ローザがもう一度チャイムを押した。

大きな背荷物を持ち、ゆったりとした歩みの商人が後ろを通り過ぎて通りに入っていく。その間も屋敷からは何も動きがない。

「……出かけてる？」

わたしが言うところローザは「全員が？」と眉間にしわ寄せた。確かに猫達含めて全員お出かけ、とは考えにくい。

「あ」

フロロの声に全員が彼を見る。

「鍵掛かってるぜ」

重そうな鉄格子の門に、フロロの言う通り大きな錠前がついていた。前日までは見なかったその姿に、ふっと不安に襲われてしまった。

消えた村人

「……何か変じゃないか？」

固まっているわたし達にアルフレートが問い掛ける。珍しく真顔を見せ、目は射るように冷たい。その様子にまた背中がぞくりとする。

「精霊の様子が……変わっている。どうも変だ」

人間であるわたしには具現化していない精霊の姿は見れない。が、エルフである彼には精霊の姿が常時見えるのだ。様々な物質には必ず精霊の力が働いており、彼にはその変化が見える。精霊たちの様子がおかしい、というのは屋敷の中が何らかの変化をとげている可能性がある。

「な、なんか事件……とか、事故とか……」

アルフレートの嘘の無い様子にローザの顔も青ざめている。

「そこまで騒がしくは無いが……昨日とは明らかに違うな」

アルフレートはそう言うのと腕を組み、顎を撫でた。

中に入るべきかどうか、と考えるが門に掛けられた錠前を見ると躊躇してしまう。フロロが「開ける？」と錠前を指差すが、ヘクターが首を振った。

「イルヴァお腹空きました……」

あまりに弱々しい声に怒る気にもなれない。ローザが溜息をつく。「しょうがない、何か食べに戻りましょ。もしかしたらバレットさんに通りの方で会うかもしれないし」

一度顔を見合わせると少し重い空気で歩き始める。後はバレットさんのサインだけ、って段階なのに。わたしはボゼウラスの実が入った皮袋を持ち上げて見た。

一昨日と同じ大衆食堂に入ると、あの明るい雰囲気の子が大きなテーブルを指差した。わたし達の様子を見てなのか、笑顔が不思議そうな表情に変わる。

注文を受けに来た彼女にバレットさんを見なかったか尋ねると、大きな目を更に見開いてみせた。

「バレットさん？屋敷にいなかったの？」

「そうなの。どこか出かけてたりしない？」

注文も交えつつ、わたしが聞くとウエイトレスは眉をひそめる。

「あの人買い物なんかも全部、一緒に住んでる猫みたいな子達に任せてるみたいだし……。村の人間も姿を見た事無い人がほとんどなのよ。私も村に初めて来た時見かけただけで、それから見てないぐらいだし。だからいない、って方がびっくり」

じゃあ居留守、なんて言葉が浮かぶ。でも昨日までの歓迎ようを思い出すと随分な対応の変わりようだ。

「どうしよう、これ置いていく？」

ローザがポゼウラスの実が入った皮袋を指差す。少し考えてからわたしは首を振った。

「依頼人のサイン貰わずに帰ることになっちゃう。教官がそんな言い訳聞いてくれると思えないよ」

わたし達の暗い空気とは対照的に騒がしい食堂を見回すと、アルフレートはゆっくりと水の入ったグラスを置いた。

「……失踪した人間がいるって言ってたな？」

アルフレートが言くとウエイトレスの彼女は目をぱちぱちさせ頷いてみせた。

「どうする？入ってみる？」

ローザが目の前の家屋を指差し尋ねる。村の入り口に近い位置にあるが、商店の並ぶ通りから離れているので随分と寂しい道にある。先程ウエイトレスの女の子に聞いてやって来た一軒のお家。バレット邸に入るのを最後に失踪してしまったという一家の家である。失踪した、という村人は全部で六人。今、目の前に見ている家の四人家族と、他にカップルが一组ということなので件数に直すと二

件、ということだ。

「雰囲気……不気味じゃない？」

わたしはそう零す。形はごく普通の民家だが誰も住んでいないかなのか、暗く寂れた雰囲気が道にまで漂ってきている。

ここに来たのは単なる時間潰しとほんの少しの疑念から、だった。もし本当にバレットさんが村人の失踪に関わっているなら何か痕跡があるかもしれない。しかしメンバー全員、あまり当てにしている様子もなく、わたし自身もただ疑惑を晴らしたいという気持ちの方が強かった。

躊躇の無い様子でフロロが玄関まで歩いて行き、扉に手をかける。

「あ、鍵掛かってないな」

その呟きと同時にぎい、と扉が開かれた。イルヴァの影から恐る恐る中を見るとがらんとした室内が見える。入ってすぐがキッチンだったらしくシンクとオーブン、タイル張りの壁は残っているものの他の生活感をうかがわせる物は無い。

「なんだ、家具は何も残ってないじゃないか」

ずかずかと入っていったアルフレートが室内を見回し、眉を寄せた。わたしもそろそろと後に続くと埃の臭いがきつい室内を見ていく。

「本当……テーブルだとか椅子だとか、棚ってものも無いのね。あ、でも跡は残ってる」

わたしの指差す先には重い家具が長年置いてあったであろう痕跡が、床板の傷になって表れていた。生活の場であつた名残を見ると急に寂しい気持ちになる。

この家の家族構成は夫婦に子供一人、祖母がいたということだ。元々祖母のいた家に息子夫婦がやってきて、数年は幸せそうに暮らしていたらしい。それがふ、と消えてしまったのだ。

「鍵かけてないもんだから盗まれたかね？」

隣の部屋を覗き込みながらフロロがぼやく。そちらも何も無いらしい。

「遺族が持っていたとかも考えられるな」

アルフレートが言うとローザがいきおいよく振り返る。

「い、遺族って……死んじゃってるみたいじゃない……」

言葉の途中で止まってしまったローザを全員が見る。不自然なポーズで固まるローザの視線の先、彼女の足元を見てわたしも息を飲んだ。

「何それ、血？」

フロロが言うのはシンクの前にある茶色のシミ。大分古いか色も擦れているし、液体のものを何か零したのだという程度にしか分からない。が、ぶわりと鳥肌が立ってしまった。アルフレートも唖る。

「精霊がざわついている。……事件、事故現場っていうのはこんな風に何年経っても精霊の落ち着きが無いんだ」

わたしとローザが手を取り合って飛び上がる。それを見て目の前のエルフはにやり、と笑った。……絶対楽しんでは。

「だ、台所ってものは汚れるものよ。血の跡だったとしても鳥が何かでしょ！」

わたしは声を上ずらせながらも胸を張った。

次にやって来たのは若いカップルが住んでいた、という家。先程の家族が住んでいた家よりも小さく、隣りの家同士もくっついていた。住んでいた期間は短く、一年くらいだという。

まず目を奪われてしまったのは扉についた大きな傷跡。細長い傷の周辺の木が酷くささくれ立っている。

「刃物の傷だな。ソードとかより小さい……包丁みたいなもの無理やり差し込んだらこんな感じじゃない？」

フロロが扉を撫でる。ローザが「見に来なきゃ良かった」と呟くのは、わたしも同意だ。どちらの家も何故、雰囲気が普通じゃないのだろう。

「こっちは鍵掛かってるか」

ドアノブを回してフロロが残念そうな声を上げる。そして郵便受けの蓋を押し上げると中を見て、首を振った。

「中入るまでもないかもな、こっちも。一部屋しかないし、がらんだ」

そう言つて振り向くフロロを見ている時、

「あら、どうしたの？」

左手から掛かった声に全員がびくん、となる。見ると垣根から顔を出すおばさんの顔があつた。隣りの住民らしい。受け取ったばかりと思われる郵便物を手に持っていた。

「あ、えつと……ここの住民の方がいなくなった、なんて聞いて」
わたしがしどろもどろ答えると、おばさんは周りをきよるきよろと見る。そしてこちらに身を乗り出してきた。

「……そうなのよ！ローラス警備団の捜査もいい加減でね！単なる引越し、だなんてそんなわけないじゃないのねえ」

不謹慎だ、と怒られるのかと思いきや、おばさんのツボを突く話しだったようで、聞いてもないのにべらべらと喋り出す。

「住んでた二人もちよつと変わつてて、挨拶もしないしどこかこそしてるし、消える直前に騒ぎ起こすし、絶対に事件に巻き込まれたのよ」

「騒ぎ？」

アルフレートが聞き返すとおばさんは何度も頷く。

「夜中にね、突然男の人の大声が聞こえ始めて『殺す！』とかそんな声よ！？主人にも止められたから見に来れなかったんだけど、朝起きたらその傷があつたのよ！」

「声つてその住んでた男性の方じゃなくて？」

わたしの問いには首を振った。

「住んでたのはまだ二十台前半の若い子でしょう？もっと年寄りの声ね」

わたしは思わず「うえ」と呟いてしまった。アルフレートがそれ

を手で制するともう一度質問する。

「『直前』って言ったな。ということはその騒ぎの後もカップルは生きていたと」

「まあ、ね。……でも次の日じゃなかったかしら。あの研究家、とかいう大きな屋敷に住む方？その家に入るのを最後にいなくなっちゃったのよ。それを見たのも飲み屋の常連の人でね、その日も飲んだ帰りだったから警備団もあんまり信用しなかったみたいなの」

どう反応すればいいのやら、というわたしにおばさんは慌てたように付け足した。

「でもその研究家の方が犯人っていうのも乱暴な話だしね。だって親しい様子もなかったもの。まあ村の人、誰とも親しくないんだけど」

そう言い終わると「洗濯終わらせなきゃ」とわざとらしく呟き、家の中に入っていつてしまった。

取り残されてぼーっとするわたし達。するとイルヴァが欠伸びながらヘクターに尋ねる。

「で、どうしますー？」

「ええ？俺？」

ヘクターは明らかに『だからリーダーなんて』といった顔をした。「とりあえずバレットさんの屋敷に戻ってみよう。そろそろ誰か戻ってきてるかもしれないし」

「確かに他人から聞いた話だけで疑っててもしょうがないわね」

ローザ、そしてわたしも頷く。

「また行ってみて、反応なければ中覗いてみればいいんじゃない？」「リジア、大胆」

フロロが呟く。わたしはにやつく彼のおでこを軽く突いた。

「しょうがないじゃない。わたし達が帰ってくるの知ってていない方がおかしいんだし。ちょっと気になることあるのよ」

わたしの言葉にヘクターが反応する。

「何？」

「うーん、バレットさんだけならまだ寝てるのかも、とか考えるけど、あの家の猫たち全員が出てこないのが、ね」

何しろ昨日の朝早くにもわたし達より早く起きていた働き者だ。買い物もあれだけの人数全員が出かけるとも思えない。そう考えながらわたしは白猫のタンタを思い出していた。

消えた仲間

バレット邸の前に戻ってきたわたし達は全員、ある一点に目がくぎ付けになる。

「鍵が無くなってます」

イルヴァの言う通り、外門にくくり付けられていた頑丈な錠前は無くなっていた。

「……帰ってきてるってことよ」

ローザが自分に言い聞かすように呟いた後、チャイムを押す。しかしまたしても応答はない。フロロが「どうする？」と言うも皆黙ってしまった。

鍵が消えているのだから誰かいるはずなのだ。でも応答は無い。それに出掛けるのにあんな錠前を一つ付けるなんて不自然だ、という考えが巡ってしまった。霧のような状態だった不信感が一気に象られていくような感覚。

ヘクターが門に手を伸ばす。さして力を入れた様子にも見えなかったが、門は鈍い音を立てながら開いていった。

「すいませーん」

わたし達が見守る中、ヘクターは屋敷に向かって声を投げる。そしてゆっくりと玄関扉に近寄っていった。ドアノブに手を掛けると少し躊躇するように動きを止めるが、そのままノブを回す。

「あ……開くみたいだ」

少しずつ扉を開け、顔だけの中に入れ様子を見る。が、彼はそこで固まってしまった。ローザがわたしの腕を取り握ってくる。

「……なんだよ、これ」

呟くヘクターの言葉に、アルフレートが前に出た。ぱっ！と扉を大きく開ける。

開かれたドアの先、中の様子にわたし達は息を飲んだ。わたし達が見たもの、それは昨日までとは似ても似つかない屋敷の中だった。

扉を開けると広い玄関ホールがあつたはず。左右に廊下が伸び、仕立ての良いカーテンが揺れていたはず。重厚な棚には花が飾つてあつたはず。

全てがなくなり、不気味な一本道の廊下が縦に伸びるのみに変わっていたのだ。無機質な灰色の壁はどこまでも続くかと思われるほど長く伸び、奥の方は真つ暗だ。

「ライト」

アルフレートが呼び寄せた光によって、ある程度奥まで照らされる。その瞬間、わたしは心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥った。悲鳴を上げそうになる前に、横にいたローザが息を飲む音が聞こえる。

「だ、大丈夫!？」

わたしにもたれかかつて来たローザに声をかけ、逆に自分自身は落ち着きを取り戻す。再び視線を前に戻すと、奥の様子を再度確認した。

「……今度ははつきりと血、よね？」

「ライト」の呪文によって照らされた範囲の壁に赤黒いシミが見えるのだ。まるで痛手を追った人間が壁に倒れかかりながらも奥へ進んで行ったように見える。

ローザに肩を貸しながら、わたしの頭にある事が思い出された。

……そういえばエルフって夜目が効くのよね。このエルフ、わざと見せつけやがったな。

「……奥に進もう」

ヘクターが口を開く。その言葉にフロロは黙って先頭に行く。敵がいるかもしれない、という合図だ。

「ごめん、もう大丈夫」

ローザが青い顔はしているものの、立ち上がった。

自然とゴブリンの洞窟に入った時と同じポジションで屋敷内に入るわたし達。すなわち先頭にフロロ、続いてアルフレートとイルヴァが続き、ローザにわたし、最後にヘクター。こんな状況でも後ろ

にヘクターがいると思うと心なしか安心する。

恐る恐る汚れた壁を見ると、乱雑に筆を擦り付けたような赤い模様の中、はつきりとした手形も見えた。

しばらく進むと壁も綺麗になる。が、倒れた人影が見えないところを見ると、どこかに運ばれた後なのだろうか。

「誰の血なのかしらね……」

ローザの小声の質問にわたしは眉を寄せた。

「普通に考えたらバレットさんか……。あんまり想像したくないわね」

わたしは猫達の愛くるしい姿を思い出し、身震いする。

「そうじゃなくて……違う人間だったら？」

わたしはローザの言う意味がわからなくて首を傾げた。

「やっぱり村の人の言うような人間だったら？バレットさんがぞくっ！ローザの言葉にわたしは背筋が寒くなる。」

「……変な事言わないでよ」

「怖いこと考えちゃったのよ。怒らないでよ？」

こんな青い顔で言われても怒る気になれない。ローザに促すところ、一度頷いた。

「あの見たこと無い種族の猫達、元々は消えた村人だったりして」

「……科学者の研究の成果で生まれたってことか？」

アルフレクトの受け答えは少々あざ笑うかのようだった。わたしが「怖いこと言わないでよ」とローザのわき腹を突くと、

「だから『怖いこと』って言ったわよ！」

と怒られてしまった。

突然フロロが立ち止まる。話す余裕の出てきていた気持ちがまた一気に冷える。

「……何だこれは？」

アルフレクトも耳に手を当てて先を睨んでいる。何も聞こえないけど、と返そうとした時、わたしの耳にも低い唸りが聞こえ始めた。ぎりぎりとは不快な金属音に混じって獣のような声もする。うーう

ーと連続する響き。初めて聞く音だが不安しか呼び起こされない。

「敵？何？もうやだ……」

ローザの目にはすでに涙が浮かんでいた。

「多分、遠い所から反響してる音だな。だから直ぐにご対面とはいかないだろうけど、それよりこの建物の広さだろ……」

眉間を寄せるフロロの言葉に頷く。直進しかしてきていないけど、どこまで続くのだろう。

「これって何で出来てるんだろうね」

わたしは左右に伸びる不思議な色合いの壁を手でなぞりながら歩く。青みの入った暗い灰色。表面は細かいヤスリでもかけたかのよう滑らかだ。

「さあ……」

とローザも壁に手を伸ばした時だった。ゴン！！という衝突音にびっくりとする。前を見るとイルヴァが額を押さえてしゃがみこんでいた。

「ちょ、ちょっと、大丈夫？前見なさいよ、ちゃんとー」

ローザが言うといルヴァは珍しく涙目のまま前を見据える。そして「あれ？」と言いながら、今額をぶつけた壁を両手で確認する。

「どうした？」

ヘクターが聞くが、イルヴァは混乱したように頭を振った。

「えっとお、フロロとアルフレートがいないです」

イルヴァの言葉に顔を合わせると、はっとするわたし達。辺りを窺うが二人の姿が見えない。フロロはともかくアルフレートは隠そうと思っても隠せないような派手さがあるというのに。

「ど、どこ行つたの？」

わたしが聞いてもイルヴァは首を振るだけだ。

「いないですねえ」

「いないのは見れば分かるわよ！どこ行つたのか聞いているの！」

「落ちていてローザちゃん……ぶつかつたぐらいだから前見てなかったんでしょ？だってここ曲がり角よ？」

そう言つてわたしは右の方向を指差す。そう、ここは右に曲がる
しかない長い廊下の角になっていた。

「違いますよお、だって今まで前にいて、真っ直ぐ進んでいったん
ですよ？あの二人」

「真っ直ぐつて言つても、壁の中すり抜けて行つたとしても言つのは？」

ローザの言葉にイルヴァはまた首を振った。

「うーん……壁も無かつたんです」

「はあ？やっぱり曲がつていったんじゃないの？」

ヘクターが言い合う二人に割つて入る。

「落ち着いて、イルヴァ。ようするに二人の後を続いていた君が、
同じように真っ直ぐ行こうとしたら壁が現れたつてこと？ここはト
の字の廊下になつてた？」

ヘクターがゆっくり言つとイルヴァはしばし考え、頷いた。

「それしか考えられないですよお、いくら暗くても目の前の人が右
に曲がつたらわかります。第一あの二人消えてるじゃないですかあ」

「……二人が進んだ時点で壁で遮断されたわけね」

わたしが言つとイルヴァはわたしの顔を指差す。

「それです、それ」

「でも……そういう音した？壁が急に現れたら結構な音がすると思
うけど……」

ローザの疑問を聞いて、わたしは前に出て問題の壁に手を当てる。

「……僅かだけど魔力は感じるわ。多分そういうトラップなんでし
ょうけど……フロロが気づかなかつたのが痛いわね」

「多分、さっきまでの音に気を取られてたんだな」

ヘクターが言つと、ローザは思い出したかのように体を震わせた。
こんな時になんだが、一番乙女な反応をするローザに段々腹が立
つてくる。これは嫉妬だろうか？

ここで闇雲に進む前に、と四人で話し合うことにする。わたしは
深呼吸すると、皆に問いかけた。

「聞いてもらつていい？いくつか可能性を言うからおかしい点を指

摘して。

1、入り口の血痕はバレットさんの物。彼には何らかの敵がいて、襲撃を受けた。それで敵を翻弄するために、予め施してあった屋敷の仕掛けを作動させて、……この屋敷の変貌のことね？……奥に逃げた。

2、この屋敷の変貌も敵のやったこと。バレットさんは奥に捕らえられていて、敵はわたしたちの目を翻弄するために屋敷を改造した。
3、入り口の血痕はバレットさん以外のもの。バレットさんは噂通りのマッドサイエンティストで、血痕を残した人物をこの奥に連れて行つた。屋敷の改造は侵入を拒む為。

……こんぐらいかしら」

「2は無いわね。あたしたちがいなくなつてすぐに起きたとしても、こんな大掛かりに建て替えられるとは思えないわ」

ローザの言葉にわたしは頷く。

「理由も無いしね。この家から連れ去ればいいだけの話だし」

わたしは自らの考えを否定することになった。

「……3も無いんじゃないかな。俺たちに依頼してる時にわざわざ騒ぎを起こす理由がわからない」

ヘクターの意見にローザが反論する。

「わたしたち自身が目的だったら？若い人間の身体が材料として欲しくて、この奥でおいでしてるんだったら……？」

こ、怖い事ばかり言うなあ。確かに彼が『若い若い』を連呼してたのは覚えてるけど。

「それこそ来た日の夕食がなんか薬でも仕込んだきや良いだけの話しじゃない」

暫く考えた後、結局のところフロロとアルフレートとはぐれた以上、二人と遭遇できるまでは帰れないという結論になった。先に進めばそのうち二人とも再会できるかもしれないし、とにかくこのままにするわけにもいかない。

右に曲がってから歩いた歩数を一応数えてはいるものの、距離感

は掴めそうにない。マッパの勉強もするべきだろうか……。

「あ、今度は二股に別れちゃってますよ」

イルヴァの言葉に前を見ると、T字路が現れた。

「……また右に行ってみようか」

わたしの言葉に三人とも頷く。答えも無ければヒントもないのだ。迷う前に誰かが提案した方がよい。しかしこの無機質な灰色の壁に覆われた中をひたすら歩くのは、中々精神的に辛いもんがある。いつもは喧嘩してばかりだが、こういう時にはいて欲しくなるのがいなくなつた妖精二人だった。

落ちた先は

四人に減ってしまったただけで随分と寂しい気分になる。一番うるさい二人が抜けてしまったからかもしれない。ふと湧いた不安を口に出さないようにしていたのだが、

「……このまま徐々に人数減っていくとか嫌よ!？」

ローザにそのままを言われてしまい、わたしは顔を歪めた。

引っ付くわたしとローザを挟むようにイルヴァとヘクターが歩く。暗がりの道をのろのろと進んでいくと、小部屋のようなところへ出た。扉も無く、今までの道より少しばかり開けた程度である。

「行き止まりみたいね」

ローザが周りを見回し言った。無論窓も無く、明かりはわたしの「ライト」のみ。意図の分からない不気味な部屋の奥に、何やらわたしの身長ほどの石像が見える。

ちよつと大きなお屋敷の門などで見られるようなガーゴイルの石像。本の中ではよく近づくとか石化が解けて翼の生えた怪物が暴れ出したりするが、目の前のそれは特に魔力も感じない。しかし口に加えた水晶玉が『いかにも』である。

行き止まりにある仕掛け、なんて気になるところだけどシーフであるフロロがない今、余計なことはいらないにかぎる。

「さっきのところまで戻りましょ、分かれ道があつたんだし」

わたしがそう言つて踵を返した時だった。

「これって何でしょうねー」

後ろから聞こえるイルヴァの台詞に、嫌な予感がして振り返る。

「ちよつとまつ……!」

躊躇無く水晶玉に手を伸ばすイルヴァを止めようと踏み出すが、時既に遅し。ガコン!という音と共に足元が消える。水晶玉を手に持ち首を傾げるイルヴァを見たのが最後、わたしの体は浮遊感に襲われた。

「イイイイルヴァのばかーーーーー!!!!」
声に出ていたかは分からないが、わたしは絶叫しつつ奈落の底へと沈んで行った。

激しく体を打ち付ける。痛みを感じるよりも早く、何かに飲み込まれたような感覚に目を見開いた。何も見えない。そして目を襲う不快感。体中に纏わりつく温いものには覚えがある。水だ!と気付くが思い切り飲み込んでしまった。

一気に苦しくなり暴れるが、ごぼごぼという自分の息が泡になる音しか聞こえない。真っ暗で何も見えない。死んでしまう!

その時、ぐつと誰かに腕を掴まれそのまま浮き上がる感覚がした。そのままの勢いで水面へと顔を出す。

「けほっけほっ!」

引き上げてくれた人物に抱えられながら何とか呼吸する。鼻の中が痛くてしょうがない。

「大丈夫?」

声に顔を上げると目と鼻の先、ヘクターが心配そうにこちらを見ていた。

「きゃーーーー!」

思わぬ密着度に悲鳴を上げるわたし。近い!近いよ!とパニックになり、思わずヘクターを突き飛ばす。すると再び体が沈んでいき、手足をばたつかせる。そんなわたしをもう一度引き上げると、

「ごめん、ちよつと待って」

ヘクターはそう言って泳ぎ出した。

「首のあたり、つかまって」

その言葉に照れてる場合じゃない!と思いなおす。わたしはヘクターに必死でつかまった。幸い陸地が近かったようで体が縁に触れたと同時に、すぐに転がり出る。

ヘクターもしんどかったらしく、肩で息をしている。装備プラス

私の重り付きだったのだ。泳げるだけですごいことだと思う。そしてわたしといえば助けられたくせに悲鳴上げて突き飛ばすって何やってんだろう。

「……まいったね」

息が整うと、ヘクターは口を開いた。真っ暗では無かったらしく、薄い光がほのかに彼を照らしている。しかし部屋の様子も分からないうくらいには暗い。わたしは「ライト」の呪文を唱えた。

ぱっと周囲が照らされる。落ちる前と同じ灰色の壁が現れ、思わず溜息が出る。

「わたし達だけ？」

「みたいだね。位置的に部屋の中心が落とし穴だったんだと思う。あの二人は像の脇に立ってたから」

落とし穴を開いてくれた張本人は無事なわけだ。イルヴァにあらためて怒りを覚えつつ、この状況にもちよっぴり感謝する。

「どのくらい落ちたんだろう……？」

上を見上げながらわたしは尋ねる。暗くてよく窺えない天井を見ながらヘクターが答えた。

「大した事はないと思う。せいぜい地下二、三階程度かな？」

それでもよく気絶しなかったものだ。もし落ちたのが自分一人だった場合を考え身震いしてしまう。それを見て、ヘクターが心配そうに呟いた。

「寒い？とりあえず服乾かした方がいいな……」

その言葉にわたしも、言ったヘクターも顔が赤くなる。

「いや、変な意味はないんだ……」

「うん！分かってるよ！大丈夫！」

わたしは慌てるあまり、声が大きくなる。しかし乾かすといって、火はわたしが何とか出来るとしても、薪のようなものがない。

あらためて辺りを見回すが、無機質な壁と今這い上がってきた水面しか見えない。かなり広いようで、今いる位置の一辺にしか明かりは届いていない。プールのようなものが広がっているのだが、位

置関係もはつきりしない。

とりあえずローブ、ブーツを脱いで絞っていく。結い上げていた髪も解くところらも絞る。ぼたぼたと落ちる水滴に「臭くならないといいな」とぼやいてしまった。

「うわー、気持ちわりー」

ヘクターもジャケットと中に着た薄い皮鎧のようなものを脱いでいた。

「ちよつとごめんね」

と一言言つと、アンダーシャツを脱ぎ、水を絞る。鍛え上げられた上半身に思わず目を奪われると、「ごめん」と何故か謝られてしまった。思わず「ごちそうさんです」と答えそうになるが、その言葉を飲み込む。

「あの、わたしも服絞りたいんだけど、いいかな……」

おずおずというと、ヘクターはくるりと背をむけた。

「どうぞー。終ったら声かけてね」

いやらしさの無い、本当に紳士的な人だ。急いでシャツを脱ぐと絞っていく。

とりあえず水気は切ったものの、しなしなになった服を着たお互いを見て笑い合ってしまった。

「魔法で何とかならない？」

と聞かれたが、ただでさえコントロールの難しい火のエレメンツを『服を乾かすだけ』の威力にする自信はない。服を灰にしてしまう、と言つて断つた。

「さて、じつとしても風邪ひくだけだし、行動した方がいいね」
ヘクターの言葉に頷く。とりあえず、壁際に添って歩いてみることにする。

「しかしここつて何なんだろうね？」

前に行くヘクターの言葉に、わたしは首をひねる。

「トラップ……にしてもよく分からないよね。普通、落とし穴つて下が槍だったり、ダメージを与えるものでしょ？ わざわざ水を張つ

ているってことは落ちてくるものに対して保護してるようなものだもの」

溺れかけた人間が言うことではないが、溺死体マニアでもない限りこんな手間のかかる罠は意味無いだろう。

「っていうと？」

「今の段階じゃ何とも言えないけど、装置だったのかも」

「装置？」

「うん、上から何かを水に沈めておくための……」

その時、わたしの説明を遮るようにプールから水しぶきが上がる。わたしが反応した時にはすでに、ヘクターはロングソードを抜き、身構えていた。

「下がって」

低い呟きにわたしは慌てて後ろに下がる。そして「ライト」を前方へ向ける。明かりに照らされたのは、プールから上がってくる不気味な姿だった。人間と変わらない大きさの半魚人に息を呑む。

明かりを反射する体は鱗に覆われざらついており、目はくすんだブルーのガラス玉のようだ。手にはダガーほどの長い爪が生えている。体が動いたびにぎちぎちと耳障りな音を立てた。

ひゅ、と一陣の風が吹いたように感じた。ヘクターが敵に突っ込むのと同時に相手も地を蹴る。

金属のぶつかり合う乾いた音が響き渡った。魚人は両手の爪を振り回し、襲いかかってくる。跳ねるように体を揺らす様が気味悪い。ヘクターもそれを剣で受け流していく。片手で持つロングソードが左右に振られるたび、魚人の手を跳ね除けている。お互いの流れるような動きが早すぎて、わたしには全てを目で追うことは出来なかった。

モンスターらしき物を見た恐怖よりも、目の前に繰り広げられる光景に呆気にとられてしまう。何度か魚人の爪を受け流した後、ヘクターは相手に向かって強い振りで剣を振り下ろす。それにバランスを崩された魚人が、明らかに無理な体勢で体を反らせた。

その瞬間、ヘクターの剣が魚人の腹を薙いでいた。

「ぐががつー!!」

不気味な悲鳴をあげ、魚人はプールの水面へ倒れ込む。ざばーん！と景気の良い音を立てながらしぶきが上がり、水の中に消えて行く。呆然としてしまったが、ぱちんとソードが鞘に戻る音に我に返るとヘクターに近づいた。

「す、すごい！」

わたしのはしゃぐ声に、ヘクターははっとした顔で振り返る。

「大した事無い相手で良かった。平気？」

「いや、わたしは何にもしてないから」

「それならいいんだ」

……いいのか？と思う台詞だがヘクターはにこにこ微笑んでいる。本人を前に黄色い歓声を飛ばしたくなるかつこよさだ。

ふとヘクターが真顔に戻り、プールの方へ視線を送る。微かに聞こえる水の音に嫌な予感がした。

暗い水中に何かが蠢いている。大きさからして今倒した魚人だと思っただが、影は一つではない。

「急ごう」

ヘクターが歩き出すのにわたしも続く。水面を見れば魚人達と目を合わせてしまいそうで、顔を背けてしまった。

嫌なことは続くもので、上で聞いた肌を震わす不気味な音がまた聞こえてくる。うー、という唸りと金属を削る音を混ぜたような不快音。一体何だろう。

思わず足を止めてしまったわたしの腕をヘクターが取る。

「大丈夫、きつと見れば大した相手じゃないよ。それに皆ともすぐ合流出来ると思うよ」

優しい言葉にじーんとする反面、そんなに不安そうな顔をしていたんだろうか、と頬を摩って誤魔化した。

でもヘクターは『相手』と言ったけど、これは生き物から出る音なんだろうか。どこか無機質な唸りにわたしは何も無い暗闇の中を

見つめていた。

リーダーさん、フォローする

「壁伝いに歩いていけば、そのうち出口が見つかると思うんだ」

ヘクターの提案にわたしは頷いた。暗くて距離が掴めないせいかなやら広く感じるが、やがて部屋の角に行き着き安堵した。方向を変え、また歩いていく。

前に行くヘクターがこちらに振り向いた。

「大丈夫？ 寒くない？」

「平気、ここ暖かいし」

そう答えて再び歩く。再び壁が垂直に交わる箇所にとどり着き、指を差して頷き合う。するとまたヘクターがわたしに尋ねてくる。

「疲れたら遠慮しないで言ってね」

それを聞いてわたしは思わず吹き出した。戸惑った彼の顔にわたしは手を振る。

「いや、だって。すごい心配されてるからおかしくって……」

わたしが笑うとヘクターは頬を掻いた。

「ごめん、その何ていうか、今まで体育会系に囲まれてたから気遣い足りないかも、って不安になるっていうか。リジアみたいな女の子は周りにいなかったし……」

そこまで言っていると、慌てて振り向く。

「いや、偉そうだったよね？」

わたしは首を振った。

「ううん、ありがとう。でも大丈夫だよ。足引っ張ってないか不安だけ」

それを言い終わる前に前に行く彼の頭が振られる。顔を見なくても笑顔だろうと思う。包む空気まで柔らかい人だ。

「実はね、ゴブリンの洞窟にいた時から武器持つ力が無いのは……弱いなあ、って感じてたの」

ふっと本音が漏れる。ヘクターは後ろ歩きのような形になりなが

ら、わたしの顔を見ていた。

戦う力がないのはもちろん、わたしの場合さっきの状況でも泳がない、体力ないっていうのが浮き彫りになっちゃったし。肝心な魔法の腕に問題があるのだから、せめて普段の行動ではお荷物になりたくないのだけど。

「これは誰が出てくれたの？」

彼の指差す先に「ライト」の光がふわふわと浮かんでいる。

「これくらいは……」

自慢にもならないし、と言おうとするが、ヘクターの声に遮られる。

「俺一人だったら真っ暗な中で途方に暮れてたんじゃないかな」

大袈裟、というか嘘だと思う。彼なら一人でもきつとこの部屋から這い出ていたはずだ。でもそう言ってくれる事が嬉しかった。

「ファイタークラスの奴つてさ、教官から毎日のように言われてるんだよ。……『魔術師に魔法を使わせるのは最終手段である』ってナイト気取りかよ、馬鹿にすんな、って思われちゃうかもしれないけど……」

初めて聞く話だった。わたしは芽生え始めていた焦りが、少し減るのを感じた。ヘクターがふつと笑う。

「まあさつきみたいに突き飛ばされるのは、ちょっとショックだったけどね」

言われたわたしは顔が真っ赤になった後、血の気が引く。そうだった、すごい失礼なことしたのを忘れていた……。

せめて足手まといにならないように、なんて言ってるくせにやっていることは足を引っ張る行為そのものだ。これから一緒に行動しないなら恥ずかしがってる場合じゃないんだよね。顔合わせただけで動揺してる場合じゃない。こういうのはきつと慣れることが大事なのだ。

そう思ったわたしは、

「手繋いでいい？」

ポロッと思いついたまま口に出して、すぐに後悔する。ぶは！とヘクターが吹き出した。

「ななな何言ってるんだろーね！ごごごめん！違うから！そうじゃないから！」

自分でも何を言っているのかわからない。しかしヘクターは、「はい」と言って手を伸ばしてきてくれた。それを握ると軽く握り返される。思わず卒倒しそうになった。

「……恥ずかしいと鼻血が出る、って感覚が今なら分かるわ」

ガンガンと頭に血が上るのが分かる。ヘクターが「え？」と振り向くが、慌てて「何でもない」と首を振った。

これは先々を見据えた上で重要な練習なのだ。立派な冒険者になるために乗り越えなければならぬ問題なのだ。と自分に言い聞かせ続ける。しかし周囲が暗くて良かった、とにやける顔で思った時だった。

ヘクターの足が止まる。わたしの耳にも水が撥ねる音が聞こえていた。下がるよう手で合図され、わたしは壁際に逃げる。水面に見える黒い影が高速で動き始め、ざあ！と魚人が顔を出した。

「ゲゲゲ！」という声が二重に聞こえてはつとする。プールの縁に掴まりよじ登ろうとするのは二体に増えていた。

再び長い爪を振り回す魚人とヘクターの打ち合いが始まるが、明らかに先程より防戦に回っている。不気味な雄叫びと共に爪がヘクターへと伸びるたびに息が止まりそうになった。

これはいくらなんでもぼーっとしてるわけにいかないわよね！？と混乱する頭で必死に呪文の詠唱を思い出していく。半分くらい無意識で紡いでいった呪文を口に出して腕を突き出す。

「ファイアーボール！」

ゴブリンの身の丈ほどありそうな巨大火の玉が熱風を撒き散らす。重そうにぶわり、と飛び始めた火の玉を見て、魚人二体とヘクターは目を見開き、同時に左右へ飛び退いていた。

耳がおかしくなりそう。彼方へ飛んでいったファイアーボールが

起こす爆発音に、唱えたわたしがくらくらする。かなり遠くでの爆発だったと思うのだが熱気が襲ってきた。お腹に響く振動にしゃがみ込み、耳を塞いでいると、

「……！」

魚人達が何かを叫び、水中へと飛び込んでいった。これは堪らない、という判断だろうか。

ヘクターがわたしの腕を掴んで走り出す。

「出口が見えた！」

その叫びの通り、暫く走り続けるとぽつかりと開く通路の入り口が見えた。今も横に広がるプールに再び黒い影が蠢き始め、走る速度を上げる。

通路に滑り込むのと同時に背後からざばっ！と水面の弾ける音がある。続いてべたり、と濡れた足が着地する音。

先に見える階段をヘクターが指差した。急いで駆け上がると、水面から上がったと思われる魚人がついてくる気配はない。あの見た目からして水辺からは離れたくないのかもしれない。わたしは荒くなった息を整えると、改めて深い息を吐いた。

「……ごめんなさい」

身を起こすなりわたしが言った言葉にヘクターの目が丸くなる。言い訳にはならないようにわたしは続けた。

「さっきの魔法、部屋があれだけ広くなかったら危なかったと思うて」

ヘクターは一度にこつと笑うと、わたしの手を取り歩き始める。

「リジアはさ、何かしなきゃいけない、って思い過ぎてるよね」

そうかもしれない。さっきもあの場をどうにかしなくては、というより自分も何かしなくては、と思って夢中になってしまっていた。「『何もするな』なんて言わないけど、『何もなくていいや』って思われるように俺も頑張るし、戦闘は一先ず俺に任せて。二人で一緒にリジアにしか出来ないようなことを探していこうか」

「は、初めての共同作業って奴ね！」

いきなりテンションの上がるわたしを不思議そうな顔で見ているが、ヘクターは「そうだね」と頷く。ちょっと意味が通じなかったようだ。

会話が途切れ、前に続く暗い廊下を眺めるだけになる。どさくさに紛れちゃってまた手を繋いでるけど、急に恥ずかしくなってきた。このまま他のメンバーと合流出来たら、嬉しいけどこの状態を見られてしまう。でも離すのはもったいない。

うーん、と考えていると急に目の前が明るくなった。ぐつと後ろに手を引かれる。

「……火！火事！」

廊下のいっばいいっばいに広がる炎に叫ぶ。突然燃え広がったということは、また何かの罠を作動させてしまったのだろうか。一本道だったのにどうしよう。

しかし濡れた衣服の冷たい感触が、目の前の光景に対して違和感を覚えさせた。少し考えてからわたしは炎の中に腕を突っ込む。ヘクターが「わ！」と驚いている。

「……幻影だわ」

今も突っ込んだ腕に赤い炎が纏わりついていてというのに熱さは微塵も感じない。イリュージョン、という古代語魔法が頭に浮かんだ。視覚と聴覚だけに働く幻影魔法だ。微かに空気を揺らすような爆ぜる音といい、本物の炎にしか見えないがこの魔法では熱を作り出すことは出来ない。

わたしが炎の中に飛び込んでみせるとヘクターは眉を下げて頭をかく。

「なんか変な感じ……」

彼の目には火に囲まれて平気な顔をしているわたしが写っているのだろ。わたしが手招きするとすぐに向かってくるものの、体を包む炎を不思議そうに見ていた。

幻影の炎が上がる一帯を抜けるとまた暗い廊下に戻る。

「すごいよ、リジア。よく分かったね」

ヘクターに褒められて照れくさいが嬉しくなる。確かに「イリュージョン」の魔法を知らなかったら、もうちょっと時間が掛かった問題かもしれない。

「でも本物の火だったら服乾かせたね」

にこにこ言う彼に半分首を捻りながら頷いた。「それじゃあ突っ切って来れないよね」と突っ込んだ方が良いのだろうか。

迷っているうちに言い出すのも妙なタイミングになる。まあいいや、と思いながら現れた廊下の角を曲がる。

「何だ、これ」

ヘクターが言うのは曲がった先に広がる不思議な造りの通路の事だろう。わたし達から見て右側はこれまでと同じ灰色の壁だが、左側はガラスで覆われている。ガラスの向こうにも同じような廊下が伸びており、左右対称になっているようでこちらと同じ位置に廊下の角が見える。

わたし達が曲がってきた角と対照になる位置から現れた二人組みに息を呑む。

「アルフレート！フロロ！」

ガラスの向こうの廊下を何食わぬ顔で歩く彼らは、わたし達など見えないかのようにそのまま素通りしていった。

「ちょ、ちよつと！何、無視してんの！」

そう叫びつつ彼らの真横のガラスにへばりつくが、こちらをちらりとも見ない。演技とも思えない二人の態度に『実は自分達は既に幽霊でした』なんて考えが浮かんでしまった。

おデブ魔法

「見えてない？」

ヘクターの呟きにわたしは立ち塞がるガラスを指で叩く。

「でもこんなにクリアなガラスなのに……」

そこまで言いかけた口が止まった。フロロが一瞬、こちらを見たのだ。そうか、二人共耳は良いのだから振動なら伝わるのかもしれない。

「おーい！妖精ども！こっちだこっち！」

わたしはガラスを両手でバンバンと叩いた。何度か繰り返すと、二人はこちらに目を向け指差しながら何か話している。が、やはりこちらの姿は見えていないらしく「なんだ？」といった顔だ。目の前にいるというのに目が合うことがない状況に、どういうこと？と眉間に皺が寄る。

「切ってみるか」

ヘクターが腰の剣に手を延ばした。その時、わたしはアルフレートのある動きに気が付く。何やら口を動かし、手も術の印を結んでいるように見える。流れるように次々と形を変える手を見て、ぞくりと背中が震えた。

「下がって！！」

わたしはヘクターを突き飛ばす。そのまま倒れこむと耳を塞いだ。体を激しく揺さぶるような爆音と共に熱気が肌の表面をチリチリと焼く。

「うつ……くつ」

堪らず声を洩らすと、後ろからのん気な声が聞こえてきた。

「おや、リジアってば大ー胆ー」

少し懐かしいアルフレートの声に目を開けると、ヘクターを押し倒す形になっているのに気付く。思わず赤面するが、怒りも沸き上がってきた。

「なーにのん気なこと言ってるのよ！殺す気かつ！」

振り向くと濛々と上がる煙の中、アルフレートとフロロが顔を出している。今の衝撃で開いたであろう穴の周辺は真っ黒に煤けていて、呪文の破壊力がよく分かる。

目を吊り上げているわたしを見てなのかアルフレートが深い溜息をついた。

「邪魔されて気が立つてるのはわかるが、ああも騒げば……」

「違うわよ！」

わたしは慌てて立ち上がると、ガラスを指差した。

「あれだけ叩いたんだから普通、こっちに誰かがいるもんだと分かるでしょうが！……ってアンタ達、こっちが見えなかったの？」

わたしの言葉に顔を見合わせるアルフレートとフロロ。二人はこちら側に入ってくるとガラスに向かい、感嘆の声を上げた。

「おお！これはすごい」

「鏡じゃないねー」

しきりにガラスを触ったり叩いたりする二人を見て、ヘクターは向こう側へ行くとこちらを見る。

「おー、何だこれ？」

そう言っただけを招きした。アルフレートに殺されかけた事が流れてしまったのは不満なもの、わたしも気になる。ガラスに開いた大男でも優々と通れそんな大穴を通り、ヘクターの隣に並ぶ。そして目の前のガラスを見てわたしは目を丸くした。

「鏡……？」

「だね。あっちからは透明なガラスだけど、こっち側からは鏡になってるんだ」

ヘクターの言うことは綺麗に整頓された事実だったが、わたしは首をかしげる。

「何の為に？」

「さあ……アルフレート、何だと思う？」

再び鏡側へと来たアルフレートにヘクターが話を振る。アルフレ

ートはしばらく首を捻っていたが、ぽつりと呟く。

「正直、いやらしい使い道しか思い浮かばないんだが……」
「ぼ、煩惱だらけのエルフだなコイツ……」

「ところでなんで二人なんだ？」

アルフレートに指差され、わたしとヘクターは顔を見合わせると経緯を話し始めた。

アルフレートとフロロとはぐれてしまった後、行き止まりにあつた見るからに怪しい仕掛けにイルヴァが手を出し、わたしとヘクターだけ落とし穴に落ちたこと。プールのような水たまりに落とされて今も服が湿っていること。気持ち悪い魚人のようなモンスターに襲われたこと。

「仕掛けかあ、気になるな」

妙に乗り気なフロロと、

「それよりプールって何だ？何の目的なんだ？」

と答えようのない質問をするアルフレート。それに黙って首を振るとわたしは二人に尋ねる。

「二人が消えた時はいきなりわたし達四人が消えたみたいだったでしょう？」

「まあね……でもどうにもならないから諦めた」

「あつさりしてんのね……」

フロロから回答にわたしは肩を落とした。

「まあ、闇雲に進んだって命の心配は無いだろうからな」

ぽつりと漏らすアルフレートにわたしは「何それ」と食いつく。エルフは何とも悪そうな顔でにやりと笑うと、先の暗い道を指差した。

「進んでみようじゃないか」

言葉の意味を問い詰めても「まあまあ」と言っただけで答えようとしないうちにアルフレートを諦め、再び四人に増えた人数で歩き出す。暫く色々歩き回り、一本道だが何度も角を曲がったので方向が分からなくなってきた時、ぴたり、フロロの足が止まる。この反応はもしか

して、と喉を鳴らす。

「いるね、たぶん『また』ワーウルフだ」

また、とは？まるで会ったことのあるような言い方だ。二人で探索中に遭遇したのだろうか。でもワーウルフなんて凶悪なモンスターまでいるとは、何なのここは。

フロロの言葉にアルフレートが感心したように頷く。

「良い探査機だなあ。じゃあ次は良い用心棒に頑張ってもらうか」
そう言ってヘクターの肩を叩いた。

「失礼な言い方ね」

そう言っわたしにアルフレートは視線を動かすと、またいやらしい笑みを見せる。

「そうだな、どうせお前は役立たずのままなんだろう。少しは練習させてやるか」

嫌な予感に「え……」と固まるわたしをアルフレートが隊列の前へと押してくる。

「ちよちよちよ、ちょっと何よ」

「数秒後に鉢合わせだ。なに、ピンチの時はすぐに何とかしてくれる、彼が」

アルフレートはにこにこことヘクターの肩を叩く。ヘクターが何か言いたそうに口を開くが、アルフレートの有無を言わせない空気に押し黙る。

「え、え、え、本気？」

焦りながらメンバーの顔を見るも「ほら！もう来るぞ！」とアルフレートに急かされる。

廊下の角からふ、と現れた獣の顔に悲鳴を上げそうになった。続けてもう一体。二体ともそっくりなワーウルフのコンビだ。

天井まで頭が届きそうな獣人は顔は狼そのものだ。毛むくじらの体といい人狼、というより、二本足で立つ獣というほうが近いかもしれない。

こちらを見ると一気に目を見開き、ぶわ！と獣の声を発する。そ

の場にへたり込みそうになってしまった。腕力の高さを窺わせる発達した上半身といい、一撃もらっただけでわたしなど吹っ飛んでしまうに違いない。

パニックになりそうなたしにフロロが大声で叫ぶ。

「火はダメだぞ！火系はやばいからな！」

その言葉を聞いて逆に「あ、そうか」と思う。急いで呪文を唱えていった。その間にもワーウルフ二体は軽快に歩み寄ってきている。わたしをちらりと見てヘクターが腰の剣を素早く抜いた。わたしも大急ぎで唱えていた呪文を完成させる。指を突き出すと仕上げる言葉を叫んだ。

「エネルギーボルト！」

魔術師の術としては初歩の初歩。純エネルギーの塊を敵にぶつける術だ。咄嗟に浮かんだのがこれだった。一番制御に自信のある呪文でもある。現れた青い球体の光がみるみる大きくなっていく。

「で、でででけー！」

自分と同じくらいありそうなエネルギー弾を見てフロロが後ろに跳び引く。指先から離れた魔力の塊はぶわりぶわりと不審な動きをしながらワーウルフの方へと飛んでいった。が、ひよい、とあっさり避けられる。

「ああ！そんな！」

悲鳴を上げるわたしの横でアルフレートはわざとらしく大きく息を吐く。

「何でお前の呪文は全部『デブ』なんだ？魔法使いじゃなくデブ使いだ」

「デブデブ言わないで、アルフレート！」

涙目になるわたしの横で空気が動く。騒いでいる間に向かってきていたワーウルフ達がこちらに腕を振り上げている。その次々に伸びた二つの拳をヘクターがロングソードで弾いていった。

「さ、こっからは彼のお仕事だ」

アルフレートに襟元を掴まれ、後ろに引っ張られる。

軽快に動き、ソードを振るうヘクターに比べてワーウルフ達の動きは単調で、闇雲な攻撃に見えた。その光景を前に、

「やるなあ、応援歌でも歌ってやるか」

「止めて」

アルフレートののん気な声にわたしは即答する。アルフレートは渋々といった様子で出しかけていたハープを仕舞った。

引っ掻くように振るった腕を弾かれ、ワーウルフの一体が後ろによろける。そこへ素早くヘクターのロングソードが喉元へと突き刺さった。その一体はびくん！となるとそのまま倒れ、動かなくなる。その勢いで剣を引き抜くと、もう一体の腹あたりを切り付ける。

「ヴヴヴッ！」

唸り声を上げながらワーウルフはその一手をなんとか避ける。が、ヘクターの次なる動作の方が早かった。首元から下に下ろされた剣によつて血が飛ぶ。廊下の壁に赤い染みが広がった。ずるり、と膝から落ちるとこちらにも動かなくなる。

パチパチパチ、と思わず拍手するわたし達。ヘクターはやや照れ笑いだ。

「……アルフレートはなんで何もしないのよ」

丸きり自分のことは棚に上げたわたしの嫌味に、

「私が本気を出したらおまえ達の出番などないぞ？つまらないじゃないか」

そう澄まして答える。どこまで本気かわからない。

「さて、こいつらを見て思うことはなかったか？」

急に教官のような喋り口調になるアルフレートにわたしは目をぱちぱちとさせる。不審な点、という事だろうが実物を見たのが初めてのわたしにはわかりっこない。強いて言えば「何でこんなところに？」ということだろうか。

「……じゃあ、その転がってるものをよく見てみる」

苛立たしげなアルフレートにわたしは「えっ」と固まった。実はさっきの血飛沫もあまり見ないようにはしていたりと、死体の観察は

おろか近づきたくもないんだけど。

顔を歪めるわたしの肩をヘクターが叩く。そしてアルフレートに向き直った。

「人形なんだ、そうだろう？」

「なんだ、気付いてたのか」

アルフレートはひよい、と肩をすくめて答える。ヘクターは頷いた。

「さっきの魚みたいなのもそうだった。切った感触が明らかに違うんだ」

「ええー！」

わたしはそう驚くと転がる二体のワーウルフを見る。飛び散った血飛沫といい、その血で固まった毛の質感といい、生き物とは思えなかったけど人形とは。動きだってあんなに滑らかでリアルだったのに。

暫く躊躇するが、意を決して獣に近づく。首元から今も赤いものを流している方の傷口を嫌々ながら凝視した。

「金属？」

思わずわたしは声を洩らす。皮一枚獣らしさを持っているだけで、中身は何かの金属で出来ているようだ。毛皮の中から光を反射する素材が覗いている。次に辺りに広がる血を観察する。臭いが無い、そう気がついたわたしは指先につけて光に当てた。

「本当だ……」

冷静に観察すればお粗末な作り物だ。本物よりもやけに色鮮やかなのは薄暗い中でも赤が目立つように、に違いない。たぶん全身に管を通し、斬ると派手に血を吹き出すんだろう。

「何で、何でこんな事を？」

そう正直な感想を口にする、わたしは後ろにいる仲間の方へと向き直った。

またここで、集まりましょう

「分からないか？」

そう言々とアルフレートは歩き出す。ワーウルフ達がやって来た廊下の角へ向かって行く彼の後を、わたし達もついて行く。

「モンスターもどきについては生命の精霊が全く存在しないもんだから、すぐ気づいた。死体……といって良いか分かんが、調べたら限りなく生物に似せているが機械仕掛けのように見えなな」

そう言いながらある地点で立ち止まると、一歩前の床をダンツ、と強めに踏み込む。すると廊下の右手の壁から何かが飛び出してきた。

「ひい！」

アルフレートの頭に突き刺さった一本の矢を見て、わたしとヘクターの悲鳴が重なる。しかし何事も無かったようにアルフレートは振り向くと、面倒くさそうな顔で刺さった矢を引き抜いた。

「……な、なんだ、オモチャじゃないの」

わたしはアルフレートが見せてきた矢の鏃部分を見てほっと息をつく。吸盤になっていてどこにでも張り付くようになっていた玩具だ。

「至る所にある害を及ばさない罫、これは何の為だ？」

もう一度アルフレートからの問い掛けがくる。

「怪我したら困るから？」

そこまで口にしてからはととする。何で怪我したら困るんだ？それは本気じゃないから。お遊びだから。そしてモンスターそっくりな人形達を思い出す。

「バレットさんの発明品……！」

わたしは思わず掠れた声に出す。アルフレートは頷くと溜息をついた。

「だろうな。問題はなんでこんな面倒くさいことするのかってこと

だ」

「暇な老人の遊びに付き合わされたってことだろ」

フロロはそう言うとき大きな欠伸をする。なるほど、それで「命の心配はない」というわけか。

何ともくだらない結末が垣間見えてしまい、わたしは脱力する。

遊びでこの規模のダンジョンを造り上げるって、やっぱり相当な変わり者だわ。

「ねえ、まさかこれ無駄になんないわよね」

わたしはポゼウラスの入った革袋を持ち上げた。それをちらりと見てフロロが、

「いいじゃん、楽しかったんだし」

とあっけらかんとして言うが、わたしは眉を寄せる。

「わたしは嫌よ！あんなに苦労したんだから」

「苦労したか？順調極まりなかったと思うが……」

アルフレートの言葉にわたしはちゅちゅと指を振った。

「沢山歩いたわ」

それを聞き、はぁー、と息を吐くアルフレート。まるでゴミを見るような目つきは何だ。

「まあそうだね。いきなり一日がかりの旅はきついもんだよ」

ヘクターからの優しい言葉にアルフレートは舌打ちする。

「おい、あんまり甘やかすなよ？この細い足で頑張ってる私に比べれば、お前はただの甘えだ」

「……エルフって皆こんな感じなの？」

ヘクターが小声で耳打ちしてきた。違う、と思いたいがわたしもエルフの知り合いなんて彼しかいない。小説なんかで読んだエルフはもっと高尚だが浮世離れした物腰で、嫌味っぽくはなかったんだが。

「騒ぐのは後にしろよ。作り物だろうがこっちに襲い掛かってくるモンスター共がうろろしてるんだし、あと二人回収しなきゃ」

フロロからの最もまともな意見にわたしもアルフレートも黙る。

確かにはぐれてる二人は不安なままだろうし、急いで見つけてあげなきゃならない。

とりあえず進みますか、という雰囲気です。足を進めていると前方に左に入る入口が見えてきた。

入り口の前までくるとぐるり、と室内を見回す。廊下と同じ無機質な壁に囲まれた小さな部屋にちよこん、と箱があった。一方が蝶番で固定されて開くタイプの、見るからに宝箱です、といったような箱だ。

「ね、ねえ……」

わたしが呟くとフロロが引き攣りながら答える。

「お、おう……あれは引っかけかと思つて設置してあるのかね？」
宝箱のある真上の天井に、フロロと同じぐらいの大きさの岩が吊してあるのだ。あんなでかい岩を天井に吊す努力は買つが、普通に視界に入る位置にあつては意味がない。

フロロが「それ！」という掛け声と共に小型ナイフを投げつけた。カンッ、と宝箱の留め具に当たると「ぽすっ」となるとも気の抜ける軽い音と共に岩が落ちてきた。

「かー！あつ！本物の岩でもないんじゃない！」

イライラの頂点に達したわたしは張りぼての岩を蹴り飛ばした。ごろり、と哀愁を漂わせて転がる岩は置いておき、フロロが小箱を開ける。

「……何だこれ？」

中にあつたのは小さな猫のぬいぐるみ。タンタ達を小さくしたような姿に、もしかしたら彼らが作ったものかもしれないな、と思う。

「さあ、次行こうぜ」

はあ、と息つきながら部屋を出ようとしたフロロの足が止まる。また敵？と思つたが、わたしの耳にも唸りのような音が聞こえ始めた。

「……これだけは相変わらず不気味なのよね」

鋼の軋むような音と獣の咆哮を混ぜたような響きに、わたしは無

意識に身を震わせていた。

すぽーん！とワーウルフの腕が飛ぶ。獣の腕を切り飛ばしたヘクターの剣が、そのまま腹部の中心部を突き刺すとあっという間に動かなくなった。抜け殻になったようにごろりと床に転がる。

こうやってみると生き物の動きとしては少し不自然かも。簡単に動くことを止める様子はスイッチのオンオフを見ているようだ。

「すごいすごい！」

わたしは転がる三体の人形を避けながらヘクターに駆け寄る。ぱちん、とソードを仕舞うとヘクターはわたしを見て笑った。ああ、かつこいいい。

ふと後ろを見るとなぜかじゃんけんをしている妖精二人がいる。完全に何もする気無し、という事を表明しているようだ。「早く行くわよ」と声を掛けると優雅な歩みでついてくる。

「ローザとイルヴァは大丈夫かな。パニックになってなきやいいけど」

少し広くなってきた通路を歩きながらヘクターが呟いた。すると、「欠落人間二人か。まあ正直、欠けても被害は少ないよな」

アルフレートがさらにと答え、ヘクターの頬がやや引きつる。が、気を取り直したように前を向いた。

「早く合流したいけど、これだけ広いと上手く鉢合わせるか分からない」

そうなのだ。このまま考え無しに歩き続けているだけでいいのだろうか……。そろそろお腹も空いてきたし、喉が渴いてしょうがない。洞窟のような場所に入るわけではなかったので、準備もしてこなかったのだ。

「何か印でも書きながら進んだ方が良いかな？」

わたしがそう言って皆の顔を見るとフロロが顔をしかめ、耳を動かす。

「何か変な声しなかった？」

変な、とはさっきから何度も聞いたあの不快感だろうか。わたしの顔に出ていたのか、フロロが首を振る。

「違う違う、『アレ』じゃなくて……」

その時、

『きやああああああ！！』

どこからか耳をつんざくような野太い悲鳴が聞こえ、わたし達は凍り付いた。あの不快感に負けにくいくらいのおぞましさが、こちらには聞き覚えがある。

「ローザよ！」

わたしが叫ぶとフロロは頭上を指差す。

「上からだ」

わたし達四人はフロロを先頭に走りだした。角を曲がるとすぐに上にいく階段が見える。そのまま駆け上がるわたし達。

普段からちょこまかと素早いフロロは当然のように早い。しかしわたしも走るのはさほど苦手ではないと思うのだが、残り二人ともみるみるうちに距離がひらいていく。ちょっとは女の子のこと考えなさいよ！

そんなわたしの心の声が聞こえたのか、ヘクターがスピードを緩めていく。

「大丈夫？」

「大丈夫！それより今のつて……」

わたしが言いかけた時、「おおおおお！？」という奇妙な叫びが再びする。階段をとうに上り終えて前から見えなくなっていたアルフレートの声だ。

嫌な展開にわたしとヘクターは顔を見合わせる。息を切らしながらも長い階段を上り終えると、直ぐ先にポツカリと床にぽっかりと開いた穴があった。

長方形の穴を屈んで覗き込む。すると見えた光景に息が止まってしまった。

巨大な剣山のような、密集したとげとげが上に向かって突き伸びている。典型的な落とし穴トラップ、に見えた。その針の中にのびているアルフレート、さらにはローザとイルヴァの姿があった。

が、よく見るとゴムのような柔らかい素材で出来ているのか、針は三人の体重でぐにやりと頼りなくまがっている。なんだ、あせった……。

ふと前を見ると、わたし達が覗き込む反対側でフロロがピースサインをしている。穴を飛び越えたいらしい。さすがはモロロ族といったところか。

「ぽかんとしてないで助けろ」

下からアルフレートが憎たらしい声を上げる。

「突っ走るあんたが悪いんでしよう！それが人に物を頼む態度なの？」

こちらを睨む顔にわたしは思わずむっとして言い返した。

「まあまあ、リジア、ここで言い争っても無意味ですから、ちゃちゃっと引き上げて下さいよ」

「アンタが言わないでよ、イルヴァ……」

わたしのこめかみに浮き上がる一筋が見えたのか、ヘクターが「まあまあ……」とだめてくる。

しかし助けようにも、どうしよう。無論、ロープ何ていう道具も無ければ、はしごもない。ふと頭に『エンチャントロープ』という便利魔法が浮かんだりするが、あれは話にならない。魔法で出来た紐を精神コントロールで操る、というわたしの最も苦手とする類の魔法だ。

「ちょっと待ってて」

悩むわたしに救いの声は反対側から聞こえた。見るとフロロが何やら懷をがさがさとまさぐり、ぽん、とロープの束を出すではないか。どうやってもあの小さな体に隠せるもんじやない気がするんだけど。色々つつこみたいところであるが、とりあえず三人を救い出すことを優先してもらうことにする。

「ほい、つかまって」

フロロが下へロープを垂らすと、すかさずローザが「ありがと！」
と言いながら手を伸ばす。その光景を見てわたしは何か違和感を覚
えた。えっと多分、それって……。

ぽひっ

真っ逆さまにローザの上に落ちるフロロ。

「あー、やっぱしそうなるよねー」

「ちよつと何納得してんのよ、リジア！！早くこのグダグダ何とか
してよ！」

頷くわたしの耳をローザの悲鳴が襲ってきた。

正しき勇者達

せつかく六人が揃ったというのに感動の再会、とはならないのがわたし達らしい。怒り爆発のローザが喚く様子を皆で眺める。

「全部この女のせいよ！」

ローザはそう言っ、びしりとイルヴァを指差した。

「『いかにも落とし穴です』って言ってるような切れ目の見える床で、いかにもく宝箱なんてあっても触らないでしょフツーは！」

この台詞で大体の状況が読めたわたしは溜息をつく。怒りで顔が真っ赤になっているローザとは対照的に、イルヴァは人形のような顔のままだ。それが逆に火を注いでいるらしい。

「その前から最悪だったのよ！でかい岩に追い掛けられるわ、火の矢が降ってくるわ、変なスライムは浴びるわ……！リジアたちとはぐれてから散々だったのよ？もうイヤ！絶対イヤ！この女と一緒にいるのは耐えられない！」

よく見ると、二人とも頭に不気味な半透明の物体がまだらに乗っけていたりする。うわあ、気持ち悪いだろうな……。ローザが怒りで震える為にスライムもぶるぶると揺れる。それを見て少し笑いそうになってしまった。

しかしわたしとヘクターも未だ半乾きのままである。気持ち悪いったらない。

「まあ、はぐれたこと自体がイルヴァのせいだしね。こっちも散々だったわよ。ずぶ濡れにはなるし」

わたしもそう言っ、問題のイルヴァを横目で見るが、本人はしれっとしたままである。

「楽しんでいただけました？」

『やかましいっ！』

わたしとローザの声が重なった。ローザがさらに続ける。

「大体おかしいのよ、ここ。さっきバジリスクタイプのモンスター

に会ったんだけど、イルヴァがあほみたいにバカーンと倒してみたら……そいつら、中身が何だったと思う？」

「作り物だったんだろ？」

アルフレートの言葉にローザは片眉をぐっと上げた。

「知ってたの？早く言いなさいよ」

「わたし達もさつき、その話をしてたのよ」

わたしが言うと、ヘクターとフロロが頷いた。暫しの沈黙ののち、アルフレートが口を開く。

「年寄りの酔狂に付き合わされたわけだ」

ローザが目を白黒させる。再び顔が真っ赤になってくるが、すぐに放心したようになってしまった。

カラクリ仕立てのモンスターがうろついているだけなら護衛とも考えられたが、馬鹿馬鹿しい罠に本気度ゼロの落とし穴。そもそもわたし達が帰ってくるタイミングでの屋敷の変貌。答えは一つしかない。バレットさんが遊んでいるのだ。

「……嫌なことだけど、依頼自体も怪しいわね。わたし達みたいなのを呼び寄せる口実だけなのかも」

「依頼まででつち上げだったら許さないわよ！いらないうて言っても口に詰め込んでやる」

ローザが肩を震わせる横で、イルヴァが手を挙げる。

「村の人が消えちゃったって話しは？ここに入り込んで罠にかかって、とかだったら危ないじゃないですかあ」

イルヴァの言葉に他のメンバーは顔を見合わせた。

「……たまにまともなことを言うのが気に食わないわね」

「あ、リジアったら嫉妬しちゃって」

そう言いながら頬を突いてくるイルヴァの指にイラッとするが、これは受け流すことにする。

「確かに住民が失踪してる話は片付いてないわね」

ローザが呟いた。それに、

「噂レベルの話、だがな」

とアルフレート。

「どっちにしろ、よ。こうなったら最後まで付き合っちゃおうと思うのよ」

わたしの言葉に皆がこちらを見る。何を言っているのか、という様子を見てわたしは言葉を続けた。

「悪の親玉を、正しき冒険者が倒してハッピーエンドを迎えるのよ」

「そこまでよ！」

掛け声と共に扉を勢いよく開けるわたし達。屋敷の最深部と思われる大部屋を見つけたのは、先程の話し合いからすぐの事だった。広く何も無いホールのような造りはわたしの声をよく反響させる。

部屋の中にはバレットさんと猫達が勢揃いしている。部屋の奥、中央に仁王立ちするバレットさんは目だけを覆う妙な仮面、猫たちはドクロのプリントがしてある黒の全身タイツ姿。悪の演出、ということだろうか。

ちなみに此处に来るまで、何回もこの台詞と共に誰もいない部屋を開け続けていたりする。未だバレットさんの企みなど分からないままだが、とにかくノリで押し切ることに決めた。

「あなたの企みはお見通しよ！」

善神の信者であるローザも張り切って叫ぶ。彼女も好きな展開ではある。一瞬、バレットさんは面食らった顔になる。

「あなたが捕らえている村人も返してもらおうよ！」

ローザがきりと決めると、バレットさんは「はて？」と呟く。

本気で「何の話でしょう？」という顔だ。

「と、とぼけないでよ！」

「ちよつと待って、ローザちゃん」

わたしはローザを手で制した。

「あなたがこの村の行方不明事件に関わっているっていう噂があるのよ。あなたの家に入っていく姿が最後、その後の行方が分からない

い人がいるって」

暫く頭に「？」を浮かべた様子のバレットさん。次の瞬間、ぽんと手を叩くと、

「ああ、そういうや駆け落ちのカップルやら夜逃げ家族やら逃がしてやったことがあったなあ。村人と深い関わりが無くて小金がありそうなしに相談してくる『訳あり』な人も多くてのー」

ぽりぽり、と頭を掻く。わたしは皆の顔を見回した。

「家具が揃って無くなってたのも夜逃げ、って考えるとスムーズではあるな」

アルフレートがぼやきつつ頬を撫でる。

「……嘘をついてるようには見えないけど、どうする？」

わたしがローザを始め周りに尋ねると、「なら別に戦う理由無くない？」とローザ。「あーあ、盛り下がっちゃった」と溜息ついたのはフロロ。

「……だよ。バレットさん、これ、頼まれてたポーズ……」

わたしがそこまで言いかけた時だった。

「そ、それは困るぞ！わたしは遊びたいんじゃない！」

慌てたのはバレットさん。……この人、大したシナリオ考えずに見切り発車だったんだな？

「『遊びたい』ってはっきり言われちゃうとな」

ソードを仕舞うかどうか迷う素振りではクターが呟く。わたしは深呼吸すると、手をあげ叫んだ。

「仕切り直しよ！」

「あなたの企みは全てお見通しよ！」

数分前の出来事など無かったかのように見事な演技で、ローザがびしりとバレットさんを指差す。

「ふ……ふはははははは！それなら話しは早い……。シヨータイムといこうか！」

仕切り直しの間でキャラ作りの終ったらしいバレットさんは、ざつ！と右手を高らかに上げた。

「我が力、見せてやる！いでよ、ガーシユライザー！！」

どん！という全身が揺れる振動と視界を遮る埃。大層な名前と共に天井より何かが舞い降りる。現れたそれは踏ん張った足を緩やかに直立の体勢に戻すと、わたし達の方へと頭を上げる。全身金属片をまとったその姿は一昔前の甲冑の鎧のようにも見える。ただ、とにかくでかい。本の世界でしか見た事はない巨人族ぐらいあるんじゃないか。優に二階建ての民家程はある。青い体に赤い頭部、銀の手足ととにかく派手だ。

「な、何よこれ……」

わたしは思わず乾いた声を出してしまった。バレットさんが巨人の後ろから嬉しそうな声を上げる。

「驚いたかね！？私の研究の結晶、ロボットマシン『ガーシユライザー』だよ！」

はっはっは！と悪そうな高笑いが響く。その彼が両手で抱えているのはロボットマシンとやらを操縦する端末なのだろうか。レバーのようなものが二つ付いたへんちくりんな箱を動かす度、ロボットはぎちぎちと奇妙な音を立て始める。それを聞いてわたしははつと顔を上げる。

「この音だわ……！」

耳障りな金属音と獣の唸りに似た響き。全てこのロボットから発せられる音だったのだ。

「こいつの特徴はパワーならトル並み、しかしながら脚部の安定性によりスピードも……」

うだうだとしやべるバレットさんを総シカトしたイルヴァ、ヘクターの二人が巨人に向かって駆け出した。

「ふっ！」

気合い一線、イルヴァがロボットの脛の辺りにウォーハンマーを叩き付ける。轟音が部屋に響き渡った。フロロが「わー！」と耳を

塞ぐ。

「話を聞けー！私の素晴らしい発明品じゃぞー！！」

バレットさんがわーわーと騒ぐがおかまい無しに、イルヴァは攻撃の手を休めない。多分バーサーカー娘にとっては「わーい、何かボコリ甲斐のある奴が出てきたぞー」ぐらいにしか思っていない。現に生き生きとウォーハンマーを振り回し続けている。

ヘクターもロボットの足、関節に当たる部分に切り掛かりながら様子を伺っている。が、イルヴァのウォーハンマーを避ける為にあまり近寄れないようだ。

ロボットの方と言えば二人の攻撃が致命傷にはならないものの、明らかにオタオタした様子だ。必死にパンチやらを繰り出しているが、軽々と避けられている。性能は良くとも操縦が追いついていないらしい。バレットさんは必死な顔でレバーをがっちゃがちゃ言わせ、その周りではタンタ達が飛び跳ねて応援をしていた。

「……どうする？このまま見てる？」

ローザがこっそりわたしに耳打ちしてくる。

「うーん、まあでもそれも盛り下がるわよね。下の方だと二人に当たっちゃうかもしれないから、頭の方狙って何か撃ってみようか」

わたしが答えるとローザが露骨に顔を歪める。

「あんたが？……まあいいけど。絶対大丈夫！って自信のある魔法限定ね」

しつこく念を押される。この信用ゼロな感は少し親友としては酷いのではないか。色々言いたいのが、わたしはとりあえず『自信のある魔法』を唱え始めた。

「エネルギーボルト！」

わたしの指先から光球が放たれる。自信のある魔法といえはこれしか思いつかない。圧縮されたエネルギー弾はまたしても重そうに漂い、ロボット目指して飛んでいく。

「頑張れ！行け！お前なら出来る！」

わたしの必死な応援を受けてエネルギー弾はふわり、天井の方向

へ浮き上がった。

イルヴァの方へキックをしようとしたロボットが丁度上体を持ち上げ、そこにわたしのエネルギーボルトがぼうん！と炸裂する。

「あ、当たった！当たった！」

情けないが予想外の展開にわたしは飛び跳ねる。ロボットの方もくらくらすのか頭を振っている。人間が頭をぶつけた時に見せる仕草のようだ。

その衝撃でなのか、頭の天辺に付いていた三角の飾りがぼろりと取れた。そのままバレットさん達の方へ落ちていく。

「わわわ！」

「にゃー！」

バレットさん達は悲鳴を上げながら避ける。ロボットの頭に付いていた時は小さく見えたが、落下した際の衝撃も大きさもかなりのものだ。

「気をつけなさい！危ないじゃないか！」

「あはは、ごめんなさい！」

バレットさんの注意にわたしは思わず謝る。バレットさんはそのまま避ける時に落としたレバー付きの箱を拾い上げた。そしてはつとした顔でロボットを見上げる。

「や、やばい、逃げる！」

そう悲鳴を上げると猫達の腕を掴み、奥にある小さな扉に駆け込む。主の消えた室内、わたし達は呆気に取られてしまっていた。

「……何か様子が変わらない？」

ローザに言われてわたしはロボットを見上げる。耳に当たる部分からぷしゅーぷしゅーと煙を出し続けているロボットは『カツ』と目を見開いた。ランプのように瞬く瞳は赤、青、黄色と色を変え、全身は細かく振動している。

「パワー蓄えてる最中みたいに見えるな」

フロロの呟きにわたしは嫌な予感がしてしまった。

勇者達、翻弄する

両手を広げ「ぐおおお！」と勇ましく吼えるロボットに腰が抜ける。

「な、なんで操縦者がいないのに動いてるの!？」

ローザの悲鳴にわたしは首を振った。

「それより確実に凶暴になってるわよ！」

そう叫ぶ間にもズシン、ズシンと音を立ててロボットは歩き回る。振動でフロロが転げまくるが、こっちもそれどころじゃない。立っているだけで精一杯だが、近づく巨体から必死で逃げる。

大木のような腕をぐるぐると振り回したかと思うと、ロボットは体全体を倒しながら壁を殴りつけた。

「きゃー！」

飛び散る破片とわたし達の悲鳴。操縦者であるバレットさんがいた時には考えられない滑らかさで次々に腕を振るう。気がつくとはバレットさん達が逃げ込んだ小さな扉は瓦礫で埋まっていた。

「全然効きませーん！」

ロボットの足にウォーハンマーを振るうイルヴアが叫ぶ。ヘクタ―が壁を殴るロボットの腕目掛けてソードを振るが、何もダメージが無い様子に舌打ちした。

「ど、どうする!?!一回逃げる?」

わたしは入ってきた扉を指差し尋ねる。声が震えているのはロボットが巻き起こす揺れのせいなのか、恐怖の為なのか。その時、ロ―プを引き千切るような『ブツッ』という不思議な音がする。

『ひよんな事から操縦不能に陥ってしまった最新兵器ガーシユライザー!哀れなる老科学者には止める術がなかった……』

くぐもってはいいるがどう聞いてもバレットさんの声だ。わたしは部屋を見渡す。が、姿は見えない。

『最早手は残されていないのか!いや!そこに現れたのは六人の勇

者達！行け！勇者達よ！狂気の世界に堕ちてしまったロボットを止めるのだ！バレット邸を救う……いや世界を救うのは君達だ！」

「な、何言ってるの？」

この場にはいない相手に思わず返すと、意外にも返事がくる。

『お願い！何とかして！わしの家、壊れちゃう！』

必死な声に頭のどこかがぷつつり切れそうな気がする。何とかしたいのはこつちだ、と怒鳴り返したい。だがまた『プツ』という音が鳴ったかと思うと、バレットさんの声は聞こえなくなってしまった。

強烈なパンチを食らい続けている壁だけでなく、天井まで崩れてきたらしい。ぱらぱらと石屑が舞い降り、血の気が引いてきた。

突然ロボットの動きがぴたりと止まる。が、すぐに両腕をぶるんと振るとそのままの遠心力で全身を回転し始めた。

「ひええ、床に穴でも開けそうだぜ」

フロロが瓦礫の隙間から顔を覗かせる。摩擦の為にロボットの足元からは煙りが上がっていた。イルヴァ、ヘクターも慌てて退避している。足元に纏わりつく人間がいなくなったのが満足だったのか、ロボットはがちゃがちゃと体を揺らした。笑っているらしい。

「む、むかつくわね」

そう漏らすわたしの背後からアルフレートがのん気な声を響かせる。

「何とも間抜けな戦いだなあ」

それを聞いてむっとした様子でローザが詰め寄る。

「文句言うならあんたも何か参加しなさいよ」

「いいのか？私が手を出せば実につまらない事になるぞ？」

聞き覚えのある台詞にわたしも口を出す。

「またそれ？いいからそのつまらないのを見せてみなさいよ」

アルフレートは肩をすくめると、呪文を唱え出した。歌とは違って美しい彼の詠唱に、やおら精霊達が集まり出す。

その間に瓦礫によじ昇ったヘクターがロボットの背中に飛び付い

ていた。そのまま肩を掴み這い上がる。一度仕舞っていたソードを抜き、首と頭を繋ぐ部分の割れ目に切りつけた。

これは堪らん、とばかりにロボットが暴れ出す。わたしは思わず叫んだ。

「振り落とされちゃう！早く早く！」

そう言ってアルフレートの襟を掴み、がくがくと振るが、聞こえてきた呪文の断片に目を見開く。

「だ、駄目よ！」

「アークボルト」

アルフレートが静かに言い放った瞬間、
バシッ！！

巨人の足下から頭上に電流と思われる光の筋が走った。巨人は動きを止め、そのままフラリと傾く。

「うわ！あぶね！」

ヘクターがロボットの肩から落下する。ズズズン……と巨人が粉塵を立てながら沈んでいったのを見て、わたしは悲鳴を上げた。

目を覆うわたしの肩を誰かが叩く。アルフレートだ。彼の指差す先、光る円形のシールドの中でヘクターが呆然と座り込んでいた。

そのシールドは今も落ちてくる瓦礫を弾き飛ばしている。

「……最後の最後で手間掛けさせないでよ」

そう呟くローザが手を振るとヘクターの周りに輝いていたシールドも消える。フロロを皮切りにわたし達はイルヴァとヘクターの方へと駆け寄った。

「感電しなかった？」

フロロが聞くとヘクターは立ち上がりながら頷く。

「咄嗟に剣は離れた、っていうのと……あとはこれのお陰かな」

そう言って足の裏を見せる。ブーツの分厚い底が微かに煙を上げていた。

「殴っていいわよ」

ローザがそう言ってヘクターの前にアルフレートを突き出す。

「なんで倒した立役者が殴られなきゃいけないんだ」
アルフレートは納得がいかない、といった様子でむっとして答えた。

「いやー、楽しかったよ」

バレットさんはビールを片手に朗らかに笑った。あの後どういう仕組みなのかは分からないが、あの大部屋に突入した時の入り口から脱出すると、上に上がる階段が出現していたのだ。上ると何事もなかったかのような元のバレット邸があつたのだから気が抜けてしまった。

疲れきってテーブルに突っ伏すわたし達の間を猫達は忙しそうに走り回る。飲み物から始まり、いつから用意していたのか豪華な料理を運んでくる。

「楽しくないわよ、全然楽しくない」

シャワーを借りて綺麗になったローザが不機嫌そうにグラスの中心身を傾ける。

「まあ俺は楽しかったからいいけど」
というフロロに、

「俺も楽しかったから良いかな」

一番割り食った役だったはずのヘクターが笑う。ローザが小声で「良いんだ……？」と呟いた。わたしはというと疲れた！というのが本音だが、フロロ達に同調する部分もある。皆無事だったんだしね。アルフレートとイルヴァはいつもと変わらない顔で飲み物を口にしている。マイペースな二人には「事が終わればどうでもいい」ということだろうか。

「さて、と……、何だってこんな真似を？」

わたしはテーブルに身を乗り出す。バレットさんは悪びれる様子も無く答えた。

「わしの趣味。わしの専門分野は生活に関わる器具、ってなってる

けど実際はロボットの方が好きなのよ」

「しゅ、趣味って……！」

ローザが怒り籠った口調で何やら言いかけるが、直ぐに馬鹿馬鹿しくなったのか溜息に変わる。

「兵器として目をつけられやすい分野だから内緒なんだけどね。でもたまにこうやって弾けなくなっちゃう」

「要するにわたし達の反応を楽しむ為だけにやったんですね？あの入り口の血だとか……」

わたしの質問にバレットさんは嬉しそうに髭をさすった。

「ああいう状況を見せれば、中に入るしかあるまい？」

反論しようとしたが言葉に詰まる。冒険家を目指すものがあんな依頼人に危害があったようにも見える状況で逃げ帰ったら、それこそ末代までの恥だ。

「いつもこんなことしてるんですか？」

フルーツジュースを飲みつつわたしが聞くと、

「何度か」

としれつと答えた。

「あれ？でも学園に依頼するの初めてって言ってたわよね？」

ローザが聞くとバレットさんは頭をかく。

「ここに越してから、ね。前に住んでた国では何度かその国の学園から学生呼んでただんだけど、何度もこういう事やってたら受けてくれなくなっちゃった」

そう言っでビールをぐびり。

「しかしどっからバレちゃってたの？まだまだ罊はいっぱいあったのになー。もっと時間掛かるかと思ったのに」

バレットさんがぐちぐち言い出した。最終場である大部屋に踏み込んだ時のわたし達の反応からだろう。

「あんだだけバレバレの罊なら誰でも気づきますよ。危害加える気ゼ口なんだもん」

わたしはバレットさんを睨む。すると横にいた白猫タンタが口を

開いた。

「でもおねーさんがプールに落ちた時はひやりとしましたにゃー。気を失っててもおかしくにゃい高さだったからにゃ」

「ああ、そんな時は魚人型ロボットに救助させる予定だったから大丈夫」

バレットさんが手を振り答える。助けてくれたのがヘクターで良かった、と心底思う。

「あのプールだけやけに大掛かりだけど、用意した罍の一つなんですか？」

ヘクターの質問にバレットさんは首を振る。

「今回、罍に活用したけど本来はガーシユライザーを冷やすプールなんだよ」

その答えにわたしはあのロボットがお風呂に入るようにプールに浸かる光景を想像する。というかそんなところに入りたくなかった。その時、肝心な事を思い出したわたしは手を叩く。

「そうそう、バレットさん、行方不明事件の犯人では無かったにしろ、村の人からは疑われたままなのよ？いいの？」

わたしの言葉が終わる前にバレットさんは猫達に指で合図する。

茶虎猫が持ってきた何かを受け取ると、わたし達に見せる。

「手紙？」

二つの別々の封筒を見てわたしは尋ねた。

「北の方に越して、一からやり直してる一家と、隣国サントリナに渡って結婚した二人の近況報告。これ見せれば良いんだろうけど、見せちゃまずいでしょ？お金もちよつとづつ返して貰ってるから、隠しておいてあげたいしね」

「あ……夜逃げと駆け落ちなんだっけ」

わたしが呻くとフロロが「そりやマズイよな」と付け加える。

「にしても君らには迷惑かけちゃったね。まさかコントロールが壊れて、自動操縦モードになっちゃうなんて予定外だったから」

バレットさんは一人うんうんと頷く。迷惑を掛けたポイントの最

大はそこだとしても、そもその企画が迷惑なんだけどな。と伝えようとするが、

「そこで、だ。君達に私から贈り物をしたい」

その言葉にわたし達六人の目が輝いた。現金なものである。

フローラちゃん

「こ、これは……」

テーブルに置かれたそれを目の前に、わたし達は息を飲む。

バレットさんがそつと差し出した緑色の小さな生き物。全体の半分以上を占める尻尾を入れてもわたしの腕ぐらいしか無い。

「……とかげ？」

「イグアナ！」

わたしの言葉をバレットさんが厳しく訂正する。どっちでもいい。

「いや……これ貰っても困るんですけど」

わたしが遠慮なしに言うたバレットさんはちゅちゅと指を振った。

「これはイグアナ型ロボットでな。わしは今人口知能の研究をしているんだが、これが第1弾。この世に二つとない大発明じゃぞ？」

それを聞いても眉を上げるしか出来ない。何しろあの巨大ロボットの暴走を見たばかりだ。

「ガーシュライザーのような一定のプログラムをこなすタイプのロボットとは違うぞい！学習機能を搭載、感情に近い反応も見せるという凄いロボット！わし天才！」

いやー、そう言われても、ペットを押し付けられても困るんですよ。

そう目で訴えるわたしの顔を見て、バレットさんは手を振り遮る。「まあまあ、まだあるぞい。誰かこのイグアナのココに触れてみなさい」

バレットさんが指差すのはイグアナの頭頂部にある小さな赤い寶石のようなもの。誰もが無言で躊躇する中、フロロが一步踏み出すとそのまみイグアナの頭へ手を伸ばす。その瞬間、何の音も振動も無く、フロロの姿が消えてしまったではないか。

「きゃああー！！ちゅと！フロロー！」

思わずわたしは悲鳴を上げた。わたしは反射的に老科学者の襟を掴まみがくぐくと揺らす。

「何したのよ！」

しかしバレットさんは自信たっぷりな顔のままだ。

「大丈夫大丈夫。フロロくん、中にも同じようなボタンがあるだろう。それにまた触れてみなさい」

次の瞬間、わたし達の前にフロロが現れた。またしても一瞬の出来事に皆が息を飲む中、フロロは目をぱちぱちさせ、飛び跳ねる。

「すごいーすごいー！ごいすーごいすー！」

部屋を踊りながら回る彼を捕まえるとわたしは尋ねる。

「何！？何が起きたの！？」

「リジアもやってみなよ。新しい世界が開けるよ」

も、もうちょつと解りやすい説明を……。わたしには彼が透明人間になったかと思えば、また姿を現したようにしか見えなかった。

わたしが文句を言おうと口を開くと、

「あ」

ローザの声が後ろから聞こえる。振り向くとイグアナを囲む人数が減っているではないか。いないのは……ヘクター。

「ど、どこ行っちゃったの！？」

バレットさんは黙ってテーブルを指差す。すなわち、イグアナを残ったわたし達はお互いの顔を見る。

「イ、イグアナの中に居るってこと？」

ローザが眉間に皺寄せながら尋ねるも、バレットさんはにこにこしているだけで答えない。もう！とわたしは鼻息荒くする。

堪らなく不安だが、どうなっているのか知りたい欲求の方が大きくなってきた。

ええい、ままよ！

深呼吸すると、わたしはそつとイグアナに手を伸ばした。

耳鳴りになる一歩手前の感覚。一瞬のふらつきはあったものの、何が起きたか解らない。ぼんやりするわたしの前に見知らぬ部屋の

光景がある。何もない部屋。そこにわたしはいた。

わたしのそんなに広くない自室より狭く、広めの物置といったところか。光源がどこなのかわからないが不快でない程度に明るい。

左手に一つドアがある。一つ深く息をするとわたしはドアの方へと足を進めた。その時、そこからヘクターの顔がひよいと現れるではないか。わたしが安堵の息を吐くと彼の方もこちらを見て微笑む。

「こっち来てみなよ」

わたしがそちらへ向かおうと足を踏み出すと、後ろにフロロが現れた。また移動してきたらしい。わたしは彼に尋ねる。

「皆は？」

「外でじゃんけんしてる」

「あつそ……」

わたし達三人がいなくなっているというのに薄情な奴らだ。

ふと視線をフロロが出現した方向にやると、壁に拳ほどの赤いものが張り付いているのが見える。うつすら魔力を帯びる宝石。魔晶石だ。なるほど、これが『こちら側』からのスイッチらしい。転送装置になる魔晶石、こういうのを見せられるとやっぱりバレットさんはただ者じゃないと思わされる。

ヘクターとフロロが入っていったドアの方へ行き、中を覗くとわたしは一瞬言葉を失った。

その部屋はおよそわたしが見たことのない世界であった。部屋の上半分は窓で覆われ、下の方は見たことが無い機械のようなもので埋め尽くされている。その前には角ばった大きな椅子が二脚。操縦席、というやつだろうか？窓の外の光景はというと、

「何これ、イグアナからの目線ってこと？」

まるで自分がピクシーにでもなったかのように、先程までわたしがいたバレット邸の食堂が引き延ばされた大きさで見える。ビールを飲むバレットさんも、その周りにいる猫達もドラゴンのように大きいのだ。イルヴァとアルフレートがじゃんけんをしている姿も見える。

それを見て、わたしはふと思い立ち、先ほどの部屋へと戻る。部屋の中には呆然と立ち尽くすローザの姿があった。

「さて、どんなものが大体解って貰えたかね？」

バレットさんは未だ茫然とするわたし達を見て満足そうに笑った。全員あの部屋に入った後、暫く観察して再び外へと戻ってきたのだが、ぶっ飛びすぎた未知の経験に感動も上手く沸いてこない。

「仕組みはさっぱりですけど……ようするにこの子の中に入れるんですね？」

この子という言葉に反応したのか、イグアナがつぶらな瞳をわたしに向けて首を傾げる。こういう仕草を見ると可愛い気もする。

「そう、このイグアナ型ロボット『フローラ』ちゃんは」

ぶおっ！アルフレートがレモンソーダを吹き出した。バレットさんは気にも留めずに続ける。

「移動式コンパクト邸宅なのじゃ」

聞いた事ないネーミングだが、言いたい事は大体わかる。センスはどうかと思うが。

「邸宅……って様子じゃないわねえ。あの狭さじゃ」

ローザが首を傾げた。その言葉にもバレットさんは鼻で笑って答える。

「このフローラちゃんはこれで終わりじゃないぞい。……なんとなく成長するんじゃないよ。イグアナの成長速度は知っているかな？ものすごく大きくなるんじゃないぞ」

胸を張って説明されるが疑問は解決していない。

「……あの、これってロボットですよね？」

わたしの言葉にバレットさんは大きく頷く。

「そうとも。しかしこれがバレット流発明品のすごいところ」

「自分で言っちゃったよ」とフロロ。

「イグアナの生体を研究して組み立てたんでな。まさに本物と同じ

ようなペースで成長するぞい。しかもそれに合わせて中も拡張を続ける。一年も立てばこの中で揃って暮らせるようになるかもしれない」

「おお！それってすごいことじゃない！」

ローザが歓声を上げた。わたし達六人が冒険の旅に出るに当たって、寝泊りの心配が無くなったわけだ。今は当てに出来そうにないが、雑魚寝出来る様になるだけでも嬉しいかも。

ふと湧いたかがわしい考えに顔が赤くなる。

「……何考えたか当ててやろうか？」

「やめて」

アルフレートにわたしは全力で首を振った。

「二つあった部屋の片方、あれって操縦室？」

フロロがワクワク顔で聞くが、返ってきた答えは理不尽なものだった。

「操縦というか……お願いできるぞい。フローラちゃんに」
「気まずそうなバレットさんに「何じゃそれは」と全員の声が重なった。

料理が冷めますにや、という猫の小言を受けてテーブルに向き直る。ご褒美はやっぱり空腹を満たすご飯だ、とばかりにがつくわたし達を見ながら、バレットさんは満足そうだった。

とんとん、と背中を叩かれて振り返る。白猫タンタがわたしの顔を見てもじもじしたかと思うとにー、と笑う。

「途中でぬいぐるみ拾わなかったかにや？」

「あ、……これ？」

わたしはフロロから貰ったぬいぐるみをポケットから取り出す。宝箱で見つけた猫のぬいぐるみは、箱を開けた本人から「やるよ」と言われてわたしが持っていたのだ。

タンタは「それにや」と言う腕を絡ませてくねくねし出した。

「それ、タンタが作ったにや」

「あ！やっぱり？似てると思ったんだよね」

ぬいぐるみの猫は全身真っ白だが、手足の先だけ黒い布になっている。ちょうどタンタの毛色だもの。

「大事にして欲しいにゃ。壊れたら持つてきて欲しいにゃ」

また来るよ、と言おうとして思い出す。わたしはバレットさんの方へ向いた。

「ちよつと気になってたんだけど、タンタ達はこの村から出られないの？」

わたしの質問にバレットさんは少し目を大きくした後、頬をぼりぼりとかいた。

「んー、人懐っこくて疑う事を知らなくて、献身的で力が無い。どう思う？」

わたしは眉を寄せるが、最後の『力が無い』を聞いて彼の言いたい事が何となく掴める。

「皆に可愛がつてもらいたいけどね。不幸な子も出たくないわけ。わしの我侭かもしれんね」

バレットさんはにこにこしていたが、初めて彼の真剣な顔を見た気がした。皆が黙る中、

「あんたはどうやって騙して連れて来たの？」

そう尋ねるアルフレートにバレットさんは、

「アンタはアレだ、エルフラしくない奴じゃのー」

と目をくりくりとさせた。仮にも依頼人、というバレットさんにする態度ではない、と冷や冷やするが本人は気にも留めていないようであった。

「まあわしもまた遊びたいの」

とビールを飲む科学者にローザが「それは約束出来ないわね」と返した。

「学園側にも報告する義務があるから。最初から最後まで、きつちりね」

何やら匂わせる言い方のローザにバレットさんは、
「また出禁かのー」

と肩を落とした。

彼には身から出た錆、という言葉を送りたいと思う。

依頼完了

翌朝のよく晴れ渡る空の下、バレット邸前で別れの挨拶をする。

バレットさんを先頭に猫達が門の前にずらっと並ぶ。ぱっと見てお初の顔もあり、全部で十数名。こんなにいるのか、と少しびっくりしてしまった。

「それじゃ、気をつけてな」

寂しそくにぽつりと呟くバレットさんとヘクターが握手をする。

「顔を忘れられないよう、また直ぐに来ます」

ヘクターの言葉にたちまちバレットさんは笑顔になった。きっと普段の生活は退屈なのだろう。もう少し家の外に出ればいいのに。

「洒落た言い回しするねえ、流石リーダー」

と茶々入れるアルフレートに、

「アンタと違って下品じゃないしな」

とフロロが返す。別れの間でも妖精二人は変わらない。

「絶対またくるにやー」

白猫タンタとわたしはがっちり抱き合った。見た目通りふわふわした毛が頬に当たり、気持ち良い。隣りで黒猫を抱いたイルヴァが「連れて帰りたいですねー」と漏らす。わたしが見ると、

「分かってますよう」

と頬を膨らませた。

バレットさんにサインを入れて貰った依頼完了の証明書を受け取り、わたし達は馬車へと乗り込む。山の麓までだが、行商の人に乘せていって貰えることになったのだ。もちろん護衛も兼ねてである。「上で胡坐かいてもいいぜ」と言われた荷物の上に座り込み、息ついた。

「忘れ物無いかい？」

馬の手綱を握る商人のおじさんがわたし達に尋ねる。大丈夫、と言おうとした時、馬車の扉をノックする姿に気がついた。表からタ

ンタが何かを窓の方へと持ち上げる。

「お土産にゃー」

小さな手に乗ったそれはバスケットだ。可愛らしい小花柄のクロスを開けると焼き菓子があった。

「あなたが作ったの？」

わたしが尋ねるとタンタは恥ずかしそうに身をよじらせる。

「タンタの趣味だにゃ」

「ありがとう、ぬいぐるみも大切にするね」

わたしはお礼を言くとタンタの頭を撫でた。イルヴァじゃないけどこんな姿を見ると連れて帰りたくなる。

「でも家、犬いるしな」

「あんたって時々ずれてるわね」

呟くわたしをローザが微妙な顔で見ている。

姿が見えなくなるまで手を振り続け、最後まで見えていた猫の耳が視界から消える。急に寂しくなってきた。村で一番大きな通りを過ぎれば出口はすぐそこ。窓の外の景色を眺める中、ふと目に入った女の子の姿にわたしは立ち上がる。

「あ！ち、ちよつと待って！ほんの少しだけ馬車止めてください！」

「忘れ物？」と振り返るおじさんにわたしは首を振り、窓から身を乗り出す。

「えつと、おはようございます！」

わたしの挨拶に窓の外で簾を掛けていた人物が驚いた様子でこちらを見た。

「あら！おはよう、今度こそ帰っちゃうみたいね」

何度か足を運んだ大衆食堂のウェイトレスは馬車に乗るわたし達にそう言った。

「うん、もう帰るの。……あのさ、バレットさんの事なんだけど、良い人だから！こんな事言っても意味分らないだろうけど、噂は違うから！詳しくは言えないんだけど、仲良くしてあげてくれない？」

わたしのしどろもどろの説明に目をぱちぱちさせていたが、ウエイトレスの女の子は可笑しそうに笑った。

「うん、分かったわ！今度飲みにくるよう誘ってみる。その分だと冒険も上手くいったのね？おめでとう」

その言葉にほっとして、わたしも笑顔を返す。馬車の中に体を戻すと、仲間のにやにやした顔があった。

「立派な冒険者らしいじゃんよ」

フロロの茶化しにわたしはふんぞり返った。

「でしょう？皆の平和と友好の為に動くのが冒険者ですから」
「顔赤いけどな」

アルフレートの突っ込みには「うるさいわね」と返す。

ごとりごとりと馬車の振動が大きくなった。山道に入ったのだ。

「改めて考えも不思議な人達だったわね」

小さくなつていく村を眺め、ローザがぼつりと呟いた。

「変な人達だったね」

わたしもそう返す。横でヘクターも頷いている。

「世の中には我々など追いつきもしない変人がいるもんだ。勉強になつたじゃないか」

アルフレートの締めは微妙に納得いかないものだったが、とりあえず全員が頷いた。

イルヴァの肩に止まるイグアナの『フローラ』に目が行く。バレットさん、タンタを始めとした猫達を思い出して胸が熱くなる。初めての冒険が終つたんだ。へんてこりんで不思議なバレットさんと猫達だったが、お別れになるとどうしてこんなに寂しいんだろう。隣りから声がかかる。

「また、すぐ来れるよ」

ヘクターの声に頷く。彼とこんな風に話せるようになった事も、わたしにとっては神様からの贈り物のようなものだ。案の定、戦いの場面では良い所は一つもなかったわたしだが、言いよりの無い満足に満たされていた。

馬車を乗り継ぎ乗り継ぎで町に帰ってきたわたし達は、真っ先に学園に戻る。全員の意見が一致して「まずは教官達の所へ」となったのだ。

『やってやったぜ、ざまーみる』という気分で学園内を歩く。しかしまだ冒険中の生徒が多いのか、同期生の姿が無い。少し不服だが一泡吹かせる相手は教官達が本命だ。

「帰りました！やりました！報告に上がりましたー！」

わたしはそう叫びながら、どーんと扉を開け放つ。教官室に乗り込んだわたし達を見て、しんとなる大人達に「あれ？」と思ったのだが、

「ほ、本当か！」

手を前に突き出しながら駆け寄る学年主任のメザリオ教官に身を引く。

「ほ、本当ですよ。ばっちり依頼人からのサインも貰ってきてます」

ローザが書類を取り出し、教官の前に突きつけた。暫く無言でそれを凝視していたメザリオ教官は、次第に目を真っ赤にし、

「よくやった」

と全員の手を握って回る。あ、なんかわたしもちょっと泣きそうかもしれない。

ふと隣りに現れた影にびくりとし、涙が引つ込む。コルネリウス教官だ。この状況で怒られるとは思わないが、この教官を前にすると自然と緊張が走るのだからしょうがない。

コルネリウス教官も無言でメザリオ教官の手に渡った書類を眺めてみたが、

「立派になって」

と泣き始める。ハンカチを眼鏡の奥に押し付けながらわたしの頭を撫で回した。他の教官からも「かわいい子には旅させろって本当ですねえ」などの言葉と共に拍手を貰う。あまりの反応に複雑な気持ち

ちになってきた。

「ちよつとあんまりじゃない？」

そう言うローザとイルヴァが顔を合わせる後ろ、扉が再び開く。

「終わりましたー！」

そう言いながら満面の笑みで入ってくる集団。同期生の別のパーティだ。その中の一人と目が合い、お互いに「あ」と声が出る。

「お帰り、上手くいったの？」

黄緑頭を黒いローブですっぽり覆ったディーナに尋ねる。すると彼女は口を尖らせた。

「あああたり前じゃない。リジアみたいな子が上手くいくんだから、私だってこのくらいなんて事無いわよ」

そう言つてふん、と鼻を鳴らすディーナだったが、仲間の集団が教官達を囲んでいる姿を見ると小声で話し出す。

「……実はジリヤがスカウトされて、そのパーティの友達グループを紹介して貰えたの」

その話にわたしはジリヤのオレンジ頭を思い出す。へえ、スカウトなんて凄いな。

「結局自分じゃ動いてないんだけど、それでも良いってコルネリウス教官が珍しく褒めてくれたんだ」

ぽつりぽつりと話す彼女に胸がじんわりとする。すると、

「ディーナ、ご飯食べに行こう！」

部屋を出ようとするディーナのパーティメンバーが手を振っている。随分背の高い女戦士だ。

「良い人そうね。かつこいいし」

ストレートのロングヘアが揺れる女戦士は顔は人懐っこく、女のわたしから見ても素敵だった。

「で、でしょう？」

ディーナは少し頬を赤らめながら、自慢げに胸を張った。

そのまま部屋を出て行くディーナパーティを見送っていると、

「な、なんだそれは、話が全然違うじゃないか」

メザリオ教官の声にはつとずる。その教官の前で眉間にしわ寄せるローザ。二人の様子からして、今回の旅のあらましを話したらしかった。

「そうよお、困っちゃった。結局頼まれた物は本当に研究に使うしかつたから良かったけど、変なダンジョンに付き合わされた挙句に『こういう趣味だから』なんて言われちゃうんだもの。怒る気も無くなるわよね」

厳しい顔をするものの、困ったような空気を感じるメザリオ教官の横で、コルネリウス教官の顔が仮面のような無表情に変わっていく。フロロが「こ、こええよ」と呟いた。

そのままコルネリウス教官は机に向かうと「あの糞ジジイ、この国でもまだこんな事やってるのか」とぶつくさ言いながら、何かを書き始めた。小花模様の薄く入った綺麗な便箋を見るにどうやら手紙らしい。

「……え、何、知り合い？」

そう尋ねるメザリオ教官にコルネリウス教官は舌打ちする。

「私の前の赴任先で問題視された依頼人です。同じように簡単な依頼内容で生徒を呼びつけて、自前のダンジョンとかいう物を用意して生徒の反応を見る、という事を毎回やっていたんです。危険性は無くても依頼と実際の内容を毎回故意に変更するので、前の学園では『お断り』していた人物なんですよ」

コルネリウス教官の早口な説明にメザリオ教官は「あー……」と呟くのみだった。ガリガリと手紙をしたためる相手の迫力に押されたのだろう。

「前の赴任先に確認を取ります。あと、明日私もバレット邸に確認に参ります」

きびきびと動くコルネリウス教官の言葉を聞くに、バレットさんはうちの学園も今回限りの付き合いになるに違いない。

「……行こうか」

急に張り詰めた空気になる教官室を前に、ヘクターがそつと提案し

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3901y/>

タダシイ冒険の仕方【改訂版】

2011年12月17日19時49分発行